―― 千葉県市原市 ――

# 能満上細工多遺跡・能満上新関遺跡
# 能満番面台遺跡・能満旧三山塚

1999

市原市（土木部道路建設課）
財団法人　市原市文化財センター

# 序　　文

市原市は、房総半島の中央部に位置し、豊かな水と緑の大地にめぐまれ、古来より人類の活動の舞台となってまいりました。市内の各所には、そうした先人の足跡である遺跡を多くみることができます。とりわけ、奈良時代には国府・国分寺が栄え、県内でも多くの古代寺院跡や官衙跡の所在するところとして知られています。

一方では、京葉コンビナートの中枢として、あるいは首都圏のベッドタウンとして、交通網の整備や住宅地の造成が進みつつあります。こうした状況は、国民共有の財産である遺跡の保護・活用と開発との調製という困難な問題を惹き起こしていることは、よく知られていることと思います。当センターも、関係各方面のご指導とご協力を得て、先人の足跡を後世に伝えるために、微力を尽くしているところです。

ここに報告する能満上細工多遺跡、能満上新関遺跡、能満番面台遺跡、能満旧三山塚の発掘調査は、市道１１４号線改良工事に伴なって実施したもので、遺跡は従来より上総国府の有力な候補地とされてきた能満地区に所在しています。今回の調査地は限られた範囲でしたが、古代官衙跡の一郭と推定される遺構を検出し、本地区が古代において果たした重要な役割をうかがわせる成果を得ることができました。

本報告が、調査の記録として、研究者のみならず、広く市民の皆様の活用するところとなって、文化財保護思想の普及のために役立つことを切望しております。最後に、調査の実施にあたり、多大なご指導とご協力を賜った市原市土木部道路建設課、市原市教育委員会をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成11年３月

財団法人　市原市文化財センター
理事長　　小　茶　文　夫

# 例　　言

1．本書は、千葉県市原市能満2,038～１他に所在する、能満上細工多遺跡、能満上新関遺跡、能満番面台遺跡、能満旧三山塚の調査報告書である。

2．調査は、千葉県市原市土木部道路建設課による、市道114号線改良工事に伴い実施したものである。

3．発掘調査、整理作業、報告書作成作業は、以下のとおりおこなった。

発掘調査

能満番面台遺跡ならびに能満旧三山塚

昭和58年８月１日～昭和58年10月30日（確認・本調査）　調査担当　田所　真

能満上細工多遺跡ならびに能満上新関遺跡

昭和59年４月９日～昭和59年６月30日（確認調査）　調査担当　米田耕之助

昭和59年８月１日～昭和59年11月16日（本調査）　調査担当　宮本敬一

整理作業

昭和60年４月17日～昭和61年３月28日　整理担当　宮本敬一　田所　真

4．昭和58年度調査の調査コードは、セ－９である。

5．昭和59年度調査については、下中貝遺跡の呼称で確認調査ならびに本調査を実施している（調査遺跡コード　セ－13)。しかし、本調査を実施した範囲が小字名「下中貝」に及んでいないこのことから、本センター59年度年報では、中心部の小字名を採って上細工多遺跡に名称を変更した。本報告書では、さらに上細工多遺跡Ｂ地区ならびにＣ地区を「上新関遺跡」に変更して、報告するものである。

| 調査時の名称 | → | 年報掲載の名称 | → | 本報告書記載の名称 |
|---|---|---|---|---|
| 下中貝遺跡Ａ地区 | → | 上細工多遺跡Ａ地区 | → | 能満上細工多遺跡 |
| 下中貝遺跡Ｂ地区 | → | 上細工多遺跡Ｂ地区 | → | 能満上新関遺跡Ａ地区 |
| 下中貝遺跡Ｃ地区 | → | 上細工多遺跡Ｃ地区 | → | 能満上新関遺跡Ｂ地区 |

6．本書の原稿執筆は、宮本敬一、田所真、櫻井敦史の三名で分担した。

宮本敬一……Ⅳ章１～３・４の(2)・５

田所　真……Ⅱ章・Ⅲ章・Ⅳ章４の(1)・Ⅴ章・Ⅵ章・Ⅶ章

櫻井敦史……Ⅳ章４の(3)

# 組　　織

## 発掘（昭和58年度）

### 役員

| 職名 | 役職名 | 氏名 |
|---|---|---|
| 理事長 | 教育委員会教育長 | 石井　正泰（7月16日まで）<br>星野　一郎（7月18日から） |
| 副理事長 | 教育委員会教育次長 | 石井　作二（9月19日まで） |
| | 教育委員会教育指導部長 | 横濱　辰夫（9月19日まで） |
| 常務理事 | 専任 | 井原　茂 |
| 理事 | 早稲田大学名誉教授 | 滝口　宏 |
| 理事 | 和洋女子大学教授 | 寺村　光晴 |

| 職名 | 役職名 | 氏名 |
|---|---|---|
| 理事 | 姉崎神社宮司 | 海上　信久 |
| 理事 | 市企画部長 | 川島　穣 |
| 理事 | 市総務部長 | 関　見旭代 |
| 理事 | 市都市部長 | 伊藤　昭 |
| 理事 | 市総務部財政課長 | 佐野　年男 |
| 監事 | 市下水道部企画調節質長 | 西賀　静雄 |
| 監事 | 市福祉事務所長 | 山中　定義 |

### 職員

| 所属 | 職名 | 氏名 |
|---|---|---|
| 庶務課 | 課長 | 小茶　文夫 |
| | 主事 | 浅利　幸一 |
| | 主事補 | 相野　光江 |
| | 事務員（嘱託） | 秋田　晴美 |
| 調査課 | 課長 | 郷田　良一 |
| | 主任調査研究員 | 山口　直樹 |
| | 兼調査研究員 | 浅利　幸一 |

| 所属 | 職名 | 氏名 |
|---|---|---|
| 調査課 | 調査研究員 | 森本　和男 |
| | 調査研究員 | 近藤　敏 |
| | 調査研究員 | 高橋　康男 |
| | 調査研究員 | 田所　真 |
| | 調査研究員（嘱託） | 鈴木　英啓 |
| | 事務員（嘱託） | 高浦　貞子 |

## 発掘（昭和59年度）

### 役員

| 職名 | 役職名 | 氏名 |
|---|---|---|
| 理事長 | 教育委員会教育長 | 星野　一郎 |
| 副理事長 | 教育委員会教育指導部長 | 横濱　辰夫 |
| 常務理事 | 専任 | 井原　茂 |
| 理事 | 早稲田大学名誉教授 | 滝口　宏 |
| 理事 | 和洋女子大学教授 | 寺村　光晴 |
| 理事 | 姉崎神社宮司 | 海上　信久 |

| 職名 | 役職名 | 氏名 |
|---|---|---|
| 理事 | 市企画部長 | 櫻井　徹郎 |
| 理事 | 市総務部長 | 松崎　良一 |
| 理事 | 市都市部長 | 中島　英夫 |
| 理事 | 市総務部財政課長 | 松下　隆 |
| 監事 | 市会計課長 | 白鳥　一夫 |
| 監事 | 教育委員会総務課長 | 山口　節 |

### 職員

| 所属 | 職名 | 氏名 |
|---|---|---|
| 庶務課 | 課長 | 小茶　文夫 |
| | 主事 | 浅利　幸一 |
| | 主事補 | 相野　光江 |
| | 事務員（嘱託） | 秋田　晴美 |
| | 事務員（嘱託） | 塚本　和江 |
| 調査課 | 課長 | 郷田　良一 |
| | 主任調査研究員 | 山口　直樹 |

| 所属 | 職名 | 氏名 |
|---|---|---|
| 調査課 | 調査研究員 | 宮本　敬一 |
| | 調査研究員 | 米田耕之助 |
| | （兼）調査研究員 | 浅利　幸一 |
| | 調査研究員 | 近藤　敏 |
| | 調査研究員 | 高橋　康男 |
| | 調査研究員 | 田所　真 |
| | 調査研究員（嘱託） | 鈴木　英啓 |
| | 事務員（嘱託） | 高浦　貞子 |

## 整理（昭和60年度）

### 役員

| 職名 | 役職名 | 氏名 |
|---|---|---|
| 理事長 | 教育委員会教育長 | 星野　一郎 |
| 副理事長 | 教育委員会教育指導部長 | 横濱　辰夫 |
| 常務理事 | 専任 | 内藤　隆 |
| 理事 | 早稲田大学名誉教授 | 滝口　宏 |
| 理事 | 和洋女子大学教授 | 寺村　光晴 |
| 理事 | 姉崎神社宮司 | 海上　信久 |

| 職名 | 役職名 | 氏名 |
|---|---|---|
| 理事 | 市企画部長 | 松崎　良一 |
| 理事 | 市総務部長 | 斎藤　栄亮 |
| 理事 | 市都市部長 | 中島　英夫 |
| 理事 | 市総務部財政課長 | 松下　隆 |
| 監事 | 市会計課長 | 白鳥　一夫 |
| 監事 | 教育委員会総務課長 | 松本辰之助 |

### 職員

| 所属 | 職名 | 氏名 |
|---|---|---|
| 庶務課 | 課長 | 田丸　萬富 |
| | 主事補 | 大鐘　光江 |
| | 事務員（嘱託） | 秋田　晴美 |
| | 事務員（嘱託） | 藤沢ひとみ |
| | 事務員（嘱託） | 石渡あゆみ |
| 調査課 | 課長 | 清藤　一順 |
| | 主幹 | 石田　広美 |
| | 主幹 | 山口　直樹 |
| | 主幹調査研究員 | 宮本　敬一 |
| | 調査研究員 | 米田耕之助 |

| 所属 | 職名 | 氏名 |
|---|---|---|
| 調査課 | 調査研究員 | 田中　清美 |
| | 調査研究員 | 近藤　敏 |
| | 調査研究員 | 高橋　康男 |
| | 調査研究員 | 田所　真 |
| | 調査研究員 | 浅利　幸一 |
| | 調査研究員 | 大村　直 |
| | 調査研究員 | 木對　和紀 |
| | 調査研究員（嘱託） | 鈴木　英啓 |
| | 調査研究員（嘱託） | 半田　堅三 |
| | 調査研究員（嘱託） | 田中　新史 |
| | 事務員（嘱託） | 高浦　貞子 |

# 本　文　目　次

序　文　　理事長　小 茶 文 夫
例　言
㈶市原市文化財センター組織表

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と周辺の環境 …… 3
Ⅲ　上細工多遺跡・上新関遺跡の確認調査 …… 5
Ⅳ　上細工多遺跡の調査 …… 7
　1　調査の概要 …… 7
　2　溝跡と関連遺構 …… 8
　3　建物跡 …… 19
　4　出土遺物 …… 22
　　(1)　土器 …… 22
　　(2)　鉄製品 …… 24
　　(3)　宝篋印塔 …… 24
　5　まとめ …… 26
Ⅴ　上新関遺跡の調査 …… 30
　1　調査の経過と遺構の概要 …… 30
　2　先土器時代の基本層序と文化層 …… 31
　3　縄文時代の陥し穴 …… 32
　4　まとめ …… 33
Ⅵ　番面台遺跡の調査 …… 34
　1　調査の経過と遺構の概要 …… 34
　2　縄文時代の炉穴・土坑・陥し穴 …… 36
　3　溝の調査 …… 38
　4　まとめ …… 41
Ⅶ　能満旧三山塚の調査 …… 42
　1　調査の概要 …… 42
　2　まとめ …… 42

# 挿　図　目　次


第１図　調査年次区分と昭和57年度調査のトレンチ配置図 …… 2
第２図　遺跡の立地と周辺の環境 …… 4
第３図　上細工多遺跡・上新関遺跡確認調査のトレンチ配置図 …… 6
第４図　上細工多遺跡遺構配置図 …… 8
第５図　溝跡平面図 …… 10
第６図　溝跡断面図 …… 11～12
第７図　溝跡003遺構掘上げ面の時期区分 …… 14
第８図　溝跡埋土途中で確認できた遺構 …… 15
第９図　宝篋印塔出土状態 …… 17
第10図　SX014馬歯出土状態 …… 18
第11図　掘立柱建物跡016・017平面図及び断面図 …… 20
第12図　竪穴住居跡005平面図・断面図 …… 21
第13図　溝跡出土の土器と鉄製品 …… 23
第14図　溝跡003D出土宝篋印塔笠石 …… 25
第15図　字上細工多・下細工多の範囲と予想される遺跡の広がり …… 28
第16図　Ａ地区・Ｂ地区遺構及びグリッド配置図 …… 30
第17図　基本層序 …… 31
第18図　Ａ地点陥し穴全体図 …… 32
第19図　Ｂ地点陥し穴全体図 …… 33
第20図　番面台遺跡全体図 …… 35
第21図　Ａ地区の炉跡と陥し穴 …… 36
第22図　Ｂ地区の陥し穴と土坑 …… 37
第23図　溝跡平面図・断面図 …… 39
第24図　能満番面台遺跡出土遺物 …… 41
第25図　旧三山塚測量図・断面図 …… 43

# 図　版　目　次

図版１　遺跡周辺の航空写真
図版２　上細工多遺跡－１　東区全景（北より）
図版３　上細工多遺跡－２　西区全景（北より）
図版４　上細工多遺跡－３　西区全景（南より）
図版５　上細工多遺跡－４　東区全景（南より）
図版６　上細工多遺跡－５　上は左から溝跡001・004・002 右端は003（西区、西より）
下は手前から溝跡001・002（東区、北より）
図版７　上細工多遺跡－６　上は溝跡002（東区、北より）
下は溝跡002断面（東区東壁、西より）
図版８　上細工多遺跡－７　上は西区溝跡003全景（西より）下は東区003全景（南より）
図版９　上細工多遺跡－８　西区西壁断面 上から溝跡003・002・001（東より）
図版10　上細工多遺跡－９　掘立柱遺構015全景及び近景（西区、北より）
図版11　上細工多遺跡－10　上は溝跡003Ｂ底面に残る掘削工具痕（東区、東より）
下は溝跡003Ａ・Ｂ埋土に掘り込まれた掘立柱遺構
図版12　上細工多遺跡－11　上は宝篋印塔出土状況（東区、西より）
下は溝跡003C埋土に掘り込まれた014馬歯出土状況
図版13　上細工多遺跡－12　掘立柱建物跡016・017全景（西区、北より）
図版14　上細工多遺跡－13　上は掘立柱建物跡016全景（西区、東より）
下は同017全景（西区、東より）
図版15　上細工多遺跡－14　上は竪穴住居跡005全景（東区、南より）
下は埋土堆積状態（東区東壁、西より）
図版16　上新関遺跡　－１　Ａ区陥し穴遺構102・103全景（上は北より、下は東より）
図版17　上新関遺跡　－２　Ｂ区陥し穴遺構104・105・106・107全景（上は南、下は北より）
図版18　上新関遺跡　－３　上は陥し穴遺構102（Ａ区、北より）
下は陥し穴遺構104（Ｂ区、東より）
図版19　上新関遺跡　－４　上は陥し穴遺構105（Ｂ区、東より）
下は陥し穴遺構106（Ｂ区、西より）
図版20　上新関遺跡　－５　上は陥し穴遺構107（Ｂ区、東より）
下は陥し穴102（Ａ区、北より）
図版21　番面台遺跡　－１　上段上下は溝跡001全景（上は北より、下は西より）

下段上は溝跡002全景（西より）

下段下は溝跡002埋土堆積状態（西区東壁、西より）

図版22　番面台遺跡　－２　上段は溝跡002全景（西区、東より）

中段左は溝跡002埋土堆積状態（西区東壁、西より）

中段右は溝跡002上層馬歯出土状態（南より）

下段は土坑003全景（南より）

図版23　番面台遺跡　－３　上段は炉跡004・005全景（南より）

二段目左は炉跡005近景（北より）

二段目右は炉跡004近景（南より）

三段目は炉跡006・007陥し穴遺構008全景（東より）

図版24　番面台遺跡　－４　上段左は009・010全景（南より）上段右は009近景（東より）

中段左は010近景（南より）中段右は011近景（西より）

下段は012近景（西より）

図版25　番面台遺跡　－５　上段は013全景（西より）中段・下段は014全景（西より）

図版26　番面台遺跡　－６　上段は能満旧三山塚調査前現況（北より）

中段は同上（南より）　下段は築造状態（南より）

図版27　上細工多遺跡－15　出土土器

図版28　上細工多遺跡－16　出土鉄鏃・鉄滓、宝篋印塔等

図版29　上新関遺跡　－６　出土石器等

図版30　番面台遺跡　－６　出土土器等

# Ⅰ　調査に至る経緯

市道114号線改良工事を実施するにあたって、昭和57年８月30日付けで市原市長井原恒治より「埋蔵文化財の所在の有無およびその取り扱いについて（照会）」が提出された。この時点で照会された範囲は、市原市能満1,059番地の３から、2,054番地の11までの間、延長距離1,940ｍ、幅員12ｍ、総面積23,280㎡であった。このことから、市原市教育委員会が昭和57年９月３日付け市原教社第167号にて千葉県教育委員会教育長宛副申をおこなった結果、昭和58年５月13日付け教文第460-271号にて、全域にわたる土師器散布地と塚１基が所在する旨の回答があった。

市原市はこれに先行して昭和57年９月20日付け市道建第120号において文化財保護法第57条の３第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘（土木工事等）通知書」を文化庁長官宛提出し、これと平行して今後の取り扱いについて教育委員会と協議を進めることとした。

協議では、当該年度内に施工予定である北側2,000㎡について、早急に確認調査を実施することとなり、市原市教育委員会教育長石井正泰を調査主体者として、文化財保護法第98条の２第１項に基づき、埋蔵文化財発掘通知書を文化庁長官宛提出、昭和57年９月27日から昭和57年10月10日にかけて、確認調査を実施している。

調査は、施工範囲内の既存道路を除いた範囲に対して、施工道路走行に対してほぼ直行する東西方向のトレンチ12地点（第１図参照）によって実施した。調査の結果、本調査すべき明瞭な遺構の存在や、遺物の出土をみることはできなかった。

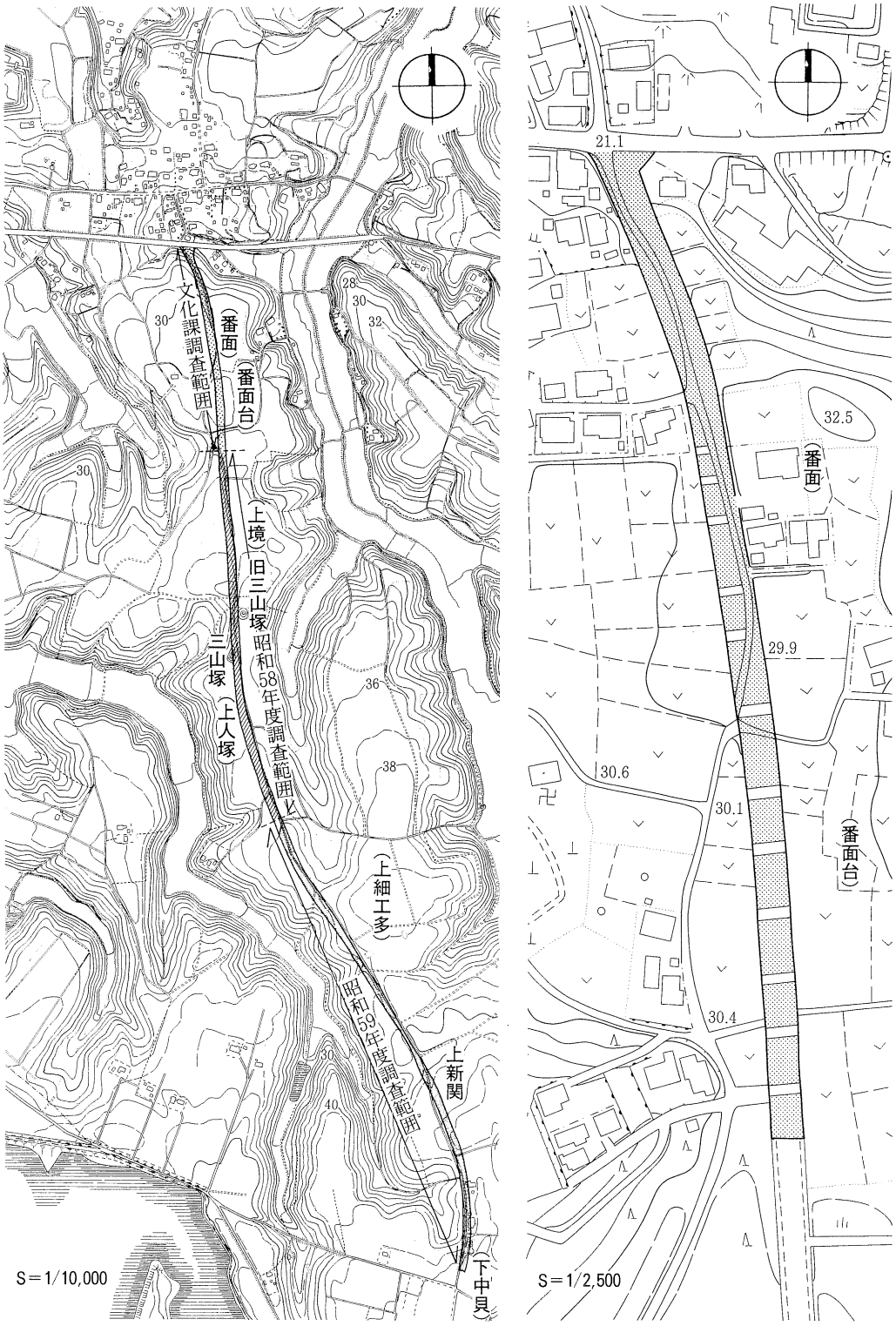
昭和58年度以降の施工対象地については、先に提出した照会に対する回答を得た上で、（財）市原市文化財センターへの委託事業によって、記録保存の措置を講じることとした。

事業では確認調査の結果を受けて、本調査範囲の確定を行い、別途本調査の範囲ならびに実施期間を協議するものとしたが、昭和58年度調査については、遺構の分布が希薄であることから、そのまま本調査に移行した。一方、昭和59年度調査については、確認調査の結果を受けて本調査の範囲を選定し、当該年度内に引き続き本調査を実施した。

尚、昭和58年度調査は、能満1,405地先の5,800㎡ならびに塚１基を対象とした。また、昭和59年度には、能満1,574～18地先の11,501㎡を確認調査の対象とし、このうちの1,000㎡について本調査を実施した。

それぞれの調査の実施期間ならびに整理作業実施期間は、本書例言の述べるとおりである。

（市原市教育委員会教育指導部文化課）




第１図　調査年次区分と昭和57年度調査地トレンチ配置図

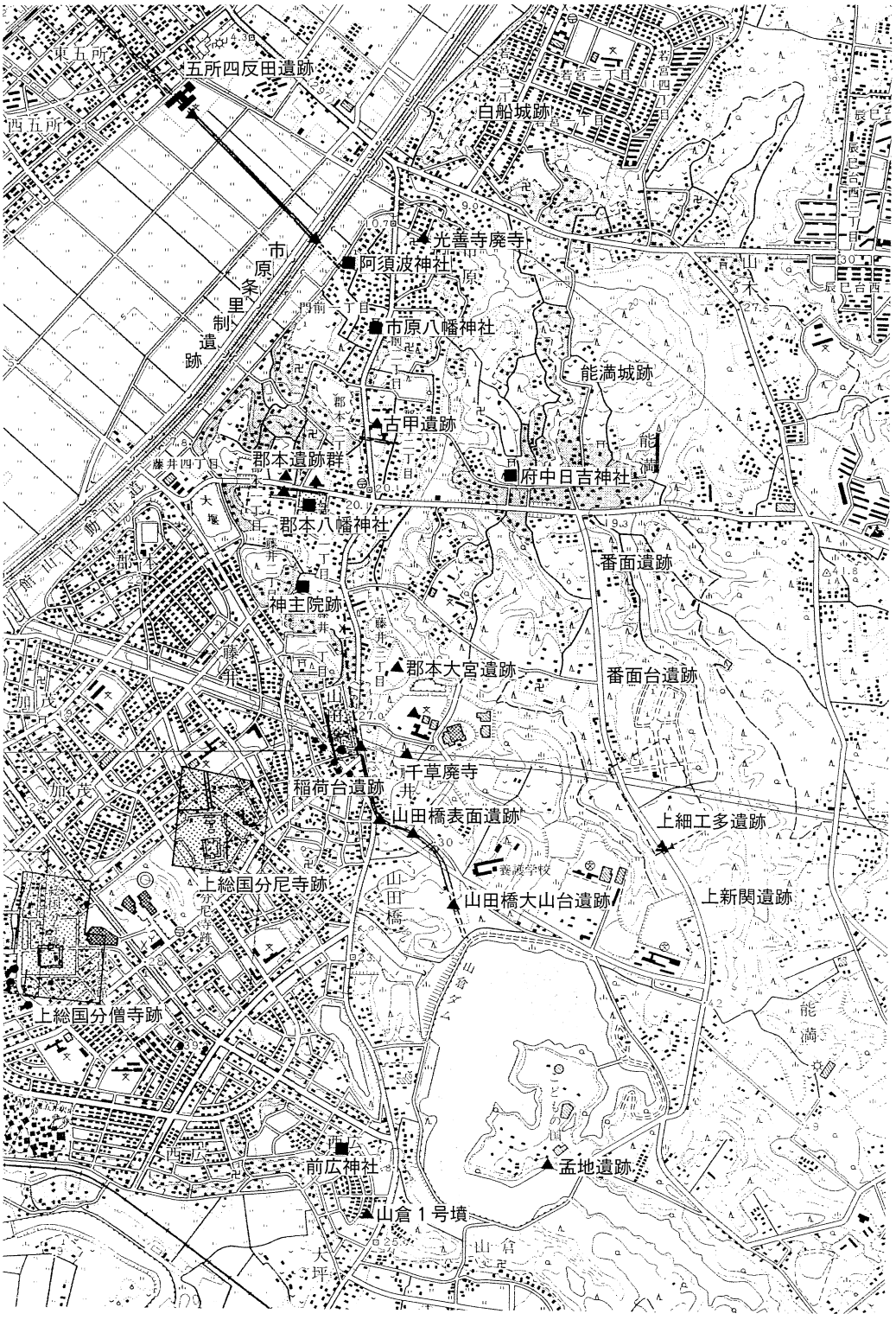
# Ⅱ　遺跡の立地と周辺の環境

八幡宿で東京湾に注ぐ小河川新田川は、上流の山木あたりから開析谷地形となって、南に迴行している。この谷は、能満城跡の先端でこれを取り囲むように分かれ、山木から約3.5km程入り込んでいる。この谷によって挟まれた洪積台地は、南に向かって緩やかに高くなる傾向を見せており、北端で標高20m前後、南端で標高42m前後となっている。台地上の平坦面は、東西に張り出す支谷によっていくつかのブロックに分断され、南から北へ向けて連なっている。

このブロックを単位として、それぞれに異なった時期や性格の遺跡が、展開している。まず北端から、能満城跡、番面遺跡、番面台遺跡、上細工多遺跡、上新関遺跡が連なって立地している。また、番面台遺跡のほぼ中央東端に、能満地区の旧三山塚が築かれており、ここから分かれて西に延びる平坦面にも、縄文時代からの複合遺跡崩山遺跡が周知されており、更に西側の先端部には、弥生時代後期の集落唐崎台遺跡が所在している。

次に、上細工多遺跡を起点として、周囲に奈良時代以降の遺跡を眺めてみると、西南西約2.4kmには上総国分僧寺跡、西方1.7kmには上総国分尼寺跡が知られており、当時はここから、七重塔などの荘厳な甍を眺めることができたであろう。また、このほかにも大小の寺院などが散見される。まず、北北西2.5km市原台地の先端には国分寺に先行する光善寺廃寺が知られ、西北西1kmの至近には国分寺以降に建立された千草廃寺が所在している。また、瓦葺きの建物は認められていないが、南南西1.3kmには瓦塔や瓦堂が表採された孟地遺跡があり、北東1.5kmには鎮檀具の発見された南大広遺跡が知られている。先に述べた能満城跡は、北北西2kmの台地先端を主郭とする城郭遺構であり、主郭周辺には城山や居心城といった地名を残している。縄張りには不明な点も多いが、主郭南方500mに鎮座する府中日吉神社の境内にも、土塁や虎口が現存している。神社の東側には、能満の現集落が展開しており、方形の街区と、堂場・馬場ノ内・西宿・東宿といった小字名を今に伝えている。また、堂場にはタテノウチと呼び慣わしている地点が含まれている。番面や番面台といった地名が、西宿・東宿の南側隣接地域に付けられている点も興味深い。もとより、上細工多の細工は、細工所に通じるものであろう。応安五(1372)年五月の「市原八幡五月會馬野郡四村配分帳」(覺園寺文書）の、嶋穴郷負担配分の中に「佃工所兄部　酒二瓶　菓子五合　粽三把」とあることを、付しておきたい。

能満の集落から谷を隔てた西側には、国府推定地古甲遺跡や、市原郡衙推定地郡本遺跡が所在している。郡本遺跡の南には、古代道に面して配された官衙遺跡稲荷台遺跡が知られ、市原台地の西側水田地帯には、かつて、条里制畦畔が残されていた。換言するならば、上細工多遺跡などの所在する市原台地周辺地域は、古代～中世の中枢を担った地域とすることができる。




第2図　遺跡の立地と周辺の環境

# Ⅲ　上細工多遺跡・上新関遺跡の確認調査

確認調査は、現道に沿って設定した、幅２ｍのトレンチ10ヶ所によって実施している。

調査は、はじめに草刈ならびにゴミ等の除去作業から開始し、北側の第１トレンチから順次、トレンチの設定→表土の除去→遺構確認面の精査→記録（写真撮影および実測）の手順で実施していった。また、検出された遺構については、一部、埋土の掘り下げを実施し、形態や帰属時期の確認も行った。

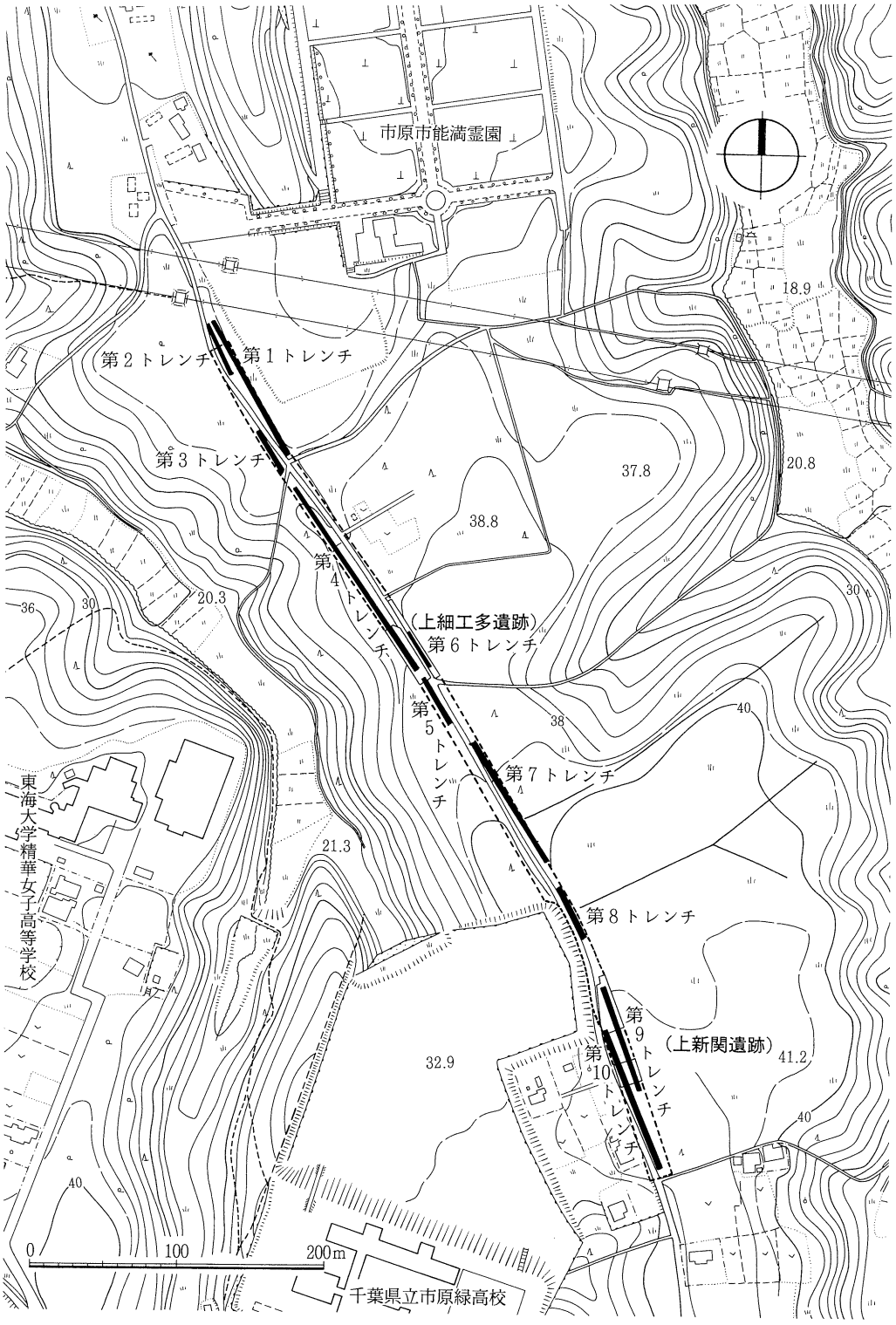
確認調査によって得られた所見は、以下のとおりである。

⑴　表土下の土層堆積状況は、極めて良好であることが確認された。遺構確認面であるソフトローム上面までの間に、Ⅰ層……明褐色土層（表土層）、Ⅰb層……黒褐色～黒色土層、Ⅱa層……褐色～黄褐色土層、Ⅱb層……黄褐色土層の４層の基本土層が確認されている。このうち、Ⅰa層は概して堆積が薄い。また、遺構外の出土遺物をみると、Ⅱa層～Ⅱb層において縄文土器（早期～前期）、黒曜石（チップ）、自然礫（焼石等）が、少量ではあるが出土している。

⑵　確認された遺構は、第４トレンチ南端から第６トレンチ（上細工多遺跡）で現道に直行する古代の溝３条、第10トレンチ北端（上新関遺跡）で縄文時代早期の陥し穴１基、計４遺構であった。

⑶　上細工多遺跡で確認された溝三条（001～003）は、検出された位置が東側から西に入り込んでくる支谷によって区画される平坦面の南端にあたっていること、規模が比較的に大きく区画溝と考えられること、002号溝からほぼ完形の土師器杯１点（第13図４）が出土していることなどから、溝の北側に展開する「何らかの重要な施設」（宮本敬一1985）の南辺の区画溝と判断された。但し、今回の確認調査の範囲内では、北辺の区画溝や施設の建物などを検出することはできなかった。尚、溝001～003の埋土内出土遺物をみると、001と002では土師器と須恵器の出土頻度が10：１と類似した傾向を示しているが、002には001に認められなかったスラッグが１点出土している（本調査においても、001からはスラッグが出土していない。）。また、003では内耳の焙烙や常滑が出土しており、やや新しい傾向が伺われた。但し、003は埋土の堆積状況から見て、数次にわたる堀直しが行われており、当初の時期を決定することはできなかった。

⑷　上新関遺跡で確認された陥し穴は、縄文時代早期のものと想定された。但し、遺構内からの出土遺物は見いだせなかった。また上新関遺跡では、第９トレンチと第10トレンチの試掘坑から、先土器時代のフレイク４点が出土した。このことから、本遺跡が西側に入り込んできた開析谷の谷頭部に立地することと併せて、先土器時代の本調査が必用なものと判断された。




第3図　上細工多遺跡・上新関遺跡確認調査トレンチ配置図

# Ⅳ　上細工多遺跡の調査

## 1．調査の概要

### 調査の経過

上細工多遺跡の本調査は、確認調査によって検出された市道114号線にほぼ直行する３条の溝跡を対象に、南北約60ｍにわたり、現道両側の拡幅部分を中心とした約593㎡の範囲を発掘調査したものである。

７月23日から９月12日にかけて、現道の東側（東区とする）を調査し、溝跡３条とこれにかかわる掘立柱遺構、竪穴住居跡１軒等を検出調査した。その後、迂回路の仮設工事を挟んで、９月23日から11月11日にかけて西側（西区とする）の調査を行い、溝跡４条とこれにかかわる掘立柱遺構、掘立柱建物跡２棟等を検出調査した。なおこの間、上新関遺跡２地点の本調査も平行して実施した。

### 遺跡の立地と基本層序

遺跡は養老川と村田川の沖積平野に挟まれた洪積台地に立地している。この台地は東京湾に流入する小河川によって開析されて、武士付近を起点に菊間から西広にかけて北西方向に樹枝状に広がり、先端部は海蝕崖となって終わっている。養老川河口に面した西端部には国分寺台遺跡群が、村田川河口に面した北端部には、市内で姉崎古墳群に次ぐ規模の菊間古墳群が立地している。遺跡の立地する台地は、この地域のほぼ中央に位置し、山倉ダムの東側から派生して、現在の能満集落付近で終わる。両側は八幡宿と五所の間で東京湾に注ぐ新田川の支谷に挟まれている。西隣の山田橋から市原地区にかけての台地上には、古代市原郡の官衙・寺院跡や上総国府の有力な推定地など重要遺跡が連なり、これらを縫うように古代道路跡が南北に通り、当遺跡の性格を考える上で見逃すことことの出来ない歴史的環境を形成している。

遺跡は、台地の付け根に近い標高38ｍ前後の平坦面に占地している。この平担面は、調査地点の南側で西から入る小支谷によって狭くなり、北側も北東から入る支谷の谷頭付近で狭まっている。こうした微地形的特徴から、遺跡の中心部はこの間に想定されるので、今回の発掘地点は遺跡の南端付近に当たるであろう。遺跡付近の台地の方向は北で30度前後西偏し、検出された遺構の方位も、ほとんどが台地の走行に平行ないし直交する。

調査時点でアスファルト舗装された現道部分の両側は雑木林であり、山林部分の基本層序は第１層が灰褐色土層、第２層が黒褐色土層、第３層が暗褐色土層である。遺構は第３層上面から掘り込まれている。厚さは、台地中央寄りの調査区東壁で第１層が25㎝前後、第２層が10～15㎝なのに対して、台地縁辺寄りの西壁ではそれぞれ15㎝前後と薄い傾向が認められた。

### 遺構の概要

検出された主な遺構は、遺跡の南辺を画する施設と推定される東西溝跡４条とこれにかかわる塀

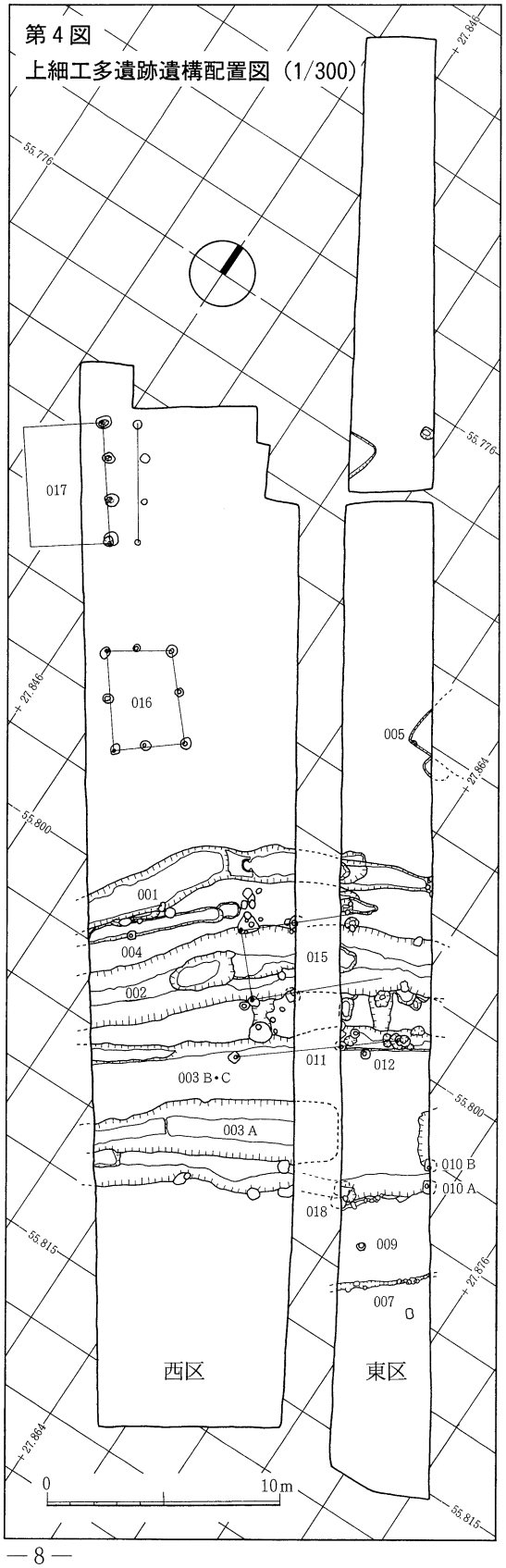
跡や門あるいは橋跡等と推定される掘立柱遺構、溝跡北側（内側）の小規模な掘立柱建物跡２棟と竪穴住居跡１軒である。

これらの遺構は、奈良時代に遡る可能性が高い竪穴住居跡を除くと、ほとんどが平安時代前・中期に属し、時間を置いて中世後期以降に小規模な土塁状遺構が築かれている。

遺構のうち建物跡や住居跡は概して小規模で、とりたてて目立つものではないが、溝跡には規模形状に注目すべき点がある。なかでも南端の003は二回以上堀り直されて、最終的には幅６、７ｍの大規模な溝状を呈していた。これらの溝は、ほぼ同一地点で、わずかに位置をずらしながら掘り直され、しかも各時期とも現道付近が出入口となっていた形跡があり、調査地点が長期間にわたって重要な境界であったことをうかがわせる。これだけの規模の古代の溝状遺構は、これまで市内でもほとんど調査例がなく、生活臭のする遺物が少ない点とあわせ、当遺跡の性格にかかわる興味深い特徴となっている。

## ２．溝跡と関連遺構（第５～10図）

発掘区のほぼ中央を横断するように検出された４条の溝跡（001・002・003・004）と、これらと関連する複数の掘立柱遺構（007・009・010・011・012・015等）などである。調査では、現道の切り回しの都合で、現道の西側部分を幅約２ｍにわたって掘り残さざるを得なかったが、結果的に掘



第４図
上細工多遺跡遺構配置図（1/300）

り残した部分はちょうど溝が途切れたり、湾曲したりする出入口部にかかり、掘立柱遺構もこの部分に集中していたため、それらの相互関係を把握する上で障害となった。

**溝跡 001**

北端に検出された上幅２ｍ前後、底幅1.0～1.3ｍ、深さ0.7ｍ前後の溝であり、西区西壁から６ｍ付近でくの字形に屈曲する。屈曲部には西から延びてきた溝が一旦止まっていたような形状が認められる。それより西側は深く、形態も整っているのに対して、東では幅も狭まり、次第に浅くなって東区東壁あたりで一旦終わっているようである。恐らく発掘区の東方に西側と同様な規模形状の溝が存在するのであろう。この間９ｍ前後は北側にやや張り出し、出入口であったと推定される。

堆積土は、炭粒（少）や基盤土粒が混入する暗灰褐色土が自然堆積している。堆積土下半は概してロームの混入が多く、よくしまっている。

**溝跡 002**

001の南側約２ｍをほぼ平行して走る上幅2.5～3.0ｍ、底幅0.5～0.8ｍ、深さ1.1ｍ前後の、幅や深さの割りに底面が狭い溝である。001と同様、くの字形に走向し、一見連続した溝のように見えるが、西側６ｍあまりは深く、形も整い、その東端には溝より深い長楕円形の掘り込みが存在する。この部分だけを見ると、上総国分尼寺跡の寺院地南北門前面の土橋両側に掘られた外周溝の掘削起点付近の形状と類似している。溝はさらに東に続くが、ちょうど掘り込みの東側でやや屈曲し、形状も変わるなど、ある時期、長楕円形掘り込み部分で溝が途切れ、001とほぼ同位置に出入口があったことをうかがわせる。

堆積土は、001に比べて基盤のロームや暗褐色土の混入が全体的に目立つが、暗灰褐色土を中心とする自然堆積である。堆積土は全体的によくしまり、上層には踏み固められたような硬化面が認められた。さらに、この溝の南壁寄り上層には、003との間に築かれた後世の土手状盛土遺構020の北側溝が掘られたようであり、堆積土には踏み固められた硬化土塊が混じる。

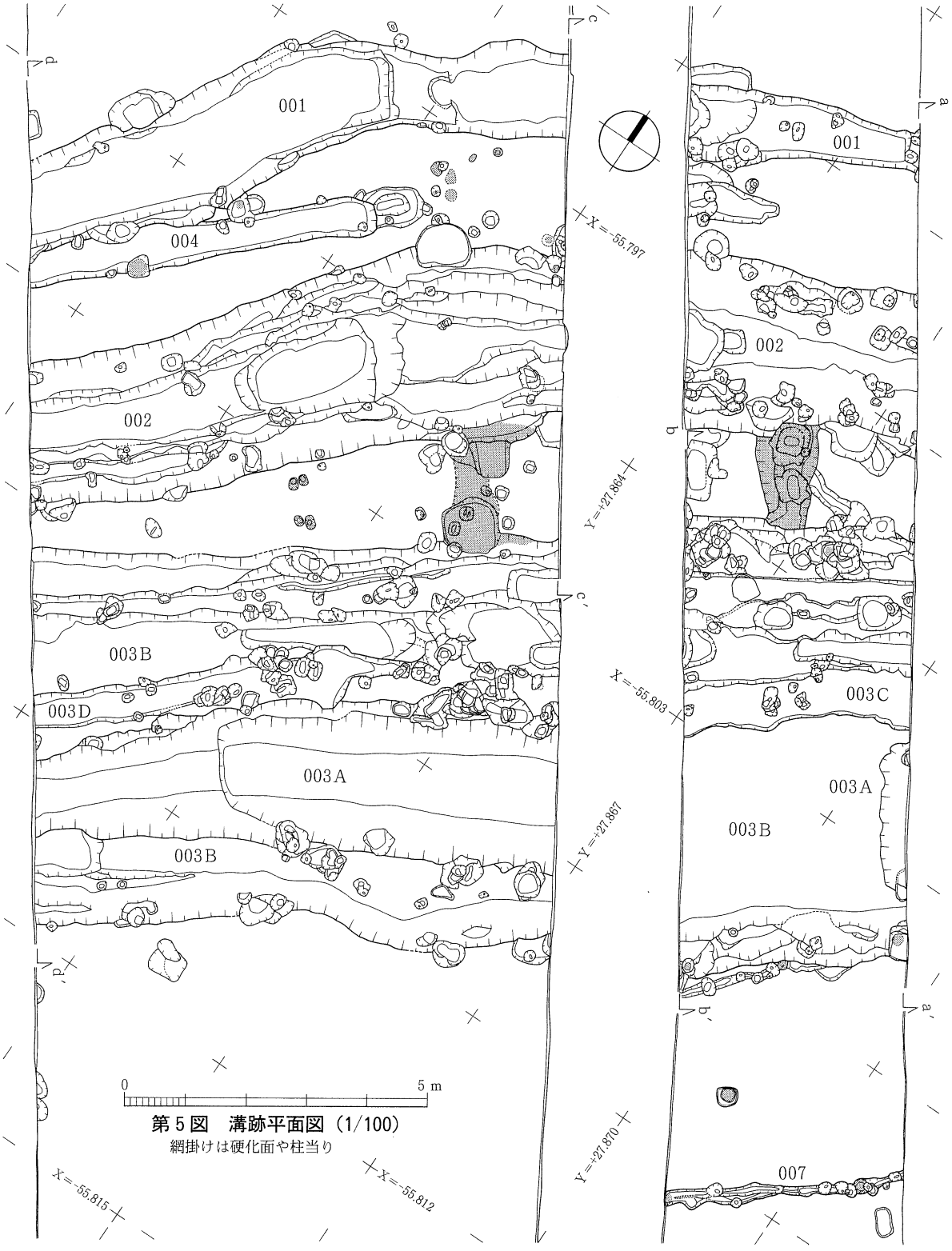
001と002は、規模こそ異なるものの、一定の間隔を保ちつつ、よく似た走向を示し、同時に存在した一対の遺構であった可能性がある。

**溝跡 003**

南端に検出された幅６～７ｍに達する溝である。しかし、この幅は、位置を前後にずらして最低２回掘り直された最終的な規模である。

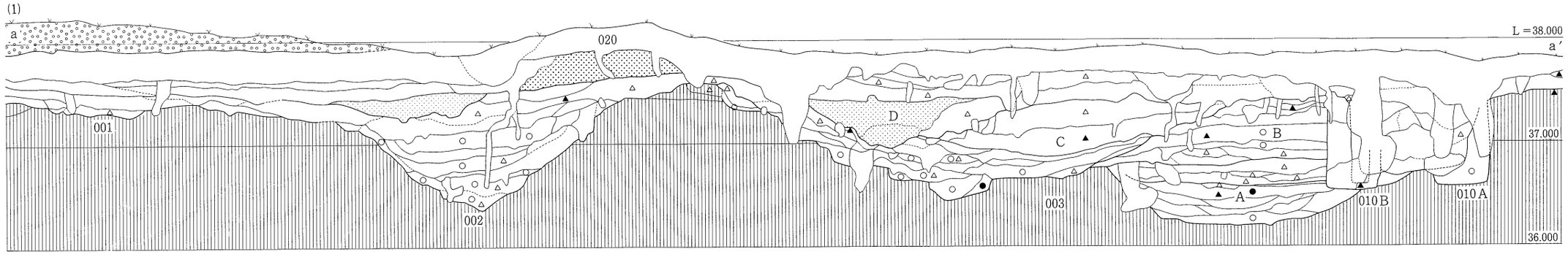
当初（Ａ）は、南寄りに掘られた現状上幅2.5ｍ以上（当時の地表面で3.5ｍ以上か）、底幅１ｍ以上、深さ1.25ｍと推定される断面逆台形の溝である。この溝は現道西側の未発掘部分で一旦止まり、東区東壁際から再び始まる。その間３ｍ余り（当時の地表面で）が土橋状の出入り口であったと推定される。その位置は001および002の出入口より中心が東に寄っていたことになる。

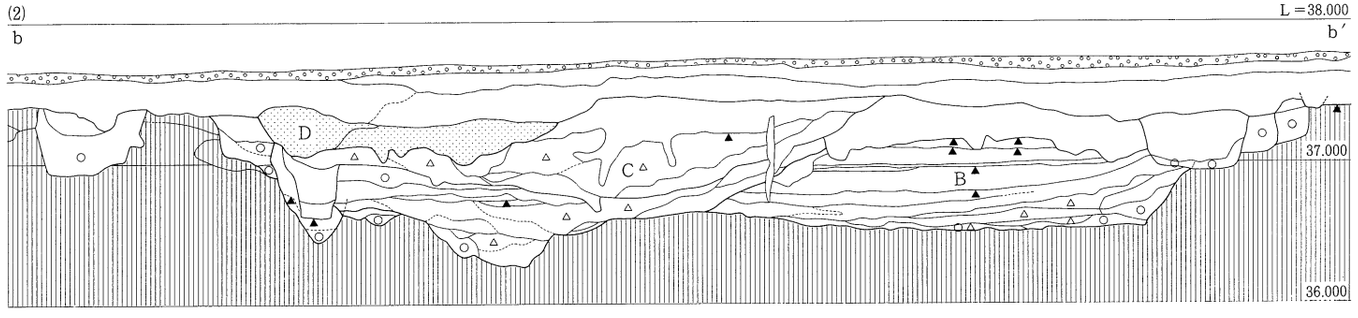
堆積土は、残存部が底に近いためか、ローム粒、暗褐色土、暗灰褐色土が混じり合った自然堆積




**第5図　溝跡平面図（1/100）**

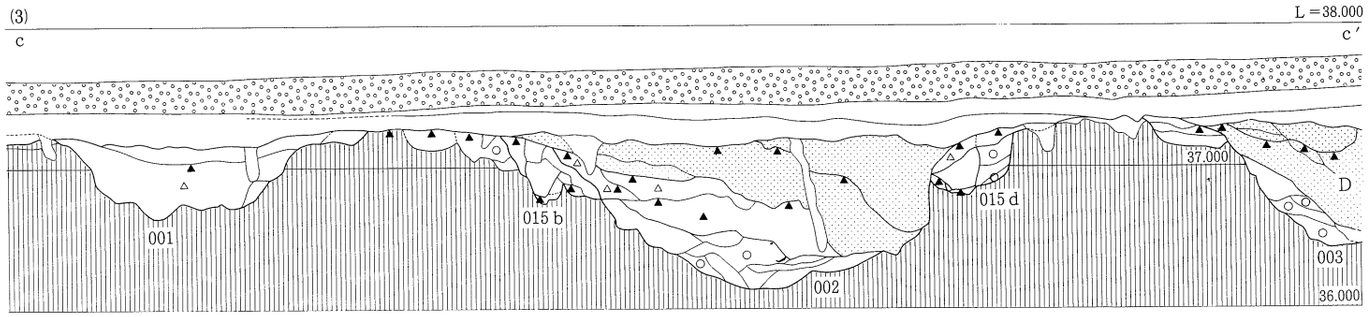
網掛けは硬化面や柱当り




## 第６図　溝跡断面図（1/50）

(1) 001～003横断面（東区東壁　a－a′）
(2) 003横断面（東区西壁　b－b′）
(3) 001～002横断面（西区東壁　c－c′）
(4) 001～004横断面（西区西壁　d－d′）
　b－b′、c－c′は現道にかかり、表土層上部が削平、転圧されている。



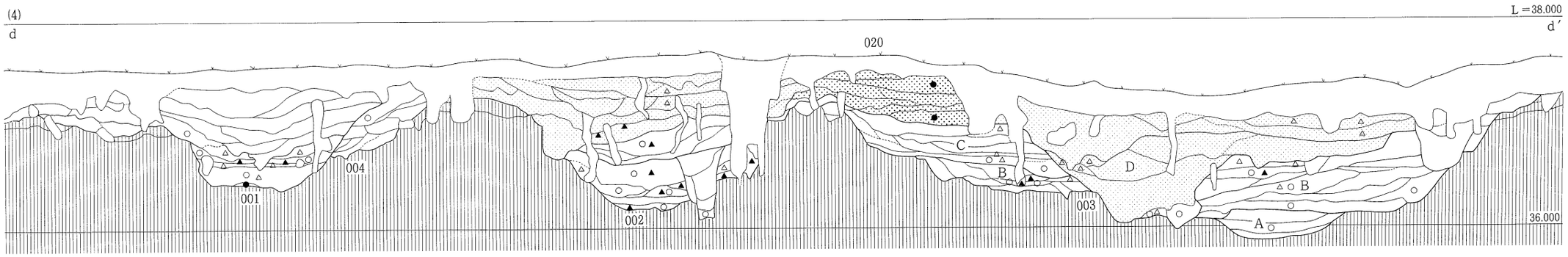

凡例

土塁状積土とこれに伴う溝跡

近代の客土および道路構造物

● ○　ローム主体層（黒丸）およびロームが比較的多く混じる層

▲ △　上面が硬化したり（黒三角）、比較的しまる層



である。とくに最下層の土は、団粒状で、しまりがない。遺物が極めて少ないので断定はできないが、8世紀に遡りそうな須恵器坏小片がA存続期間の一点を示すものであろうか。

次に（B）、ほぼ同位置で、上幅が南壁から6m近く、底幅4m以上、深さ1m前後に拡幅されている。底面は南にゆるく傾斜し、南壁寄りが深くなる。出入り口を土橋状に掘り残していた形跡は明確には捉えることができなかったが、現道付近の南壁の走向に乱れがあり、ほぼ同様な位置に出入り口があった可能性はある。

堆積土は、下層ではロームの混入が目立つ層もあるが、暗灰褐色土が自然堆積している。全体的によくしまっている。とくに現道付近では中層から上層にかけて、明らかに路面と考えられる踏み固められて著しく硬化した面が複数認められた。中央部は、窪んだ状態で、長期間にわたって通路となっていたようである。酸化鉄の沈着や薄い水成砂層が挟まっている部分もあるので、この間、透水性が悪く、一時的な流水や滞水のみられた時期があったのであろう。

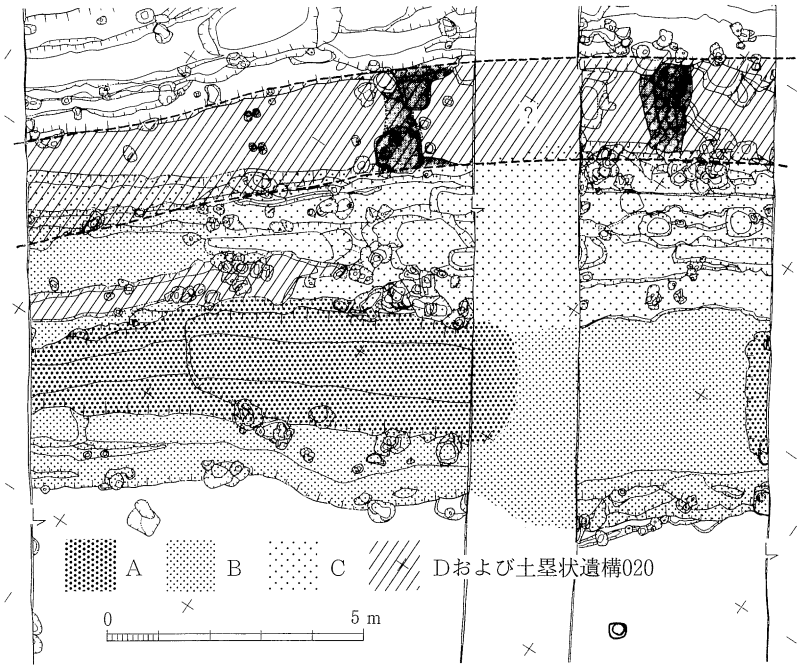
さらに（C）、中心を北にややずらして掘り直し、上幅5m弱、底幅2.4m前後、深さ0.8m前後の側壁の傾斜がゆるい皿状の溝となる。この段階も出入口を土橋状に掘り残していた形跡は捉えることができなかった。

堆積土は、暗灰褐色土主体の自然堆積である。概して各層は厚いが、しまっている。Bほど顕著ではないが、下層の一部に踏み固められた硬化面が認められた。

最後に（D）、Cの北壁寄りに幅2m前後、深さ0.5m前後の溝が掘られたようである。002との間に築かれた土手状盛土遺構020の南側溝の可能性が高い。堆積土は黒っぽい灰褐色土で、あまりしまっていない。西側斜面寄りでは、埋まりきらず、地表面が窪んでいる。

なお、溝跡003の底面には掘削時の道具痕跡が観察された。とくにB段階の底面には、連続する規則的な掘削痕跡が明瞭に残っていた（図版11）。

掘削痕跡は、ハードロームに鋭い跡をとどめているので、使われた道具は金属の刃先をもっていたのであろう。痕跡から推定される刃先は、幅16cm前後で、先端は丸い。個々の痕跡面は心もち内湾するが、押圧痕ではなく、刃先の形態とその動きによって合成された形状なので、刃部平面の姿を正確に反映しているわけではない。また刃先を手前にした時の痕跡は右側が深く、長い。刃先は流れず、きれい止まっている。掘削角度は、痕跡10個を無作為にクリノメーターで計測した結果、水平面に対して24度から40度の範囲であり、30度前後に集中している。こうした痕跡の特徴は、鋤取りや鋤起こしではなく、利き腕側（この場合右）にやや傾けた刃先を浅い角度で打ち込んでから、手前に引き起こすという連続的動作を示しているのであろう。さらに痕跡から推定される道具の動きは、労働姿勢や柄と刃部の角度を反映しているものと考えられる。想定される土掘り具は、柄と刃先が同軸上にあるスコップ状の鋤類ではなく、柄と刃先の軸線が交わる、幅の狭い鉄製の刃先を装着した鍬であった可能性が高い。



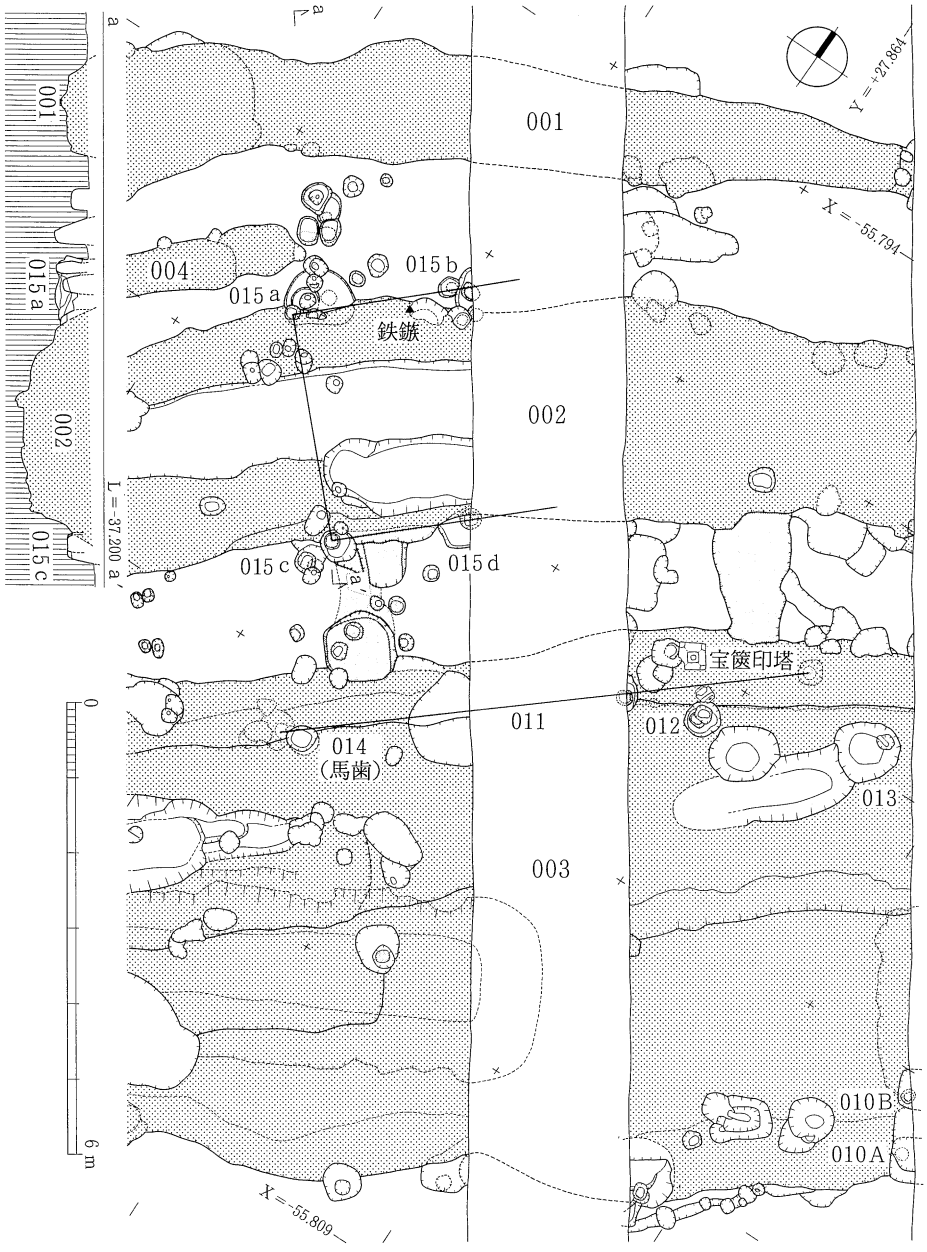

**第７図　溝跡003遺構掘上げ面の時期区分（1/150）**

**溝跡 004**

001と002間に検出された上幅0.7m前後、下幅0.4～0.5m前後、深さ0.4m前後の溝であり、一部が001によって壊されている。西壁から約６mのところで止まっている。その位置が001や002の開口部西端と一致するので、幅９m以上の開口部を間に挟んで、東側の溝が発掘区の東方に存在する可能性が高い。この溝は、小規模な割に形態がよく整い、堆積土も比較的きれいであり、短期間に埋没したのであろう。規模からみて、内外を隔絶するような実際的な機能は想定できず、区画施工に先立ち、計画線として掘られた溝であろうか。

**掘立柱遺構 015**

西区東壁際の溝跡002南北肩付近で溝を挟むように検出された４個の柱穴である。直径50～60㎝、深さ40～50㎝の円形の掘形に直径20㎝前後の柱痕跡が認められた。さらにそれぞれの柱穴のまわりには、底面や側面が硬化した浅い小さな穴が複数みられ、いずれが掘形に伴う柱痕跡か決めがたいものもある。周辺は通路になっていた時期があるため、遺構面自体が硬化している部分もあるので、これらの穴のなかにも二次的に硬化したものが含まれ、全てが柱穴であったとは限らない。組み合わせには他に選択の余地があるとしても、南北は３m前後、東西は２m前後の間隔となるであろう。方位も柱痕跡の位置によって変動の余地があるが、N42°20′Wであり、掘立柱建物跡016、溝跡004




**第8図　溝跡埋土途中で確認できた遺溝（1/100）**

粗い網：溝埋土　　細い網：柱当りおよび硬化面、ただし溝埋土途中の硬化面は示していない。西区002北肩付近の三角印は鉄鏃出土地点。

や次に述べる掘立柱遺構011に近い。この掘形は、溝跡002が掘り通された段階には、溝によって壊されているようである。埋土は基盤の黒褐色土や暗褐色土・ロームからなり、比較的きれいであり、柱痕跡にも粘土等の混入がみられない。こうした点でも溝跡004に近い時期の遺構といえるであろう。

この遺構については、発掘直後には、棟通りの柱穴を溝跡002によって破壊された東西棟八脚門の西隅間柱穴の一部である可能性も想定した。その場合に溝跡001と002の間に位置するはずの北側東隅間柱が痕跡すら認められないのは不自然であり、八脚門の一部である可能性は低いであろう。考えられるのは、四脚門の控柱か、溝が堀り通されていた時の橋脚である。四脚門としては、かなり小規模である。

**掘立柱遺構 011**

015の南約2.4mで、溝跡004C北肩のやや内側に沿って検出された目隠し塀風の3間分約7m、方位E39°20′Nの東西柱列である。東は発掘区外にさらに延びていた可能性がないわけではない。直径40～50cm、深さ80cm前後の掘形に直径20cm前後の柱痕跡が認められる。東区西壁断面にかかる東第2柱の所見では、掘形の溝内側部分は明らかに溝跡003Cに壊されているのに、柱痕跡ないし抜き取り穴部分は003C堆積土を貫いている。他の2個については、溝堆積土の途中では捉えられなかったので、断定はできないが、橋脚のように、溝内に柱が露出していた可能性も考えられる。掘形埋土は015より汚れている。

この柱列は、015を八脚門と考えた場合、方位や位置関係からその目隠し塀と想定した。しかし015が東西1間の施設となると、お互いの中心が一致しないことになる。002と003の間をつなぐように、015の西側に端を揃えて、底が踏み固められて硬化した南北方向の浅い窪みが存在し、同様な遺構が5m前後東に平行してみられる。この2条の通路状遺構の中心と柱列を3間とした時の中心はほぼ一致する。これらは、この部分に存在した出入口に関連する遺構と考えた方がよいであろう。具体的構造物は不明である。

**掘立柱遺構 010**

東区東壁際の溝跡003南岸付近に検出された柱穴である。規模形状が同じ柱穴が約40cmの間隔を開けて南北に2個並んでいる。共に掘形は一辺約60cmの隅丸方形であり、垂直に約1m掘り込まれている。北側（A）の掘形が南側（B）の柱抜き取り穴を壊している。共に直径15cm強の柱痕跡を伴う。位置関係や形状から、同じ施設の建替えによる柱穴の掘り直し状況を示すものであろう。共に003AおよびBがほぼ埋まりきった段階に掘られている。掘形埋土には黄白色シルトが混じるが、形態的には今回検出された柱穴のなかでは最もしっかりした遺構であり、古代の柱穴である感触が強い。これらと組み合う柱穴は調査範囲には存在しないので、どのような構造物になるのか不明である。もし003A東溝の起点付近に位置しているのが偶然でなければ、現道掘り残し部分に予想され

る003Ａ西溝の起点付近に、対応する西側の柱穴が存在する可能性が高いであろう。

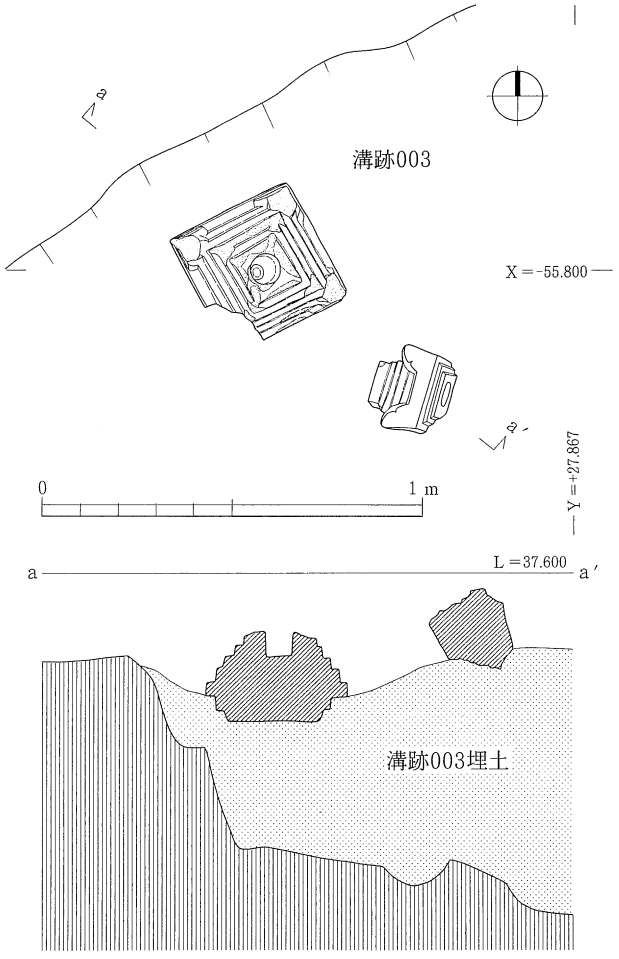
以上の他に、溝の内外には孤立した小穴が多数あり、なかには明確な柱痕跡を伴うものもみられるが、相互関係や性格は不明である。

また東区の003の南3.6ｍに平行して塀の布掘形風の狭い溝が存在する。003Ａ開口部の南を塞ぐ位置にあり、010と関連する遺構かもしれないが、極めて浅く、確証は得られなかった。

**土手状盛土遺構020**

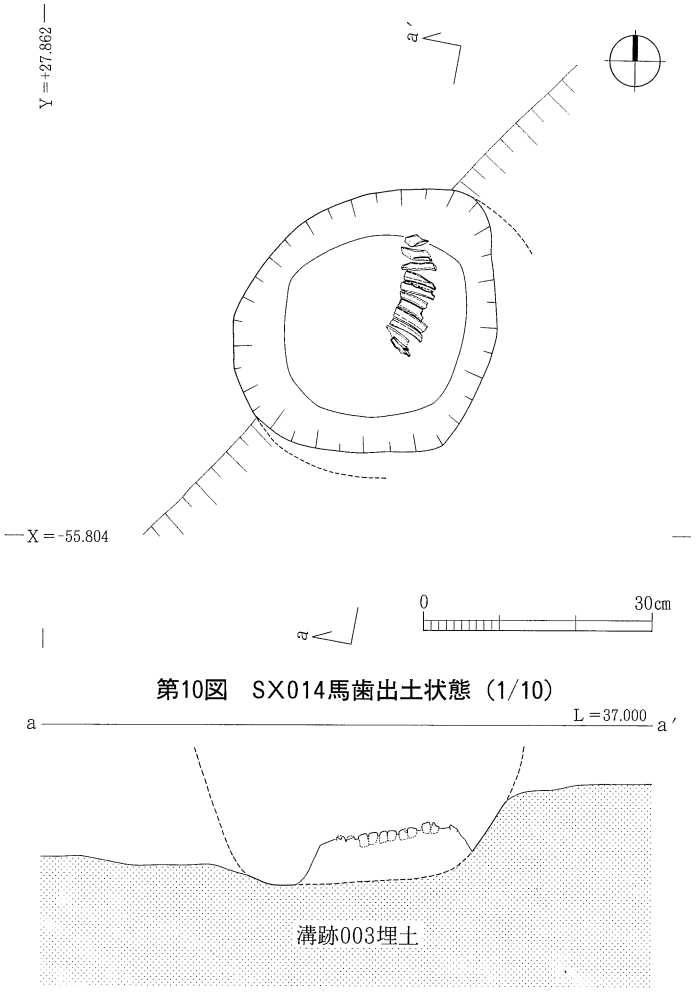
ちょうど002と003の間に基底幅２ｍ前後の低い土手状の積土が認められた。積土自体はそれほど堅牢とはいえないが、残りのよいところでは、厚さ10～15㎝のローム主体の土層と黒褐色土主体の土層が交互に積まれている。現状でも地表面が地ぶくれ状に盛り上がり、発掘区東方の山林中にのびているのが視認できる。高さは、積土底面から現地表まで測っても50㎝前後しか残存していない。積土の状態からみて、基底幅を大きく上まわるような高さは考えられないであろう。前後に小規模な側溝を伴うようであるが、両方とも古代の溝堆積土に掘り込まれていたため、調査段階には平面的に捉えることができず、盛土本体や側溝は現道部分で途切れていた可能性が高いにもかかわらず、遺構の上で確認するにはいたらなかった。

この遺構は、一見すると、古代の溝と関連性があるように見えるが、層位的には、盛土の一部が古代の溝堆積土の上に被さっている。002がほぼ埋まり、003Ｃは埋まりきらない段階に築かれた、両者より明らかに新しい遺構である。現場では側溝に伴う遺物を分離することができなかった。003から出土している中世後期以降の遺物がこれらの遺構に関連した活動に




**第９図　宝篋印塔出土状態（1/20）**

伴うものである可能性が高い。なかでも東区の003Ｃ北壁際の上層から出土した石製宝篋印塔笠石（第９図）は、すぐ近くの土層断面からみると側溝に伴う可能性が極めて高い。その場合、供養塔としての役割が終って遺棄された時点で、溝もほぼ埋まりきっていたという時間的関係にあり、側溝の掘削が中世に遡る可能性は十分にある。いずれにしても、古代の遺構群とは時間的にかなり隔たりのある遺構と推定される。ただし、その位置が古代の区画遺構とほぼ一致する点は、全くの偶然というよりも、古代以来の何らかの境界規制が反映された結果ではなかろうか。




第10図　SX014馬歯出土状態（1/10）

**馬歯埋納遺構ＳＸ 014（第10図・図版11）**

西区の溝跡003Ｃ堆積土に掘られた直径40㎝前後の円形の穴から成獣と推定される馬の歯列の一部（臼歯）が出土した。上下いずれか一方の顎の片側の臼歯６本分がほぼ連接して遺存していた。咬合面は横を向き（横倒し）、歯根の形状から北が唇側と推定される。もともと片側だけだったのか、切歯や他方の臼歯は消失したのか現状からは判断できない。上下いずれか一方のみの顎骨が埋納されていた可能性が高い。他に伴出物もなく、性格は不明であるが、頭蓋骨の一部だけを埋納したのであれば、死馬の通常埋葬というより、何らかの祭祀行為に伴う遺構かもしれない。時期は溝跡 003Ｃ埋没以降であり、古代に遡るという確証もない。

## ３．建物跡

**掘立柱建物跡 016（第11図）**

溝跡 001の北６ｍ付近に南妻を置く桁行２間、梁間２間の庇をもたない南北棟建物である。南妻の中央と東隅の柱位置が不確実ではあるが、柱間寸法が不揃いで、柱筋の通りも悪い、ゆがみの強い小規模な掘立柱建物である。柱痕跡の明確な西側と北妻の隅柱心々（検出面での柱痕跡の輪郭が不明瞭であったため、柱底の当たり心を柱心とした）で計測した実長は、西側が4,197ｍ、北妻が2,833ｍである。東側はやや狭く、南妻はやや広くなるようであるが、計画寸法は桁行が14尺、梁間が9.5尺と推定される。それぞれの柱間も等間ではなく、平側では南を、妻側では東を広くしている。施設全体に占めるこの建物の位置や機能に起因するものであろうか。

建物方位は、西側柱筋がＮ39°50′Ｗ、北妻柱筋がＷ34°10′Ｓである。妻中央柱通り（棟方向）ではＮ40°Ｗ前後と推定される。平および北妻の中央柱は、隅柱の心通りから柱一本ないし半分位、外側に外れる。柱掘形は丸味が強く、一方に心もち長めの不整隅丸方形である。隅柱は長径45㎝前後、深さ50～60㎝であるが、中間柱はひとまわり小さく浅い。柱痕跡から、直径15㎝前後の丸柱と推定される。穴を掘って柱を抜き取った形跡はない。掘形埋土は、掘り上げた土をそのまま埋め戻した状況であり、混ざり物はほとんどない。柱痕跡土はやや汚れているが、建物跡017に比べるときれいであり、埋土からみる限り、017より古そうである。

この建物の南東隅近くには、直径18㎝前後の柱底当たり風の硬化面を伴う、直径と深さが35㎝前後の柱穴二個が約1.4ｍの間隔をあけて東西に並ぶ。方向は建物跡016の妻方向にほぼ平行するが構造的な関連性は想定しがたい。時期の異なる構造物が重複している可能性が高い。西方にはさらにのびる可能性はあるが、南北方向には関連する柱穴がみられず、建物にはならないであろう。

**掘立柱建物跡 017（第11図）**

溝跡001の北15ｍ付近、建物跡016の北4.68ｍ付近に南妻を置く桁行３間の南北棟と推定される掘立柱建物である。主要部が発掘区の西側にのびているため、梁間は不明だが、２間と推定される。隅柱の柱底当たり心々で計測した桁行実長は5.158ｍである。柱が若干内傾（内転び）していたようなので、柱底では地表部より長めになたっている可能性があり、計画寸法は17尺とみられる。柱間寸法は、南側二間が６尺等間、北隅間が５尺と狭くなる。梁間の柱間寸法は、発掘区内には次の柱穴がまったくかかっていないので、５尺以上になることは間違いない。方位は隅柱心々で37度強西偏している。中間柱は隅柱心通りから東側（外側）に18㎝前後外れる。建物跡016とは方位、柱通りに関連性がなく、時期を異にする建物であろう。

柱掘形は長径60㎝前後の丸味の強い隅丸長方形であり、深さは60～70㎝である。ただし北第二柱はやや小さく浅い。掘形長軸は柱筋にほぼ平行ないし直交する。埋土は掘り上げた土をそのまま戻した状況であり、ややしまってはいるが、とくにつき固められた様子ではない。柱は掘形の底に達

第11図　掘立柱建物跡016・017平面図（1/100）
及び断面図（1/80）

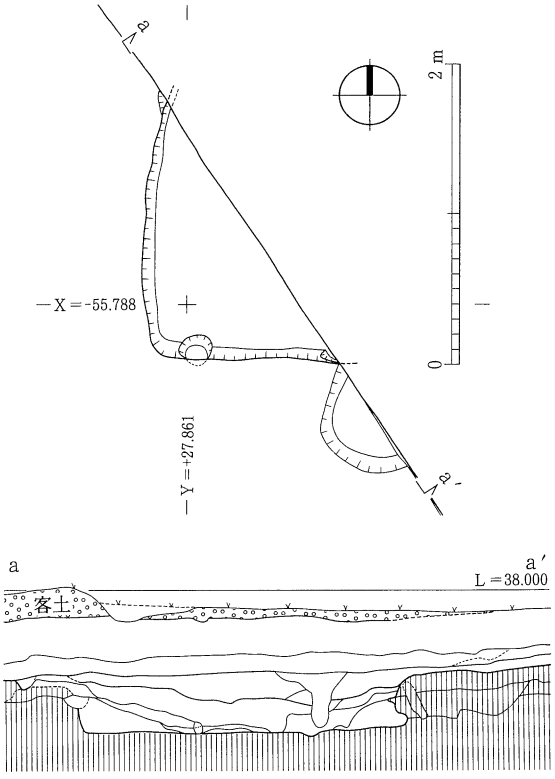
網掛けは柱当り硬化面

し、硬化変色した直径18㎝前後の丸い当たりが明瞭に残るので、礎板等は用いられなかったようである。柱は抜き取られている。抜き取り方向は必ずしも建物外側ではない。抜き取り穴の埋土には白色シルトが混じる。南側の二個の掘形内には、柱痕跡東側（外側）の埋土上層に柱当たり風の硬化面が観察された。軸部柱に添う束柱の柱底痕跡かもしれない。

この建物の東側1.50～1.20ｍに直径20～40㎝、深さ10㎝前後の浅い円形の穴が南北に４個並ぶ。建物軸部の柱列とは完全な平行関係にないが、南北がちょうど隅柱の脇で終わっている。しかも、中間２穴の位置が東側に外れるところも建物中間柱の在り方と似ており、建物に関連した構造物の柱穴とみられる。明瞭な柱底当たり痕跡をとどめないのは、荷重があまりかからない構造だったのであろう。また穴が浅い点では、目隠し塀のような自立した構造物というより、建物と一体的な構造の庇や縁がふさわしい。しかし先に述べた束柱の当たり風の痕跡は建物の外側にみとめられ、今回の調査範囲では建物内部に床束痕跡はみとめられず、床張りかどうかわからない。東側にさしかけ風の軽易な構造の庇が設けられていたのかもしれない。いずれにしても、この建物が東向きの平入りであった可能性を物語る遺構であり、建物の東側には、施設の南開口部から北にのびる通路が存在していたことを想定させる。

**竪穴住居跡 005（第12図）**

東区の溝跡001の北５ｍ付近の東壁際に検出された。南壁約1.25ｍ、西壁約1.75ｍ分が調査区にかかる。深さは35㎝前後であり、床面はほぼ平らで、やや硬化している。壁沿いに溝はなく、調査範囲内には柱穴、炉、カマド等もみられないが、形状からみて古墳時代以降の小規模な方形竪穴住居の南西隅部であろう。遺構内には、細かい焼土粒を少し含むが、粘土類は混じらない比較的きれいな土が中央に向かって流れ込むように堆積し、自然堆積と推定される。




第12図　竪穴住居跡005平面図・断面図（1/50）

年代特定に結びつく遺物は、堆積土中から出土した８世紀代の特徴をもつ

須恵器無高台坏の回転へら削りされた底部小片にすぎないが、調査区内では真南北に近い方位をとる唯一の遺構であることも考えあわせると、溝に伴う一群の遺構群に先行する、奈良時代までさかのぼる竪穴住居跡である可能性が高い。

## 4　出土遺物

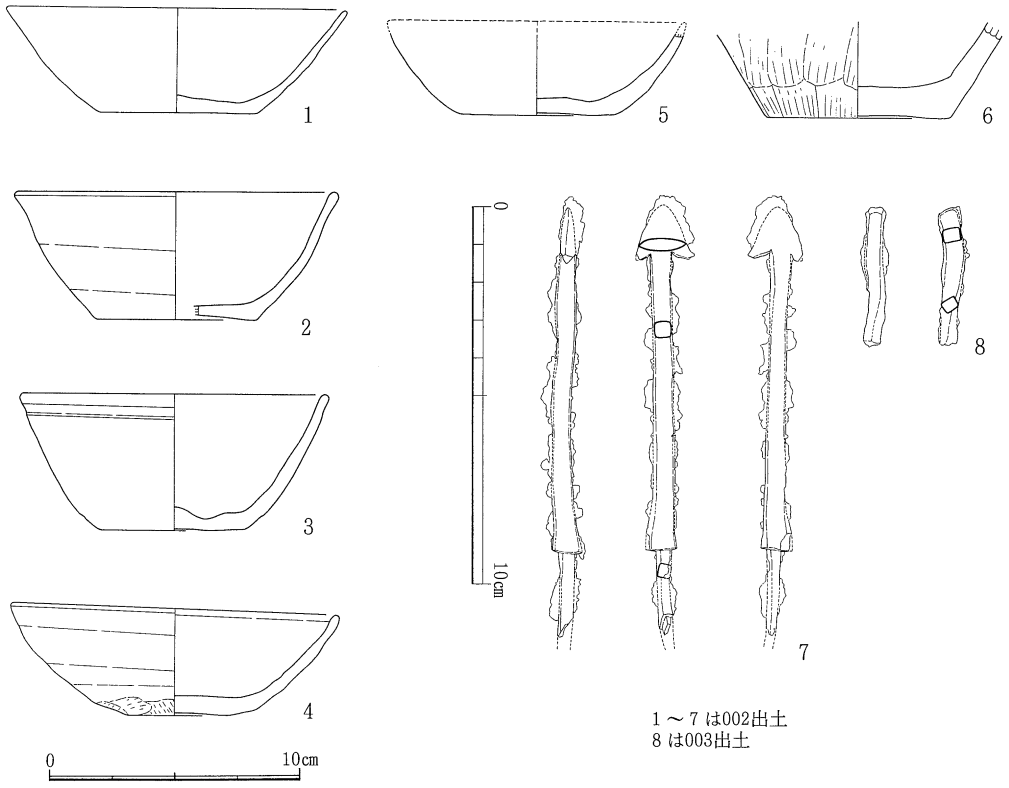
### (1)　土器（第13図１～６）

上細工多遺跡では、001～005・008・014・015・017から遺物が出土している。

溝001からは、縄文土器２点、礫70点、土師器85点、須恵器７点、計164点が出土している。縄文土器は、前期であろうか。小片にてはっきりとしない。礫には焼石がみられた。土師器には、ロクロ整形の杯や台付甕などが認められ、小片であるが鉄鉢型のものも出土している。須恵器では壷甕類がみられた。土師器および須恵器は、平安時代前期の所産であろう。

溝002からは、縄文土器２点、礫75点、弥生土器１点、土師器193点、須恵器28点、鉄鏃１点、鉄滓８点、磁器１点、計308点が出土している。縄文土器は阿玉台式であろう。礫には焼石が多くみられる。弥生土器は、後期の所産であろうか。土師器では、下層から台付甕、中層から上層にかけて底部外面回転糸切り無調整の杯（図13の１～３・５）などが出土している。また、底部並びに体部下端に手持ちヘラ削り調整を施した完形の杯１点も出土している（図13の４）。須恵器は、壷甕類の胴部が主であるが、高台付杯底部や杯蓋なども出土している。

土師器193点の内で、器形の特徴を観察しやすい杯類を取りあげてみると、図示し得なかった資料をも含めて、時期的な幅にさほど大きなばらつきが認められない。即ち、出土頻度の最も高いものは挿図13の１～３に掲げた底部外面回転糸切り無調整の杯であって、「貞観十七年」紀年銘土器を含む稲荷台遺跡Ｅ地点37号住居跡出土の一括資料と、ほぼ同時期の資料に比定することができる。稲荷台遺跡Ｅ地点37号住居跡出土資料は、浅利幸一氏の「稲荷台編年」によると「Ⅲ期～Ⅳ期」に該当する資料で[注1]、Ⅲ期の標準資料である稲荷台遺跡Ｅ地点k-17（土器廃棄遺構）中には黒笹14号窯式期新段階に比定される灰釉皿１点が含まれている。近年の灰釉陶器編年では、黒笹14号窯式期は平安京Ⅰ期新からⅡ期古にかけて共伴していることが知られており、９世紀第２四半期から第３四半期に当てられている[注2]。「稲荷台編年Ⅳ期」には、先述の通り「貞観十七年」紀年銘墨書土器が含まれているので、これらを参考にすると、図13の１～３に掲げた杯類は、９世紀の第３四半期を中心とする時期の一群とすることができよう。一方、挿図13の５に掲げた底部並びに体部下端に手持ちヘラ削り調整を施した杯については、器高がやや低く、体部が湾曲しつつ立ち上がる（椀状）ことと、底径が小型化していることなどの特徴からみて、前資料に比べ後出するものと言える。この傾向は、黒笹90号窯式期の灰釉陶器を共伴する稲荷台遺跡Ｅ地点Ｎ－14遺構（土器廃棄遺構）一括資料の頃から認められるようになるものである。黒笹90号窯式期の灰釉陶器は、前述同様の研究




**第13図　溝跡出土の土器（1/3）と鉄製品（1/2）**

において、平安京Ⅱ期中から新にかけて共伴していることが知られており、9世紀第4四半期から10世紀第1四半期に当てられている。従って、図13の5も、この範疇で考えられよう。図13の4に掲げた杯は、底部の径が小さく、体部下端から内湾ぎみに立ち上がる椀形のもので、器高も低く全体的な形態からみて更に後出的と言えよう。稲荷台遺跡A地点1号住居跡出土一括資料と、同時期の所産に比定されよう。「稲荷台編年」のⅣ期に該当する。当期の実年代を示しうる積極的な資料には欠けるが、後続する時期とみて10世紀中葉と考えておきたい。

磁器は、後世の流れ込みであろう。鉄鏃（図13の7）は埋土上層から出土している。(後述する。)鉄滓は下層並びに上層から出土しており、須恵器と類似した出土傾向が認められた。

溝003からは、縄文土器3点、礫等39点、土師器47点、須恵器14点、常滑1点、焙烙3点、鉄釘1点、鉄滓3点、宝篋印塔笠石2点、計113点が出土している。縄文土器は、早前期である。土師器および須恵器は上層に多く、千葉市域産の須恵器がみられる。003Aからは8世紀末頃期の在地(永田不入窯）産須恵器が出土している。

古代の溝廃絶後、時期を隔てて新たに浅い溝が掘られる。常滑や内耳土器・宝篋印塔等は、これに伴う可能性がある。常滑は甕の破片1点である。内耳土器は3点で、口縁部のみである。焙烙型に

なるものと思われる。内耳土器の一群から江戸系内耳焙烙が派生するのは、近年の研究によって戦国時代末期あるいは江戸初頭と考えられるようになってきている。一方、これに先行する内耳土鍋は15世紀前半の古瀬戸瓶子との供伴例が知られる関宿町木間ヶ瀬中学校裏遺跡出土のものあたりから千葉県内に見られるようになり、市原市域でも近年確認されるようになってきている。(注3) 焙烙型という点から考えれば、内耳土器の時期は、近世初頭以後のことと考えて大過なかろうが、今後類例の増加を待って検討することとしたい。尚、内耳焙烙は、椎津天羽田地区などで、戦前まで使用されていたことが知られる。宝篋印塔は、別項にて詳述する。溝003上層の出土ではあるが、浅い溝に伴なわない可能性もあろう。

溝004からは、礫31点、縄文土器５点、計36点が出土している。共伴遺物はない。

竪穴住居跡005からは、底部外面ヘラ削り調整の須恵器高台付杯１点が出土している。永田不入窯産須恵器で、８世紀後半に位置づけられよう。

土坑008からは、常滑の甕の小片１点が出土したに過ぎない。

掘立柱建物跡015からは、土師器、須恵器、鉄の細片各１点が出土している。

掘立柱建物跡017の柱穴からは、土師器細片１点が出土したに過ぎない。

以上が遺構内出土遺物の概要である。以下、鉄製品並びに宝篋印塔について詳述する。

(2) 鉄製品（第13図７・８）

鉄製品としては鉄鏃と釘様の棒状鉄器が１点ずつ出土している。

鉄鏃（７）は、西区の溝跡002の北肩付近の上層から出土した（第８図▲印）。ふくらのある両刃両丸造りの腸抉式三角形長頸鏃である。一見すると古墳時代後期の長頸鏃のなかに形態的によく似たものがあるが、それらに比べると概して造りが頑丈である。しかも頸部（箆被）(注4) は、基部に突起がつくいわゆる棘箆被ではなく、裾広がりに肥厚して終わり、古代以降の鉄鏃に一般的な特徴を備えているので、溝跡に伴う遺物とみられる。

身は頭部の大きさに比べて長めの頸部が付き、全長は91㎜である。頭部は一辺14㎜のほぼ正三角形だが、現状では一方の逆刺が反りをもち、頸部の付く位置にもずれがあり、一見左右非対称形にみえる。厚さは３㎜である。頸部は長さ78～79㎜、断面形は中央付近で4.5㎜角の正方形、頭部に移行する上端付近では平が5.5㎜とやや偏平になり、基部は裾広がりに肥厚し、下端で７～８㎜角となる。茎は付け根付近の断面が3.5㎜角の先細りとなる棒状である。やや曲がって折損し、22.5㎜残存する。現状の全長は113.5㎜、重量は11.8ｇである。

棒状鉄製品（８）は、西区の溝跡003Ａ上層から出土した。断面は上端付近で５×４㎜、下端付近で４×３㎜の長方形であり、現状の長さは36㎜である。全体にゆるい曲がりと捩じれが認められる。上下とも折損し、二次的に変形している可能性がある。重量は2.7ｇである。

(3) 宝篋印塔

それぞれ中型塔と小型塔で、伊豆石と呼ばれる安山岩製品である。

中型塔は典型的な関東式宝篋印塔で、丹精に製作され、古式を呈する。笠下二段軒上軒五段で、隅飾突起は輪郭を回し、軒幅を出ない範囲で若干外傾する。露盤は輪郭を二区に取っている。穴は垂直に深く穿つ。隅飾については塔廃棄時に破壊を受け、遺存状態が悪いが、市原市指定文化財である応安5(1372)年銘「将門塔」と比較して、ややシャープさを保つようである。同じ指定物件の「常住寺宝篋印塔」より意匠がゆるいので、塔造年代はこの両塔の中間に位置するものとし、下二段上五段が形式化する南北朝期（14世紀中葉頃）と考えて差し支えない。

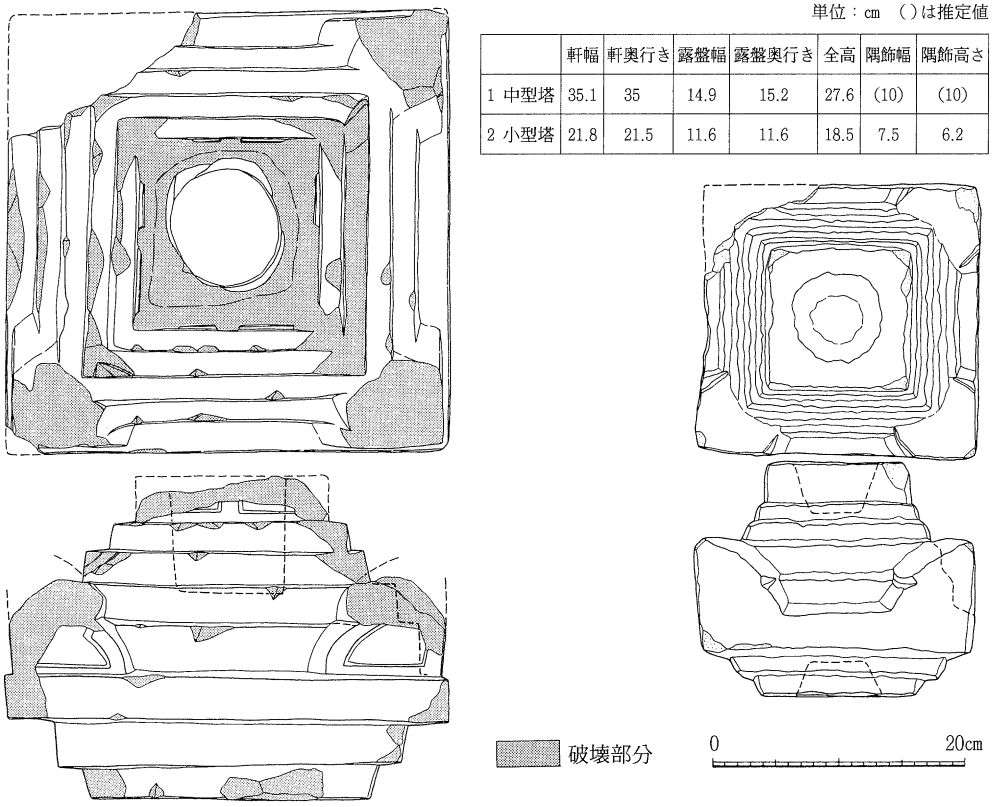
小型塔は西上総地域に広範囲に分布するタイプで、戦国期の遺跡に出土例が多い（市内では山木白船城跡など）ことから、15世紀の製品と見られる。上記の中型塔に比べ、粗略な退化形である。笠下二段軒上五段で、隅飾突起は軒と一体化し、露盤とともに輪郭を省略する。

なお、穴を上下両面に穿つのは小型塔の特徴である。自重のある大・中型塔に比べて不安定なため、連結の強化を図る必要からとられた措置と思われる。

二点とも溝最上層から出土した一括資料であり、小型塔の制作を15世紀と推定することから、戦国期以降に近隣より持ち込まれ投棄されたものと思われる。中型塔は四面を鑿状の工具で故意に破

単位：cm　()は推定値

| | 軒幅 | 軒奥行き | 露盤幅 | 露盤奥行き | 全高 | 隅飾幅 | 隅飾高さ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 中型塔 | 35.1 | 35 | 14.9 | 15.2 | 27.6 | (10) | (10) |
| 2 小型塔 | 21.8 | 21.5 | 11.6 | 11.6 | 18.5 | 7.5 | 6.2 |




**第14図　溝跡003Ｄ出土宝篋印塔笠石（1/6）**

壊されており、供養行為の否定を示す可能性が指摘できる。ついては、この塔の供養対象が問題となる。市内で確認できる14世紀の大・中型宝篋印塔は、周辺に墓域を伴うものと、見晴らしの良い集落背後の台地上に単独で置かれたものがあり、それぞれに造塔の目的は異なるものと思われる。本遺跡の場合も、周辺に中世集落や墓域があるのか、今後広範囲にわたる調査成果の蓄積が待たれるところである。

## 5．まとめ

上細工多遺跡については、今回の発掘調査によって初めてその一端が明となり、予想外に大規模な溝を伴う古代の遺構群の出現によって、当遺跡および周辺部が、古代市原郡ひいては古代上総国を考える上で看過できない地域であることを、改めて印象付けることとなった。

今回の発掘調査は市道改良工事に伴う限られた範囲の調査であったため、遺跡の全貌をつかむことは勿論、遺跡の性格を限定するにはいたらなかったが、当遺跡の古代の遺構が通常の集落遺跡で一般に認められるものではない、という点に異論はないであろう。そこで最後に、古代の遺構を中心に、遺跡の性格特定に結びつく二、三の特徴点をあげてみたい。

遺構の時期は、大きくは古代と中世の二時期に分けられる。問題となる古代の遺構の年代については、出土遺物が極めて少なかったため（後述のように、それ自体が当遺跡の特徴の一つである）、不十分ではあるが、おもに溝跡から出土した土器からみて、8世紀後半から10世紀までが存続期間であり、中心は9世紀代ということができる。こうした時間幅はこの遺跡にかぎらず、市原台地周辺の古代官衙遺跡や寺院跡に共通した特徴である。

遺跡を特徴付ける遺構としては、まず第一に大規模な溝をあげることができる。この溝は単なる区画機能を超えた規模であり、しかもほぼ同一地点でたびたび掘り直している。こうした溝は同時代の通常の集落にはみられない。とくに、規模と共に、同一地点で何度も掘り直している点は、位置の限定性と施設維持に向けられた営為の持続性を物語り、遺跡の性格に係わる重要な特徴である。

次に、現道付近に出入口とこれに関連する施設を伴っている点である。開口部に直接伴う構造物が門なのか橋なのか限定できなかったが、出入口北西部の建物2棟は、溝が施設の南辺を画する遺構であることを示している。施設全体の建物配置が不明ななかで断定することはできないが、規模、位置からみて主要な建物ではなく、出入口に付属した宿直屋的な施設と考えられ、遺跡の特徴となる可能性がある。また現道が古代の施設の出入口と一致していることは、現道の成立時期を示唆する点でも重要である。ただし、今回明らかになった出入口は、台地の分水界に当たり、予想される施設南辺の中央ではなく、西に偏っている可能性が高く、溝の規模の割りに出入口施設が貧弱である。別に正面の出入口があるのかも知れないが、地形に沿って出入口を設けているのであれば、施設の性格に係わる重要な特徴点となる。このことは、遺構方位が真南北を基準とせず、地形方位に沿って

いる点とも連動している。儀式中心の施設ではなく、実務重視の施設であることをうかがわせる。

次に出土遺物の面では、大規模な溝が長期間口を開いていた割に、堆積土中の遺物が少ない点が特徴と言える。少なくとも調査地点付近が主要な日常生活の場ではなかったことを示している。少量ではあるが鉄滓が出土しているのは、鉄関係の工房が存在したことを示すが、施設の性格に直結するほどの出方ではない。その量が少ないことは、操業規模や期間が短かったためか、単に調査地点が工房から離れていたためかも知れない。その工房が施設を構成するような恒常的なものか、施設造営に関連する臨時的なものなのかも、現段階では分からない。鉄鏃についても、1点のみであり、現状では遺跡の性格を論ずる材料とは言いがたい。

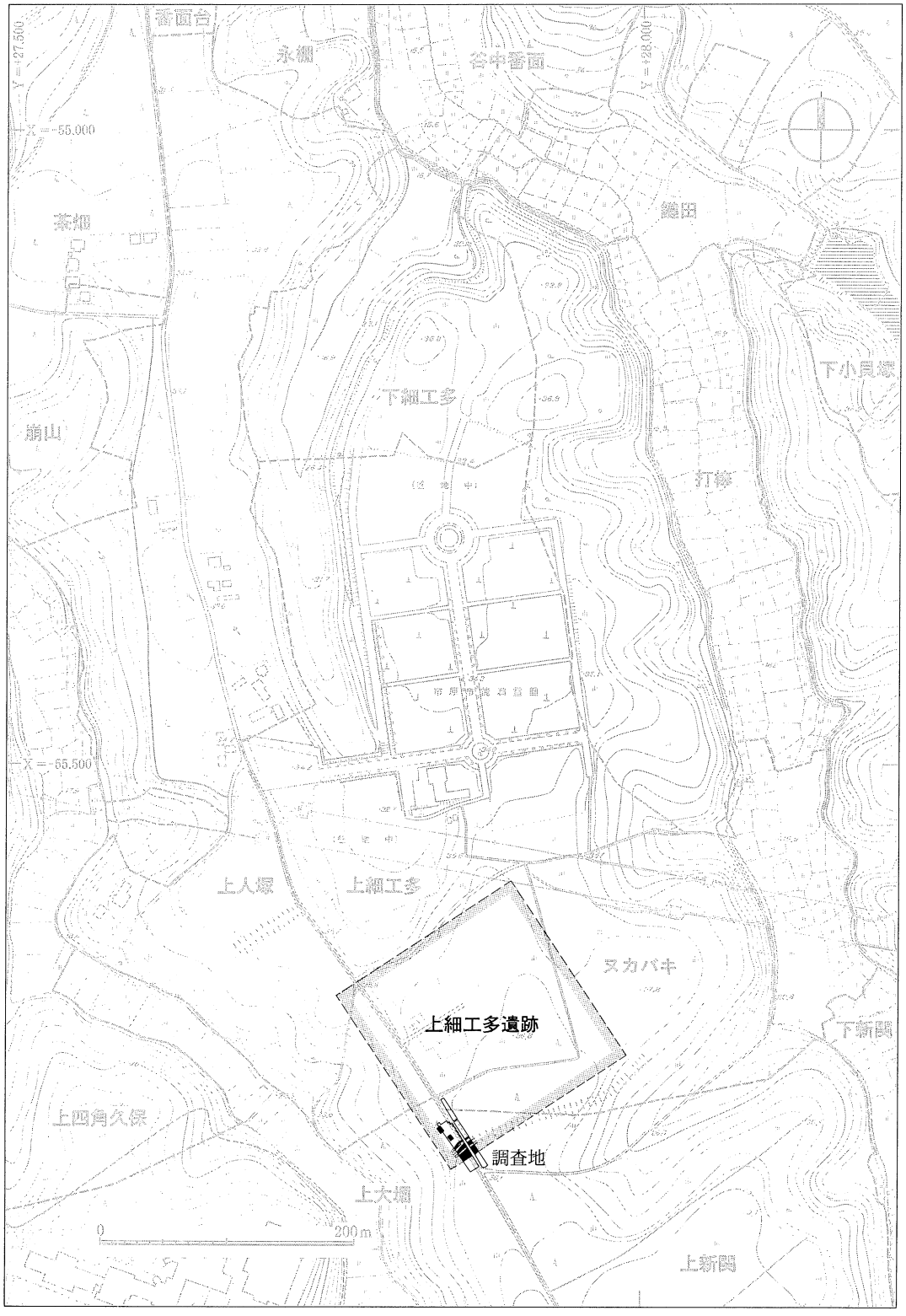
以上のような、特徴点からだけでも、この遺跡がいわゆる集落遺跡ではなく、家政機関も含めた広義の官衙的遺跡であることを示している。その場合でも、儀礼を主務とする場ではなく、実務的曹司である可能性が高いのではなかろうか。公的な施設か私的な施設かを直接示すような遺構や遺物は今のところないが、溝のあり方は前者の可能性を物語っているようである。　現在予想される遺跡の広がりは、微地形からみて、調査地点の北側1.5町程度の範囲ではないかと考えられる。今後、その中心部の様相の解明をまって、当遺跡の性格が特定されてくれば、市原台地周辺地域の古代における歴史像がより豊かなものとなるであろう。

**地名「上細工多」について**

最後に、遺跡所在地の「上細工多（かみせーくだ)」という意味深長な地名が遺跡の性格に係わりがあるのかどうか検討してみたい。

この小字「上細工多」・「下細工多」については、「せーくだ」の「だ」を「田」と解して「国衙工房に付属する細工師等に給付された給免田の名のこり」とする説がある。(注5) しかし、かりにこの説に従ったとしても、給免田がかならずしも受給者の所在地に隣接して給付されるとは限らないので、細工師給免田の存在がただちに細工師の住居や工房の所在地を示すことにはならないであろう。その場合には、地名が遺跡の性格に直接かかわる可能性は薄くなる。ただし、郡本周辺の条里制地割り遺存地区にこの種の地名が集中することの意義と同様な観点からは、当地域の歴史的評価に係わる地名ということができるであろう。

では、「だ」を「田」以外に解する余地はあるのであろうか。「た」および「だ」については、方向・場所・部分・位置などを示す接尾語とする見解があり、とくに地名での用例は場所を示す「ト(処)」に近く、そもそも耕作地「田」自体が「ト（処)」の転化であるという説（松岡静雄）さえあるという。(注6) また「さいく〔細工〕」については、〈平安時代ごろから、国衙や各地の社寺などに置かれた「細工所」にちなむ地名か〉とする。(注6) こうした地名語源説の立場からすると、「せーくだ」は細工所の所在地を意味する地名となり、遺跡の性格を考える上で看過できない。しかし「せーくだ」を分解して「細工所があった場所」と解釈することが語義上は可能でも、「さいくじょ」の所在地を




第15図　字上細工多・下細工多の範囲と予想される遺跡の広がり（1/5,000）

「さいくど」あるいは「さいくだ」といった歴史的用例が確認できない限り、現実に存在した地名として想定することは難しいであろう。いずれにしても、現段階では、遺跡所在地名から遺跡の性格を論ずることは早計であり、遺跡中心部の考古学的調査の結果をまって、地名の語源についても再検討したい。

【注】

1．浅利幸一「2　市原市稲荷台遺跡」（旧市原郡）（『房総における歴史時代土器の研究』房総歴史考古学研究会 1987）

2．小森俊寛「2　平安京出土の灰釉陶器」（『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東 施釉陶器－』古代の土器研究会 1994）

3．両角まり「内耳鍋から焙烙へ－近世江戸在地系焙烙の成立－」（『考古学研究 第42巻第4号』考古学研究会 1996）

4．箆被は頚部全体を指す用語として使われることもあるが、伊勢貞丈の『貞丈雑記』（巻之十、東洋文庫450『貞丈雑記3』平凡社・1985）は、「のじろのかずき」は「矢がらのこぐちをうくる所」で「箆かつき」ともいうとし、頚部下端の関端面（こぐち）に限定した指称であることを図によって明示している。この解釈は語義にかなっているが、近世の武家故実であり、中世以前に遡るかどうか分からず、一般にもなじみの薄い言葉である。ここでは即物的に、露出する鏃本体部を身、矢柄挿入部を茎とし、身を頭部と頚部に分けて呼称した。

5．寺田廣「総説」（『市原市史資料編（中世編）』市原市教育委員会・1980）

市内には、おもに郡本周辺の市原条里制遺跡内を中心に、国衙機構につらなる在庁官人・諸色人・社寺等の給免田遺称地と推定される小字地名が坪単位で残存する。それらには「梶給（鍛冶給）」・「番匠給」（番匠はこうした地名の成立時期を暗示する）・「於局給」・「加茂給」のように給（久）のつくもの、「在長面（在庁免）」・「時シ免（土器師免）」のように免（面）のつくもの、「日吉田」・「姥田」・「椎津田」のように田のつくものがあり、給付対象者名の語尾に「給免田」のうちのいずれか一字をつけて耕地の属性を表示している。これらの周辺には「善久寺」・「円福寺」・「明光院」のように寺院名だけの小字もみられ、寺田のなかには、語尾がまったく省略されたか、後世脱落したものもあったようである。これらは当地域が国衙領として最後まで維持された領域であったことを示唆し、広い意味では中世国衙所在地に係わる地名資料である。こうした給免田の遺称地と推定される地名の遺存状況からすると、「せーくだ」が「細工田」である可能性は高いであろう。なお「せーく」は、「さいく」の当地方における訛化である。

「せーくだ」が細工田という耕地の属性地名であり、しかも現在の小字の範囲が本来の「せーくだ」の範囲を反映しているものと仮定すると、そのほとんどは台地部分で、両側の谷田にはおよんでいないのは不審な点である。現在の小字が確定した地租改正段階の地目は確認していないが、昭和36年撮影の空中写真によれば、水田は字下細工多の北端に開く小支谷の入口付近にわずかに想定されるだけである。その開発が中世以前にさかのぼる確証はない。また、地名の漢字表記は二次的なものとはいえ、「た」あるいは「だ」の表記として一般的な「田」を用いず、なぜ「多」を採用したのかという疑問は残る。すくなくとも現在の表記が定着した明治初期には意味不明となっていたか、当時の地目に水田がほとんどなかったことを反映しているのかもしれない。

6．楠原佑介・溝手理太郎編『地名用語語源辞典』（東京堂出版・1983）

# Ⅴ　上新関遺跡の調査

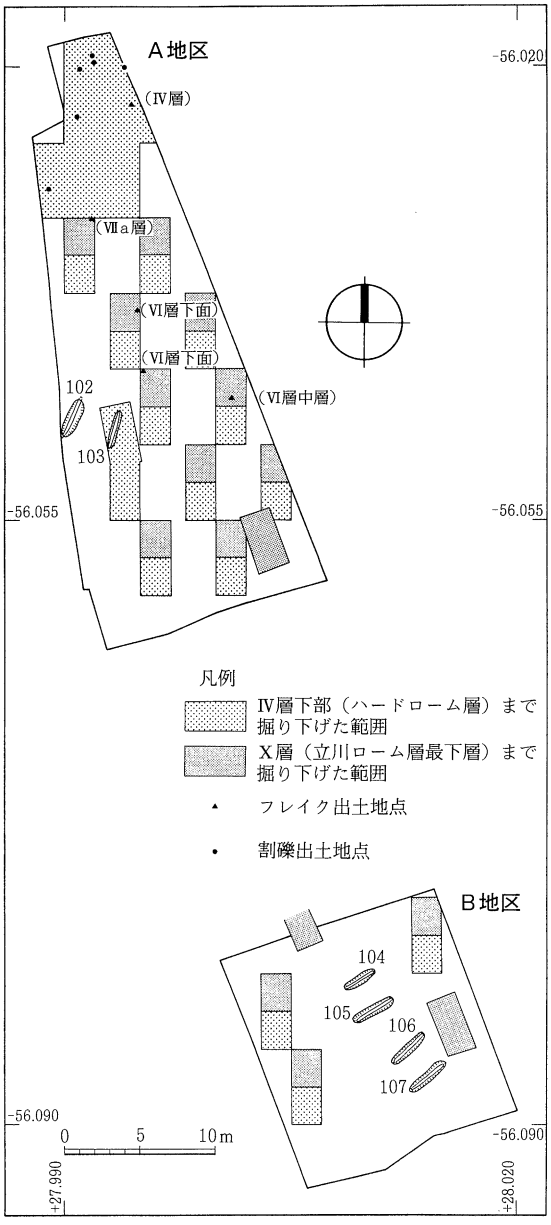
## 1．調査の経過と遺構の概要（第16図）

上新関遺跡の調査は、確認調査第９トレンチならびに第10トレンチで確認された遺構等から本調査範囲を確定し、面的に調査したものである。調査区は北側のＡ地区（280㎡）と、南側のＢ地区（200㎡）の２地点に分かれている。

上新関遺跡の立地する台地は、上細工多遺跡と標高39ｍ前後の尾根上地形によって繋がっており、平均的な標高は41ｍとやや高い。確認調査において遺構や遺物の確認された地点は、上新関地籍でも南側の、下中貝に向かう尾根上の地形にかかる地点であって（第１図左地形図参照）、西側の支谷谷頭部に当たっている。調査では、Ⅲ層上面で上層遺構の把握を行い、縄文時代の陥し穴から着手した。また下層については、まずⅣ層まで掘り下げ、Ａ地区北半の面的調査を実施するとともに、以南については各グリッドの北側をⅩ層まで下げ文化層の把握につとめた。

Ａ地点の調査では、縄文時代の陥し穴２基と、調査区北端付近で先土器時代石器包含層を上下二層捉えた。

Ｂ地点の調査では、縄文時代の陥し穴４基が、並列して検出された。更にＢ地点についても、先土器時代石器包含層の検出に努めたが、発見には至らなかった。縄文土器では、中期初頭（五領ヶ台～阿王台）がみられている。その他の時期については、皆無であった。




第16図　Ａ地区・Ｂ地区遺構及びグリッド配置図

## 2．先土器時代の基本層序と文化層（第17図）

本遺跡は、前節までで説明してきたように、新田川上流域の台地西面縁辺部に位置している。

以下、近隣の調査における層序区分等を踏まえた上で、発掘調査中の土層観察結果を中心に、本遺跡における基本層序を示しておきたい。

基本層序

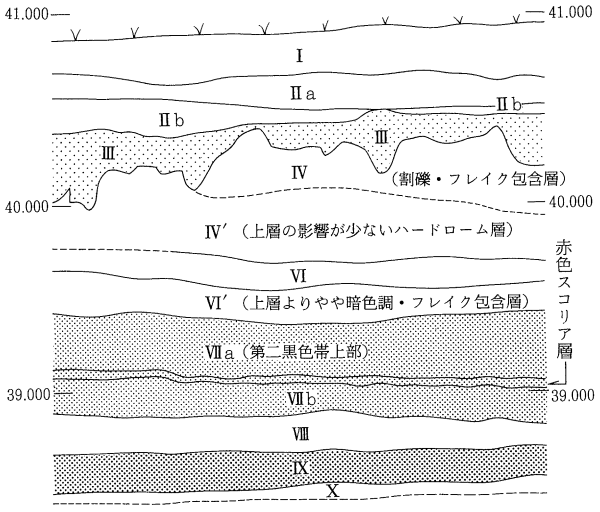
Ⅰ　層：明褐色～黒褐色土。表土および耕作土。顆粒状の黒色土も一部観察される。

Ⅱa層：暗褐色土。少量の黄褐色土粒が混入している。

Ⅱb層：褐色土。本土層上面が、縄文時代早・前期の包含層と中期の確認面である。

Ⅲ　層：暗黄褐色～黄褐色ローム土。ソフトローム層。

Ⅳ　層：黄褐色～褐色土。ハードローム層。Ⅳ層とⅤ層は識別されなかった。




**第17図　基本層序（S＝1/40）**

Ⅵ　層：明褐色ローム土。姶良Ｔｎ火山灰層（AT層）である。下面でフレイクが見られる。

Ⅶa層：暗褐色ローム土。赤色スコリア・白色スコリア・黒色スコリアを含む。

第二黒色帯上部に相当する層である。

Ⅷb層：暗褐色ローム土。ａ層よりも色調がやや暗い。赤色スコリアが多量に含まれる。

赤色スコリアの含有率が、本層上面は極めて高い。層厚６㎝程度の範囲（武蔵野台地Ⅷｂ層相当層か）。フレイクチップ包含層である。

Ⅷ　層：褐色ローム土。微細なスコリアが多く観察される。

Ⅸ　層：明褐色ローム土。上層に比べ、やや明るい色調である。スコリアが若干入る。

Ⅹ　層：灰褐色ローム土。立川ローム層最下層に相当。粘性が強い。

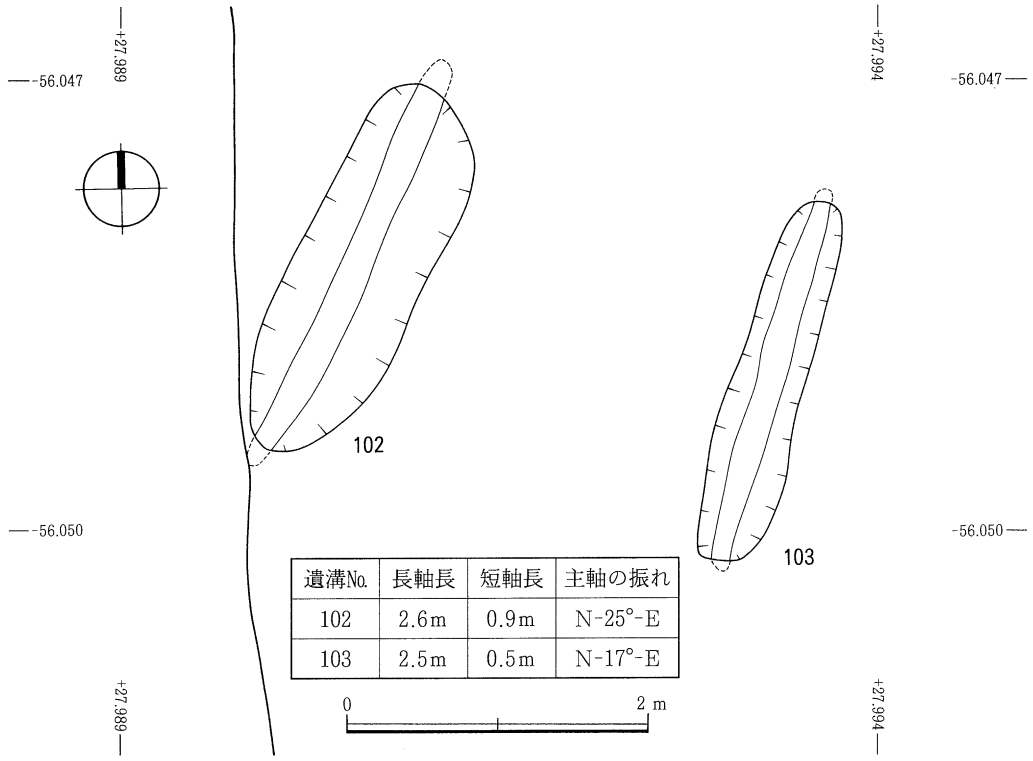
Ａ地区北端のⅣ層からは、割礫６点とフレイク１点（頁岩）が出土しいている。分布範囲は直径５ｍ前後に限定されており、Ａ地区南半からＢ地区には検出されなかった。

一方、ＡＴ層を挟んだ下層では、Ⅵ層中層に１点（チャート）、Ⅵ層下面に２点（珪質頁岩・頁岩）、Ⅶa層下面に１点（頁岩）、合計４点のフレイクが出土している。Ａ地区のほぼ中央４地点で検出している。Ｂ地区にはその分布が観察されなかった。

## 3．縄文時代の陥し穴（第18•19図）

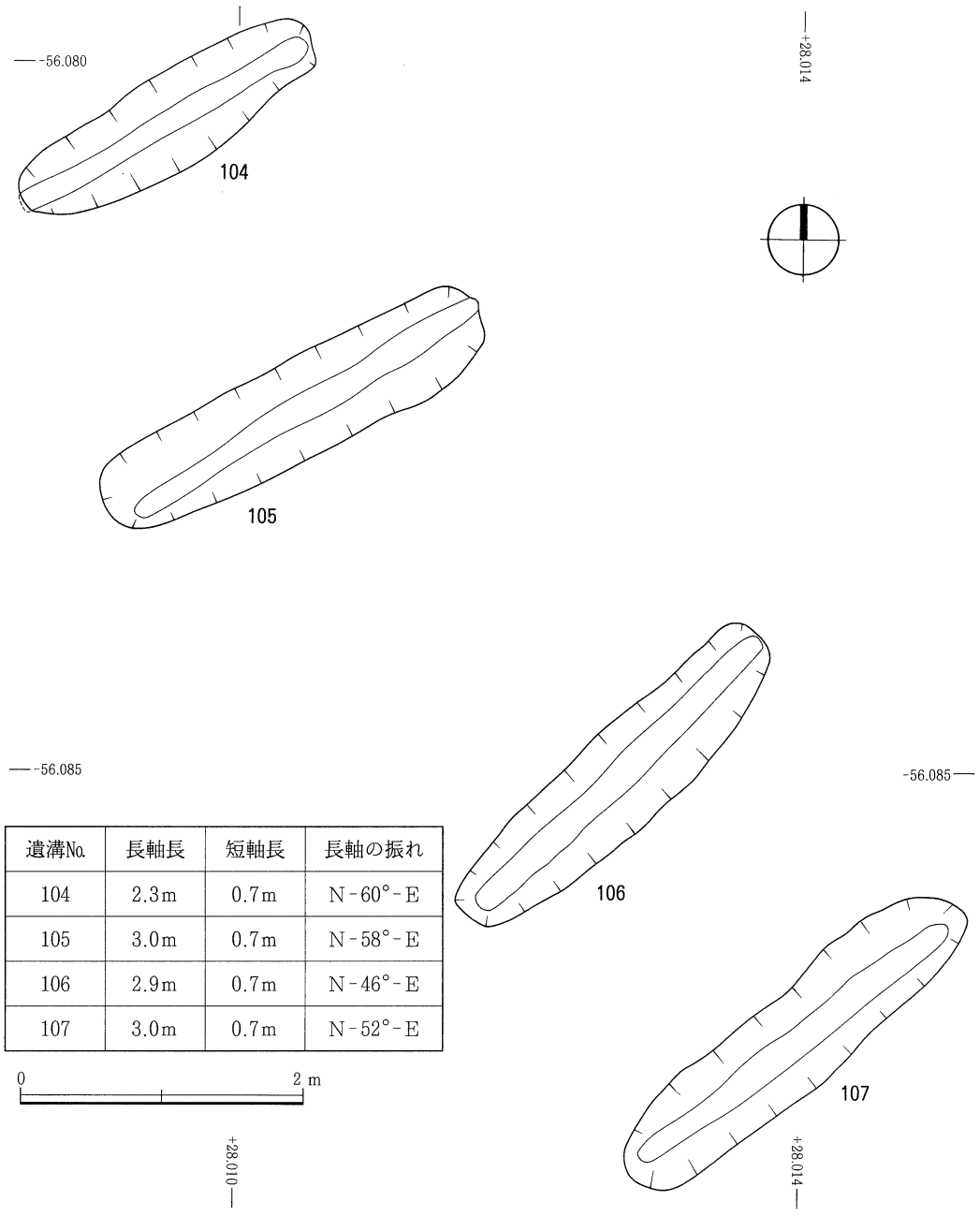
上新関遺跡では、Ａ地区に２基・Ｂ地区に４基、合計６基の陥し穴が検出された。Ａ地区東側のものは、確認調査時点で発見されたものである。

Ａ地区で発見された２基の陥し穴は、座標北に対して東に20度前後の傾きでほぼ並列している。102号遺構に比べ103号遺構の方が、振れがやや少ない。102号遺構と103号遺構の距離は、底面中心部で2.8ｍ程度であった。Ｂ地区で発見された４基の陥し穴は、座標北に対して東に46度～60度の傾きでほぼ並列している。104号遺構と106号遺構とでは、振れに14度の開き認められるが、隣接する104号遺構と105号遺構では2度程度と、振れに大きな違いが認められない。また、隣接する各遺構間の距離を底面中心部で比較すると、104号遺構と105号遺構、あるいは106号遺構と107号遺構では2.2ｍ前後であるのに対して、105号遺構と106号遺構との距離では3.7ｍとやや広い。これは、Ａ地区で発見された102号遺構と103号遺構との距離と比較しても広く、先に見た遺構の振れとの関係をも含めてみると、それぞれが対をなしていたものと考えられる。Ａ地区で発見された陥し穴とＢ地区で発見された陥し穴の振れが明らかに異なっているのは、それぞれの地点に入り込んでいる谷地形の影響を受けたものであろう。形態的には６基とも逆茂木などを持たないＶ字形の断面を有するものであった。




| 遺溝No. | 長軸長 | 短軸長 | 主軸の振れ |
|---|---|---|---|
| 102 | 2.6m | 0.9m | N-25°-E |
| 103 | 2.5m | 0.5m | N-17°-E |

第18図　Ａ地点陥穴全体図




| 遺溝No. | 長軸長 | 短軸長 | 長軸の振れ |
|---|---|---|---|
| 104 | 2.3m | 0.7m | N-60°-E |
| 105 | 3.0m | 0.7m | N-58°-E |
| 106 | 2.9m | 0.7m | N-46°-E |
| 107 | 3.0m | 0.7m | N-52°-E |

**第19図　B地点遺構全体図**

## 4．まとめ

上新関遺跡の調査では、先土器時代の文化層二層と縄文時代の陥し穴6基を検出し記録した。能満地区の調査例は極めて少なく、殊に今回の調査のように、結果的に番面から上新関に至る総延長1.6kmにわたってその様相を観察できたことは、貴重な資料の追加であった。

# Ⅵ　番面台遺跡の調査

## 1．調査の経過と遺構の概要（第20図）

番面台遺跡の調査は、昭和57年度に文化課が実施した番面から番面台にかけての確認調査区に隣接する地区、全長480ｍを対象として実施したものである。調査ならびに報告では、番面台遺跡と呼称しているが、実質的には小字上境から上人塚にかけての地域を対象としている。

次章に報告する旧三山塚は、上境と上人塚との字境に築かれた出羽三山信仰の記念塚である。

確認調査は、現道に沿って分散的に設定した２ｍ×３ｍのグリッドを基本とし、トレンチ等を併用しつつ65ヶ所において実施している。また、G-4・G-18・G-30・G-34の４ヶ所のグリッドにおいて、先土器時代の確認調査を実施している。

調査は、下草刈とゴミ等の除去作業から開始し、北側のG-1から順次、グリッド等の設定→表土剥ぎ→遺構確認面の清掃の手順で実施していった。また、遺構の密度が低いことから、確認された遺構については、順次調査区を拡張して、本調査に移行することとなった。

調査によって得られた所見は、以下のとおりである。

(1)　表土下の土層堆積状況は、比較的に良好であった。表土から確認面（ソフトローム上面）までの堆積層は、28㎝～56㎝（平均35㎝）を測り、北側の30㎝前後から南側の45㎝前後に向けて、緩やかな傾斜傾向を示している。

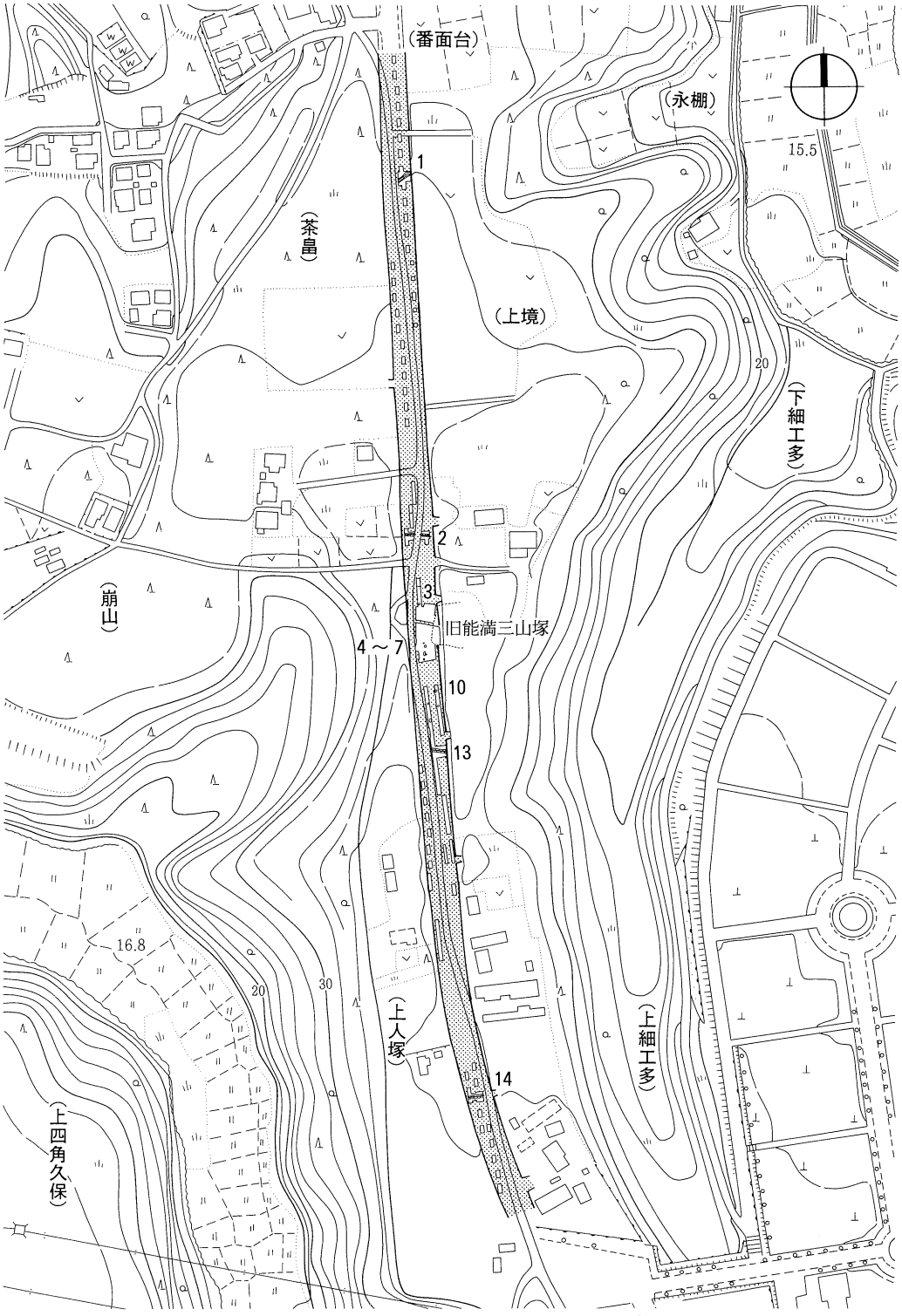
　基本土層については、上細工多遺跡・上新関遺跡と特に変わるものではない。

(2)　確認された遺構は、縄文時代早前期の炉跡４基、土坑４基、陥し穴２基と、時期の不明瞭な溝４条、計14遺構のみであった。溝は現道に直行する方向のものが、やや分散的に確認されたが、縄文時代の遺構については、旧三山塚の近辺に集中する傾向が伺われている。

(3)　G-37で確認されたNo.４～No７は、いずれも炉跡である。このうちNo.４については遺物が認められなかったが、他からは縄文早期の所産と考えられる土器片が出土している。いずれも、浅く小規模な炉穴であり、No.４についても埋土が他のものと類似しており、ほぼ同時期の遺構ではないかと考えられた。

(4)　陥し穴は、G-37とG-39とでそれぞれ１基づつ確認されている。No.６とNo.10である。両方とも長丸の楕円形の平面形態を有しており、V字に底面が狭くなっている。また、底部に小ピットが検出されており、逆茂木の存在が想定された。No.10では埋土中より縄文時代早期の土器片が出土している。

(5)　溝では、No.１から焙烙の口縁が、また、No.２から鉄滓と馬歯、No.14から須恵器高台付杯の破片が出土している。いづれも細片少量の出土中に見られるものであるが、参考となろう。


(番面台)
(永棚)
15.5
1
(茶畠)
(上境)
20
(下細工多)
2
3
旧能満三山塚
(崩山)
4～7
10
13
16.8
20
30
(上人塚)
14
(上細工多)
(上四角久保)

第20図　全　体　図

## 2．縄文時代の炉穴・土坑・陥し穴

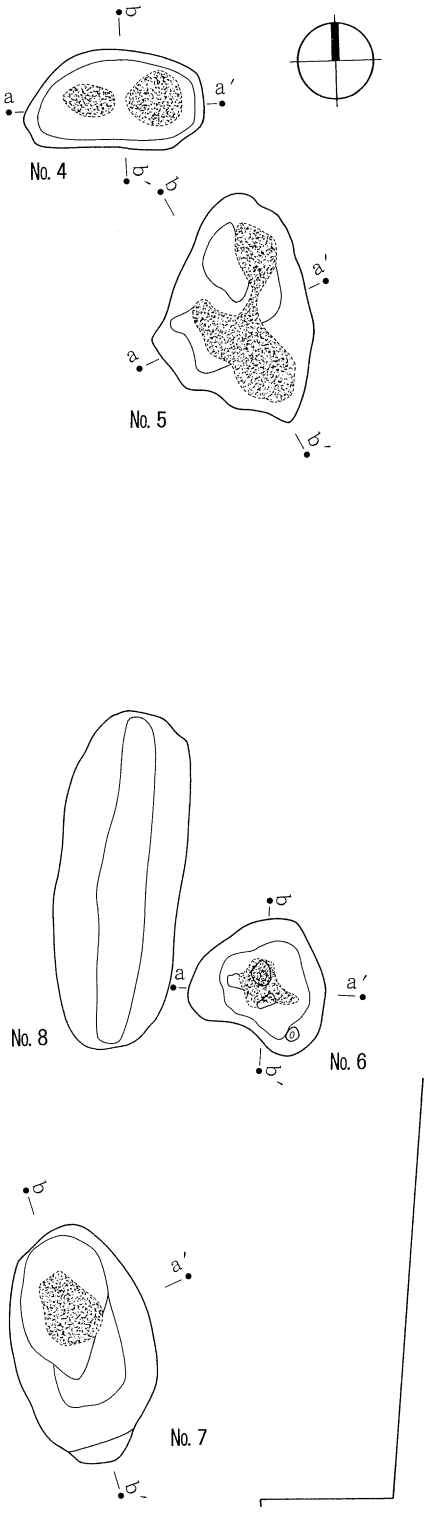
4～7は、縄文時代早期の炉跡である。4は東西方向に延びる楕円形を呈しており、長軸1.2m、短軸0.63mを測る。確認面から底面までの深さは0.1m程度と浅く、平底の二ヶ所に焼土が確認された。共伴遺物は、皆無であった。

5は南北にやや長い不整形を呈しており、長軸1.8m、短軸1.52mを測る。確認面から底面までの深さは、0.12mと浅く、丸底の底面全面にわたって焼土が確認された。共伴遺物は2点あったが、細片であった。

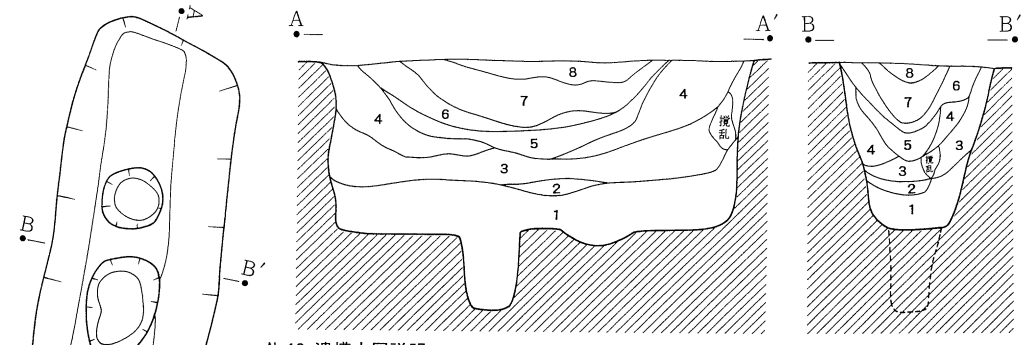
6は不整形を呈しており、東西軸0.9m、南北軸0.8mを測る。遺構の深さは0.1mと浅く、平底の中央ほぼ全面に焼土が確認された。覆土から縄文早期の土器細片が出土している。

7は南北に延びる楕円形を呈しており、長軸1.6m、短軸0.9mを測る。底面は平底で中央やや北寄りに焼土を確認した。底面に2点の縄文早期の土器が出土した。8ならびに12は、縄文時代の陥し穴遺構である。

8は磁北に対して9度ほど西に振れた南北軸であり、長軸2.26m、短軸8.2mを測る。遺構面からの深さは1.4mであった。底面は筋条を呈しており、幅0.3mとやや狭い。埋土は上層に暗褐色土を主体とする自然堆積が観察され、中層以下はローム土の崩落堆積であった。掘り返しは認められない。




第21図　A地区の炉穴と陥し穴



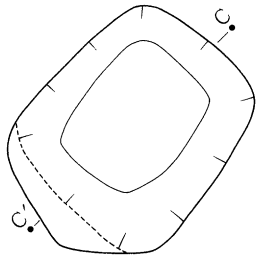

No.12

No.12 遺構土層説明

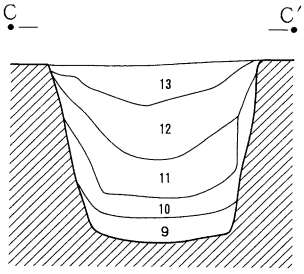
1．ソフトローム土による大型ブロック主体。
2．褐色土に焼土粒の混入目立つ。
3．暗褐色土。ややしまっている。
4．暗褐色土と褐色土による埋土。茶褐色のブロック若干入る。
5．暗褐色土。粒子が細かい。若干、焼土入る。
6．焼土の多く入る層。
7．暗褐色の土。腐蝕土。
8．暗褐色土に赤褐色スコリア入る。しまっている。

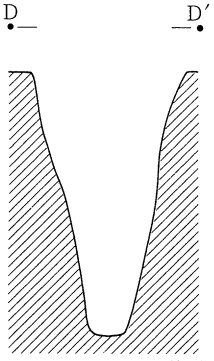
No. 3 遺構土層説明

9．黒褐色土。ローム粒子が若干混入する。
10．褐色土。ローム粒子をやや多く含む。
11．黒褐色土。ローム粒子が若干入る。
12．黒褐色土。ローム粒子を含む。
13．暗褐色土。ローム粒子が混ざる。

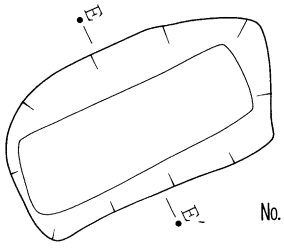



No. 3

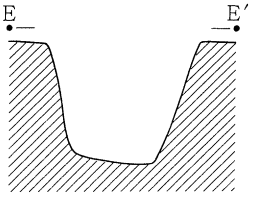



No. 8

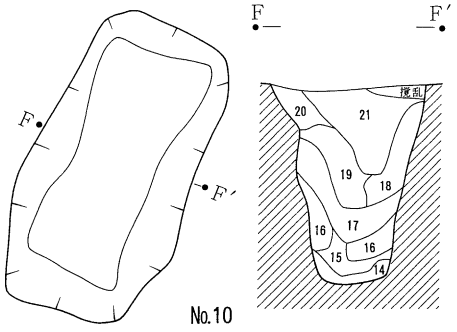



No. 9

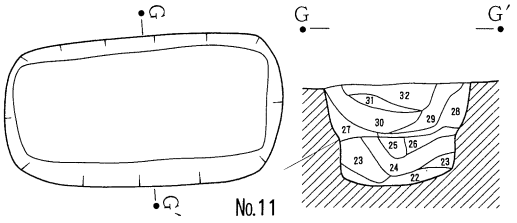



No.11 遺構土層説明

22．暗褐色土中にローム土混入。
23．暗褐色土。弱粘性土。
24．ソフトローム土の崩壊土。
25．ソフトローム土崩壊土に褐色土。
26．褐色土中にローム粒含む。
27．茶褐色土にソフトローム土含む。
28．ローム土に褐色土混入。
29．暗褐色土に粘性土含む。
30．褐色土中にロームブロック若干。
31．褐色土中に茶褐色土入る。
32．褐色土中に焼土粒入る。




No.10




No.11

No.10 遺構土層説明

14．ローム崩壊土中にロームブロックを若干含む。
15．黒褐色土。有機質土。
16．黄褐色土。ローム崩壊土。
17．暗褐色土。有機質土にロームブロック入る。
18．暗褐色土にロームブロック入る。
19．黒褐色土にローム粒入る。
20．暗褐色土にロームブロック入る。
21．暗褐色土にロームブロック若干入る。

第22図　B地区の陥し穴と土坑

12は８の南30ｍの地点で検出されている。磁北に対して７度ほど東に振れた南北軸である。長軸2.26ｍ、短軸0.9ｍを測る。また、底面は平底で、中央に２ヶ所のピットを設けている。底部の規模は、長軸2.06ｍ、短軸0.41ｍを測る。ピットの径は0.3ｍ程度であり、0.45ｍの深さに打ち込まれていたものと考えられる。また、３層と７層に焼土の堆積が確認されており、埋土の状況からも二次利用がなされたものと考えられる。８と12とでは異なった形態の陥し穴が作られている。

３と９～11は、土坑である。

３は主軸を、北に対して39度東に振る略方形の平面形を呈した土坑である。４の炉穴北側18ｍに位置している。長軸1.14ｍ、短軸1.00ｍを測り、平底である。確認面から底面までの深さは、0.95ｍであった。底部の規模は長軸0.74ｍ、短軸0.58ｍであった。埋土は平行堆積をしており、暗褐色～黒色土にローム粒や赤褐色粒の含まれるものであった。掘り返しや人為的な埋め戻しは見られなかった。

９は主軸を、北に対して64度東に振る、長方形の土坑である。12の陥し穴の北７ｍに位置している。長軸1.51ｍ、短軸0.82ｍを測り、平底である。確認面から底面までの深さは、0.65ｍであった。埋土は３に類似している。底面の規模は、長軸1.29ｍ、短軸0.43ｍであった。

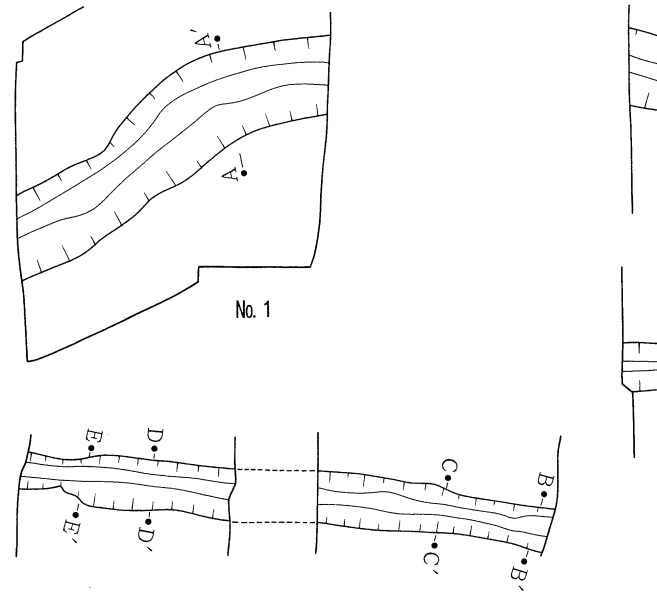
10は主軸を、北に対して27度東に振る、長方形の土坑である。９の北東６ｍに位置している。長軸1.64ｍ、短軸0.83ｍを測り、深さは1.03ｍであった。底部は平底であり、長軸1.32ｍ、短軸0.44ｍを計測する。他のものと比較して堀込みの深い土坑であった。埋土には、掘削時の崩落土層（ローム土）が最下層に観察されたが、他は有機質土による自然堆積であった。掘り返しや人為的な埋め戻しなどは、行われていない。

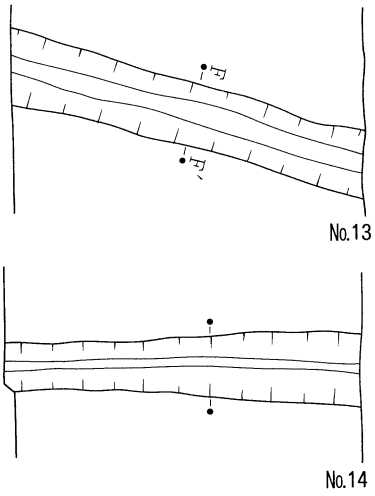
11は主軸を、北に対して87度東に振る、長方形の土坑である。10の南８ｍに位置している。長軸1.48ｍ、短軸0.80ｍを測る。確認面からの深さは、0.55ｍと比較的に浅い。底面は平底であり、長軸1.32ｍ、短軸0.58ｍを計測する。埋土には褐色土～ロームブロック土が観察されており、中間で掘り直しを行っている。

## ３．溝の調査（第23図）

１・２と13・14は、古代以降の溝である。

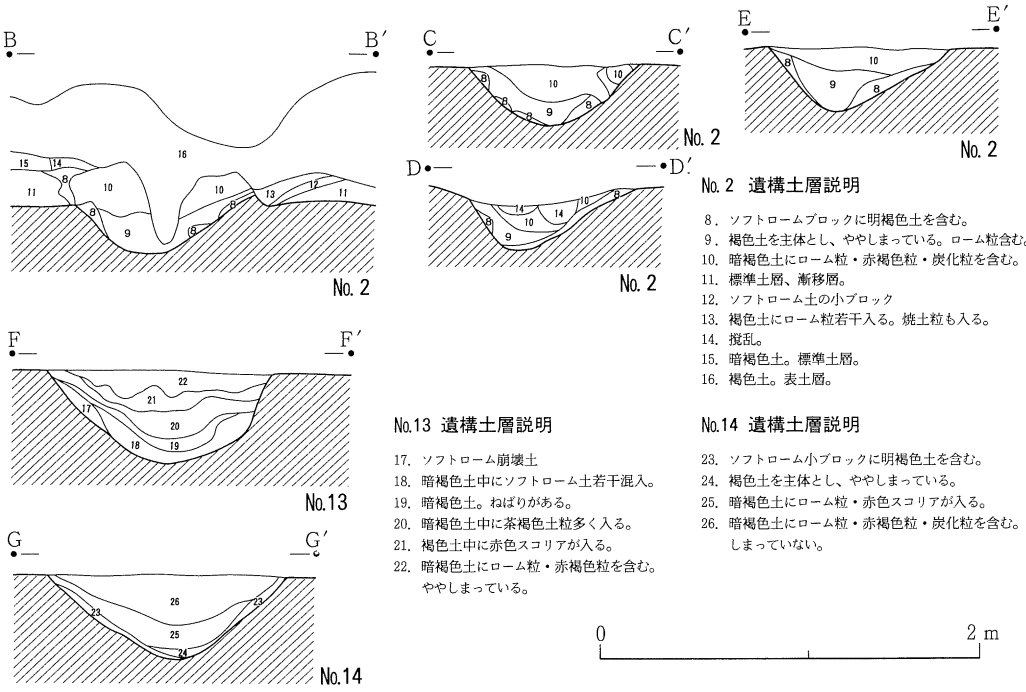
１は調査区北側の８－Ｇで確認した溝である。確認調査後、調査区を拡張して本調査を実施している。確認面における溝の上幅は、1.4ｍ～2.0ｍ。底面の幅は0.37ｍ～0.57ｍ。遺構の深さは、0.30ｍ～0.40ｍであった。溝の平面形は、東側でやや弧を描くものであり、底面ではやや西に向かって下がる傾向を見せているが、おおむね水平でであった。水路とは考えにくい。第15図に示すように、この溝の位置は、地形図の標高32ｍラインに沿った位置となっている。埋土底面から、焙烙の口縁部が出土しており、中・近世以降の所産と考えられる。２・13・14等とは時期の異なる溝と考




No. 1 遺構土層説明

1．ソフトロームブロックに明褐色土を含む。
2．褐色土を主体とし、ややしまっている。ローム粒を含んでいる。
3．暗褐色土に褐色土を含む。ローム粒・赤褐色粒等が入る。
4．暗褐色土にローム粒・赤褐色粒・炭素粒を含む。しまっていない。
5．黒色土に褐色土入る。
6．撹乱。
7．根木腐触土。




No. 2 遺構土層説明

8．ソフトロームブロックに明褐色土を含む。
9．褐色土を主体とし、ややしまっている。ローム粒含む。
10．暗褐色土にローム粒・赤褐色粒・炭化粒を含む。
11．標準土層、漸移層。
12．ソフトローム土の小ブロック
13．褐色土にローム粒若干入る。焼土粒も入る。
14．撹乱。
15．暗褐色土。標準土層。
16．褐色土。表土層。

No.13 遺構土層説明

17．ソフトローム崩壊土
18．暗褐色土中にソフトローム土若干混入。
19．暗褐色土。ねばりがある。
20．暗褐色土中に茶褐色土粒多く入る。
21．褐色土中に赤色スコリアが入る。
22．暗褐色土にローム粒・赤褐色粒を含む。ややしまっている。

No.14 遺構土層説明

23．ソフトローム小ブロックに明褐色土を含む。
24．褐色土を主体とし、ややしまっている。
25．暗褐色土にローム粒・赤色スコリアが入る。
26．暗褐色土にローム粒・赤褐色粒・炭化粒を含む。しまっていない。

第23図　溝跡平面図・断面図

えている。埋土は自然堆積であり、掘り返しは観察されていない。

2はG-32とG-33とで確認された東西方向の溝である。現道部分を除き、調査区を拡張して本調査を実施している。上幅は、東側調査区西面断面の観察から、1.2m前後あったものと推定される。表土層直下の黒色土下面から掘り込んでおり、0.4m程度の深さがあったものと考えられる。確認面における溝の上幅は1.0m～0.95m程度、底面の幅は0.30m～0.38mを計測する。溝の平面形はほぼ直線で、検出された溝の範囲では、東に対して6～8度北に振れた区画溝と考えられる。しかし、本遺構の西側に続く地割りを溝の延長と考えるならば、計測値よりも緩やかな振れとなる可能性があろう。溝底面の最深部が、西側調査区のものではやや北側に偏向する傾向を見せているが、標高の比較においてほぼ水平に穿たれた溝であることが明らかとなっている。位置的には、小字「茶畠」から「上境」にかけて広がる台地上平坦面の南端付近にあたっている。埋土から馬の歯と鉄滓とが出土している。

13はG-41で確認された溝である。現道東側7.5mについて調査区を拡張し、本調査を実施している。確認面における上幅は1.25m前後であり、底面の幅は0.4m前後であった。また、確認面から溝底面までの深さは0.5mを計測する。溝の平面形はほぼ直線で、検出された溝の範囲では、東に対して15～16度北に振れている。2や14と比較して振れの強い溝であるが、溝の検出位置からみると、番面台と上細工多とを繋ぐ台地上尾根部のほぼ中央に位置しており、尾根の向きにほぼ直行する溝であることを、指摘することができよう。溝の底面は西から東に向かってやや下がる傾向を有しているが、調査距離7.5mに対して0.10m程度の比高差であり、ほぼ水平とみてよいであろう。共伴遺物の検出をみないが、2・14と類似した褐色土系の埋土であることからみて、古代の溝と考えている。埋土の堆積状況は、自然堆積を示しており、掘り返しも認められていないい。

14はG-58で確認された溝である。現道西側7.7mについて調査区を拡張し、本調査を実施している。確認面における上幅は1.58m～1.04mであり、底面の幅は0.2m前後であった。また、確認面から遺構底面までの深さは、0.45m前後を計測する。溝の平面形はほぼ直線であるが、上幅では東に向かって広がる傾向が認められた。検出された溝の範囲では、ほぼ東西方向に掘られていた。但し、細かくは西端から4m地点までの底面の振れが東に対して2度ほど南に振れるのに対して、東半部は東に対して1度程度北に振れている。また、確認面にみる上幅の平面形でも、西側では3m地点までほぼ平行に掘られた溝が、屈曲点にむかって幅を広げ始めることや、東側の上幅が東端から1m前後を境に屈曲点に向かって狭まることを看取することができる。埋土は、褐色土系の自然堆積土であった。他と同様、掘り返しは認められなかった。共伴遺物として、須恵器高台付杯の破片が出土している。奈良時代の所産であろう。

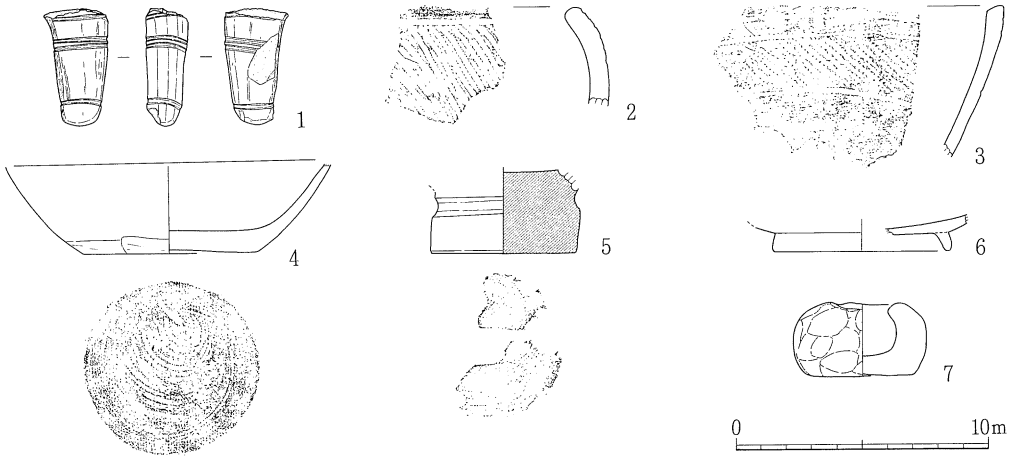
## 4．まとめ（第24図）

能満番面台遺跡の調査では、縄文時代の炉穴４基・陥し穴２基・土坑４基、ならびに奈良時代以降の溝４条を検出し、記録した。このうち共伴遺物を出土した遺構は、炉穴２基（５・６）土坑１基（11）溝３条（１・２・14）の６遺構であった。

第19図の１に示した物は、土偶の脚部であり、土坑11から出土している。縄文時代後期の所産であろうか。G-24とG-５から２と３が、遺構に伴わないが、それぞれ出土している。

溝の調査では、遺構１から焙烙の他に近現代の陶磁器も出土している。但し、昭和30年代の地形図には既にこの溝が認められていない。

遺構２では西側調査区の溝東より上層に、馬の歯11本が纏まって出土している。第19図５に掲載した高台も、本遺構出土の一括資料の中に認められた。６は付け掛けによる施釉を行った灰釉陶器であり、G-24から出土している。高台短部にも釉薬の付着が認められており、トチンを使用していないことが看取される。遺構２の溝を、施設の区画に係るものと考えるのならば、第19図６の時期を含む施設であろうか。遺構２の共伴遺物の中に、鉄滓が１点含まれていることは、上細工多遺跡の遺構などと比較する上で、注目しておきたい。遺構14からは、須恵器高台付杯と併せて、ロクロ土師器も出土している。小片で図示し得ないが、回転糸切り後ヘラケズリ調整をおこなうものであった。表採資料であるが、４に掲げたロクロ土師器も近隣に認められている。遺構外の出土遺物は、G-１～G-25において、細片が少量ずつ認められている。殊に、黒曜石が11点（いずれもチップ）分散的に認められた。縄文後期の遺物の分布と類似した傾向を示している。一方、G-26以南には、出土遺物がほとんど認められなかった。この間は尾根上に当たっており、西からの谷頭部に分布する炉穴などを除くと、遺跡の展開が及んでいない。上細工多遺跡の北限は、遺構14以南にあったものと考えられる。




**第24図　出土遺物**

# Ⅶ　能満旧三山塚の調査

## 1．調査の概要

能満地区の旧三山塚は、能満番面台遺跡調査対象範囲の、ほぼ中央東寄りに築造されている。概測一片21ｍの方形三段塚であり、東側を上細工多まで入り込む支谷に面した、台地縁辺部に立地している。また、当地は、能満の集落から武士方面に至る道（市道114号線）に対して、藤井から唐崎台を抜けて東進する小径がぶつかる、交差点にもあたっている。

調査は、三山塚の西側一片、下二段分が、工事範囲にかかることから実施することとなった。まず、調査範囲内の塚の形状を、50㎝コンターによって計測し、その後、この三山塚が古墳の改作によるものか否かを主眼に、発掘作業を進めることとした。具体的には、塚全面の表土を除去し周溝の有無を確認するとともに、塚築成部分の一部についてトレンチによる土層観察を実施している。

調査の結果、塚の全面には周溝が確認されず、古墳の改作によるものでないことが明らかとなった。また、築成状況の観察からは、表土上に比較的に単位の小さな盛土を繰り返し、版築状に築いていることが明らかとなった。築成段階の途中で祭祀的行為を行っているか否かは、これらの調査からは、明らかにすることができなかった。また、築成部分のトレンチ調査内からは遺物が出土していないため、塚の築造時期を明らかにすることもできなかった。

## 2．まとめ

能満の旧三山塚は、当初より出羽三山信仰（月山信仰）の記念物として、構築されていた。　市原市内の出羽三山信仰は、養老川流域を中心として、古くから、村落に深く浸透している。市内最古の三山碑としては、寛文三（1665）年のものが知られており、中世に発展した熊野信仰と併せて、山嶽信仰が市原に古くから定着していたことを物語っている。市域の出羽三山信仰では、行人になることによって、俗人とは別の一段高い位階に進むという信仰があり、村の会合や葬儀などといった行事においても、上位の人として重要な役割を果たしてきている。三山の築成場所も、こうした意味において、重要な地点が選ばれることになる。

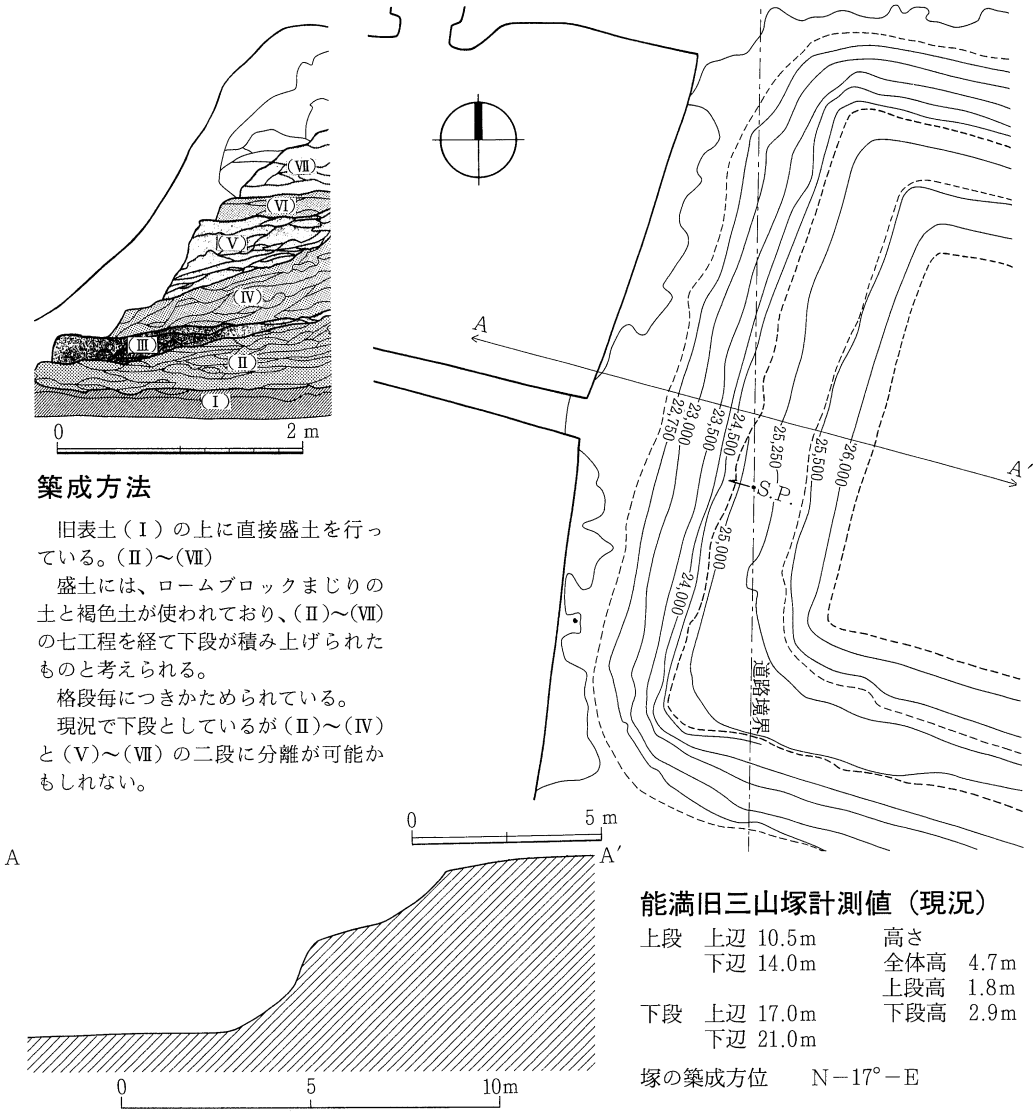
能満の旧三山塚の位置は、どうであろうか。

武士の台地には、国史見在社である武市神社が知られる。また、低地に降りた武士（武市郷）には、現在でも土塁で屋敷地を囲む集落が展開しており、能満の集落とよく似た景観を残している。殊に、小字堀之内には武士堀之内館跡が知られ、集落西端の法泉寺には、建長八（1256）年の木造聖観音菩薩立像が伝えられる等、古代末～中世的色彩が色濃く伺われる。

上細工多遺跡で発見された区画溝の門は、武士等から能満に至る道の初源を物語っていよう。区画溝や門の築造時期の上限は、奈良時代の後半以降、平安時代前半までの間のいずれかであろうが、

区画溝が数時期にわたることや、室町初期の宝篋印塔が出土していること、能満の集落に向かって、南から上細工多、番面台、番面、宿といった小字が並んでいること等を考え併せれば、上細工多遺跡の成立期以降何らかの形で、能満の集落に至る道が確保され続けたことは想定できよう。市道114号線の前身ともいうべきこの道は、古代から重要な歴史的役割を果たしてきたと言って良い。三山塚を交差点として西へ藤井に至る小径も、同様であろうか。

能満の旧三山塚には、明和四年、寛政十年、文政三年のそれぞれの石碑が建てられている。




第25図　旧三山塚測量図・断面図

図版 1
番面台遺跡
旧能満三山塚
上細工多遺跡
上新関遺跡
山倉貯水池
（昭和56年撮影）

東区全景（北より）

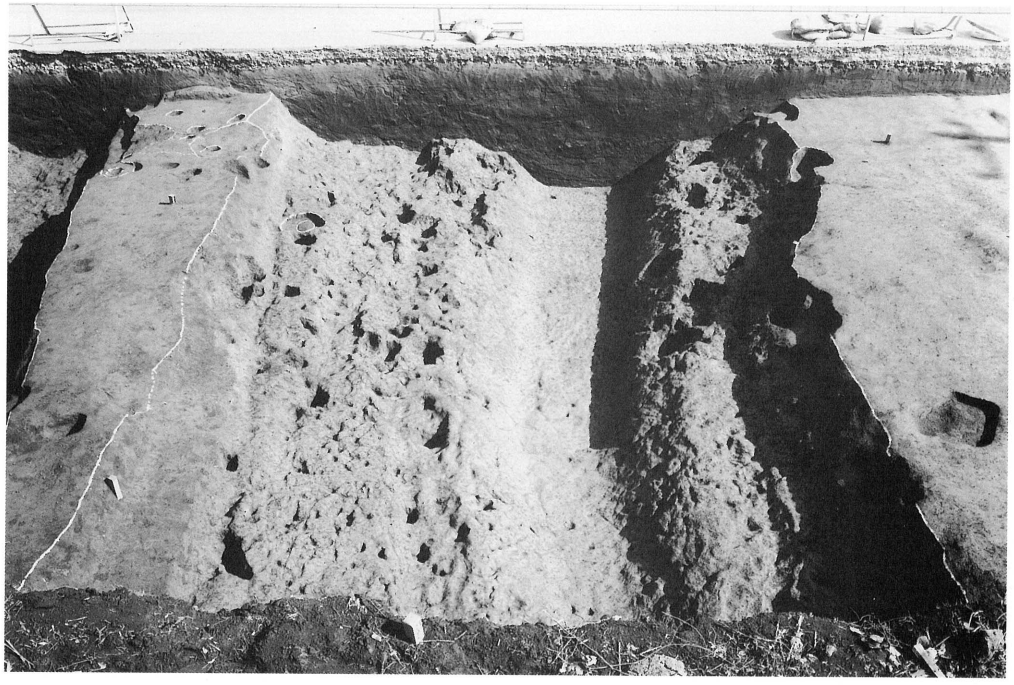
西区全景（北より）

西区全景（南より）簡易舗装による道跡付替え部分が東区にあたる。

東区全景（南より）

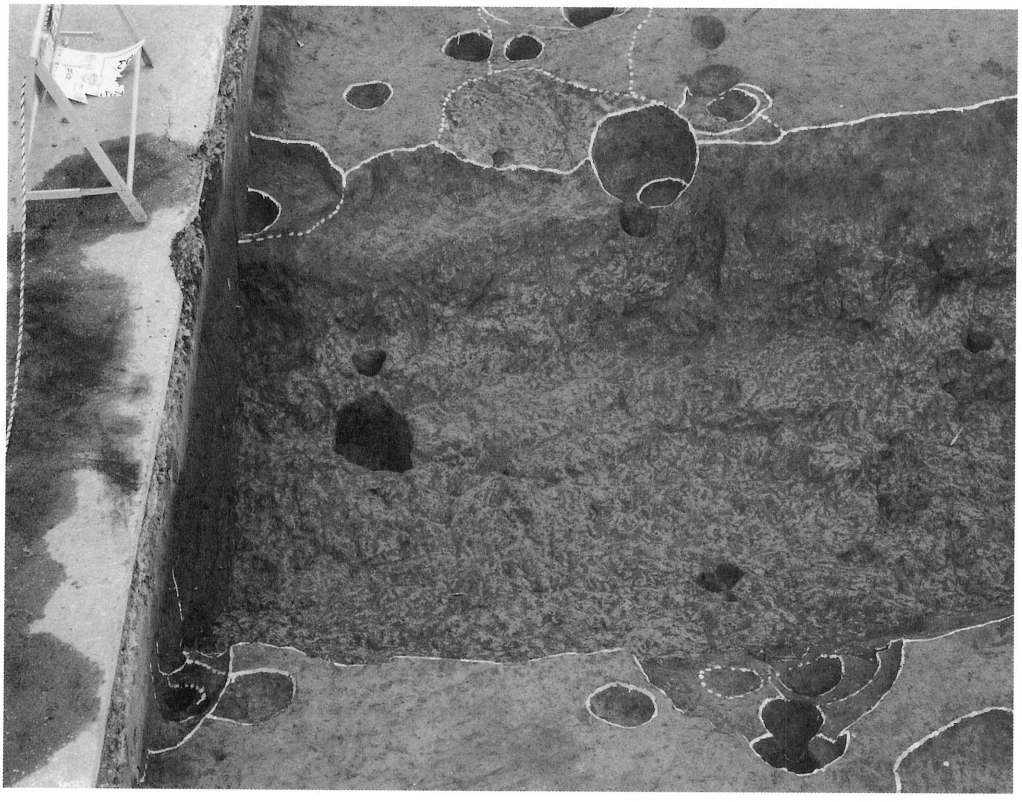
上は左から溝跡001•004•002。右端は003。（西区、西より）下は手前から溝跡001•002。（東区、北より）

上は溝跡002（東区、北より）。下は溝跡002断面（東区東壁、西より）。

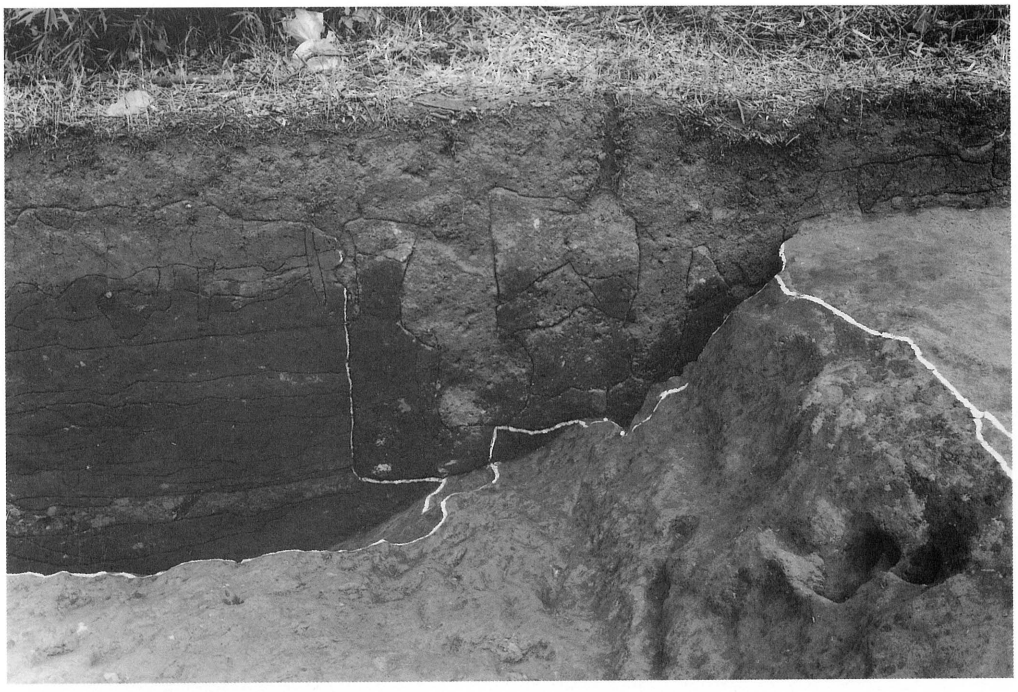


上は西区溝跡003全景（西より）。下は東区003全景（南より）。

西区西壁断面。上から溝跡003•002•001（東より）。第4図(4)断面図は反転しているので、この写真とは左右入替っている。



掘立柱遺構015全景及び近景（西区、北より）。溝跡003をまたぐように建てられ、溝跡001がこの遺構の手前で止っている。

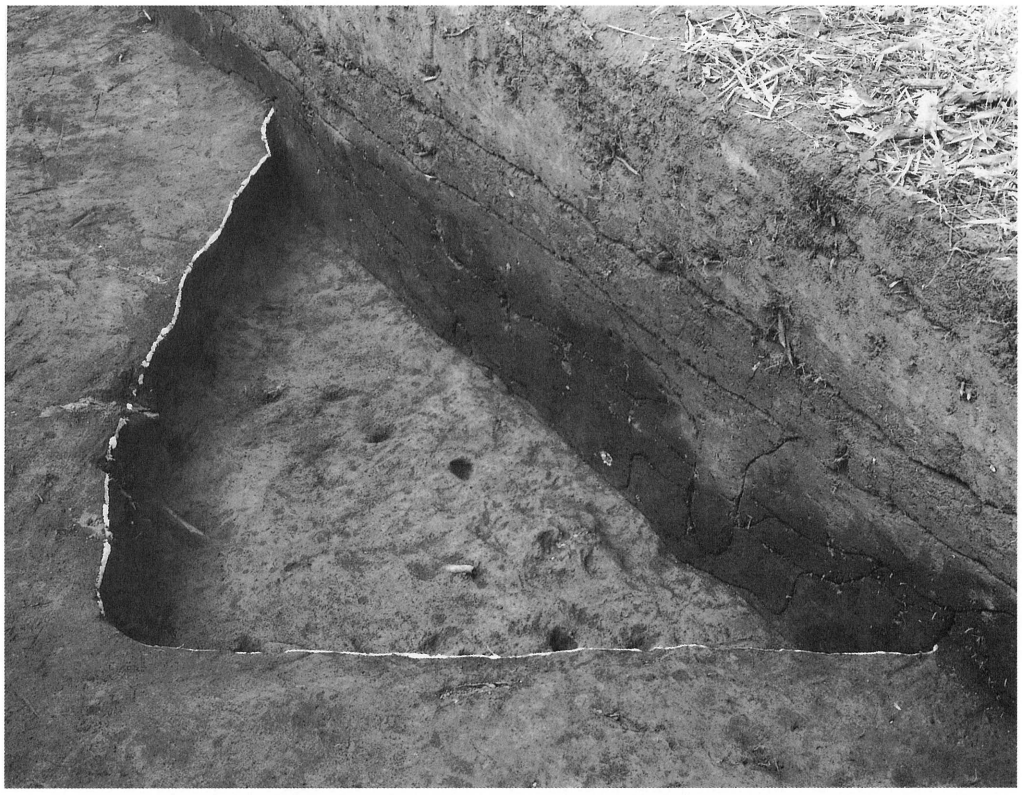


上は溝跡003Ｂ底面に残る掘削工具跡（東区、東より）。下は溝跡003Ａ・Ｂ埋土に掘り込まれた掘立柱遺構。Ｂ（左）がＡ（右）を切る。（東区、西より）。

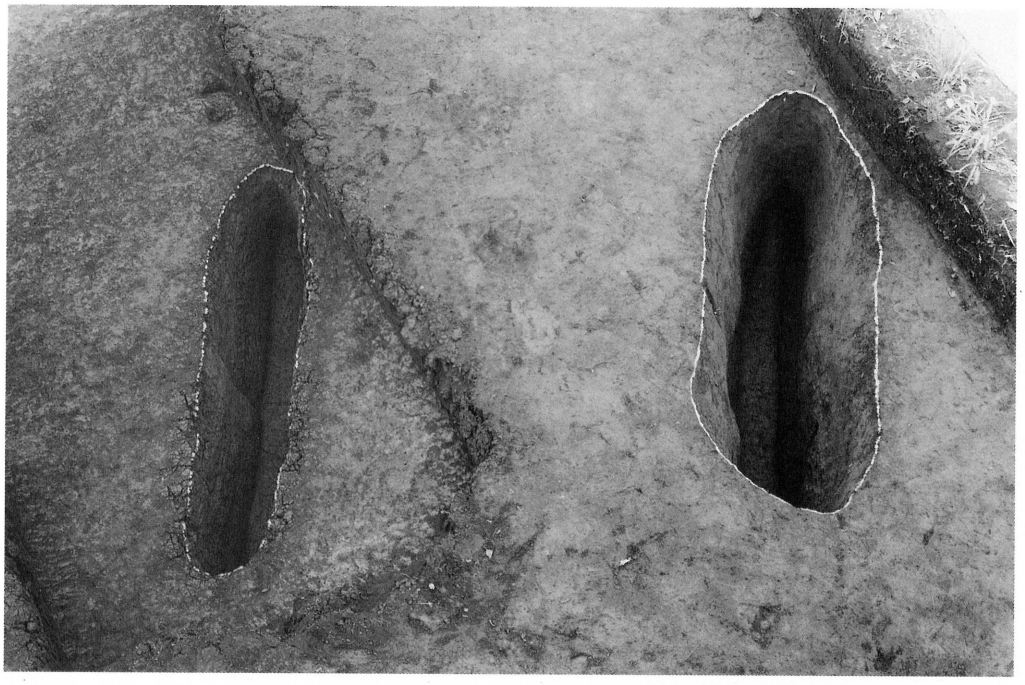
上は宝篋印塔出土状況（東区、西より）。溝跡003Ｄの肩部に近い上層より出土している。下は溝跡003Ｃ埋土に掘り込まれた014馬歯出土状態。

掘立柱建物跡016•017全景（西区、北より）。

上は掘立柱建物跡016全景（西区、東より）。下は同017全景（西区、東より）。

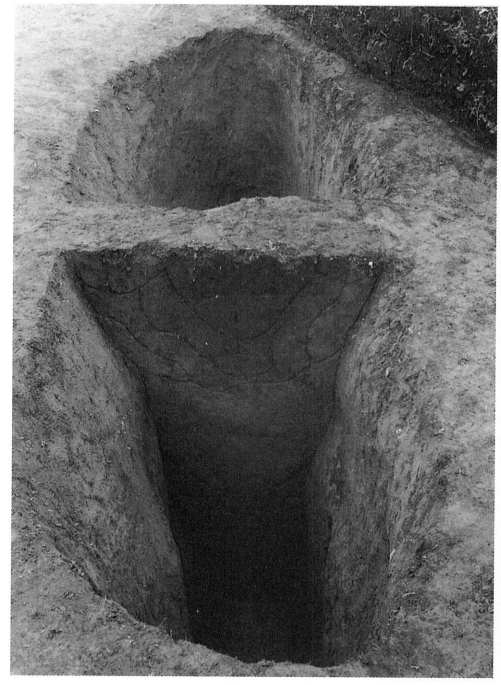


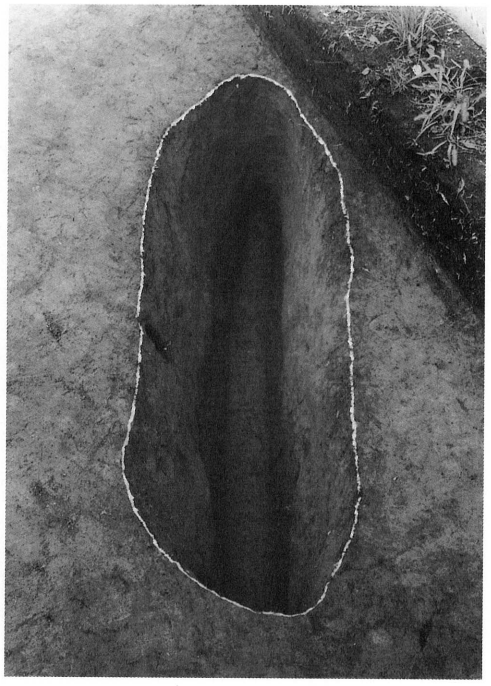
上は竪穴住居跡005全景（東区、南より）。下は埋土堆積状態（東区東壁、西より）。

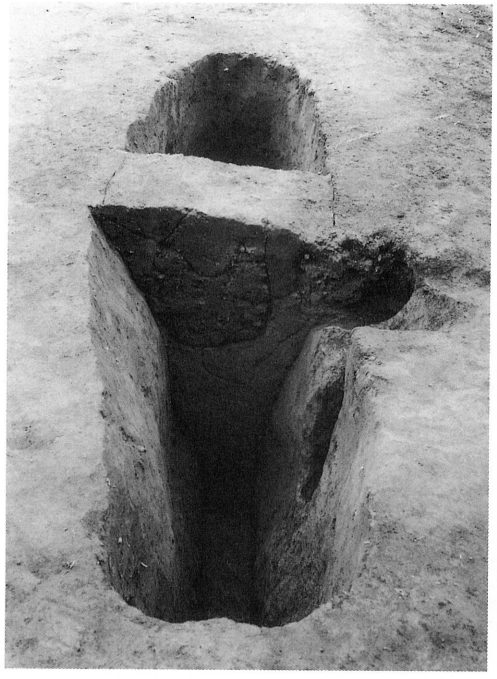


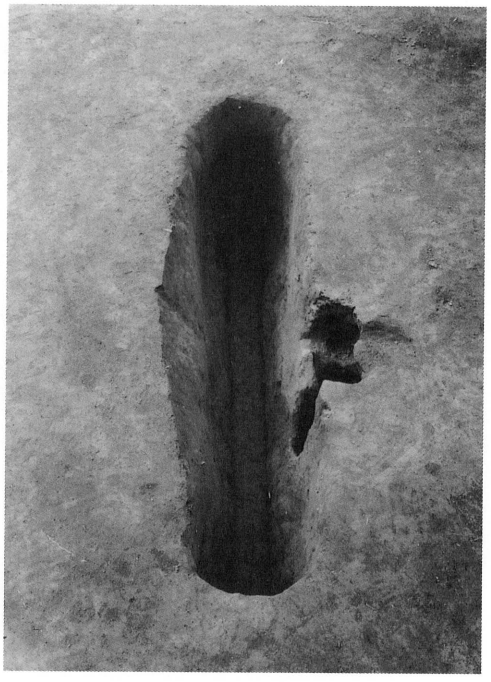
A区陥し穴遺構102•103全景（上は北より、下は東より）103は、確認調査の時点で検出されている。

Ｂ区陥し穴遺構104•105•106•107全景（上は南より、下は北より）。

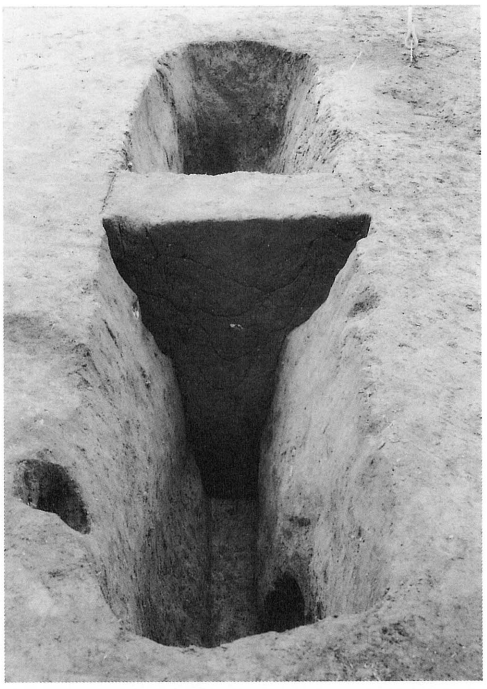


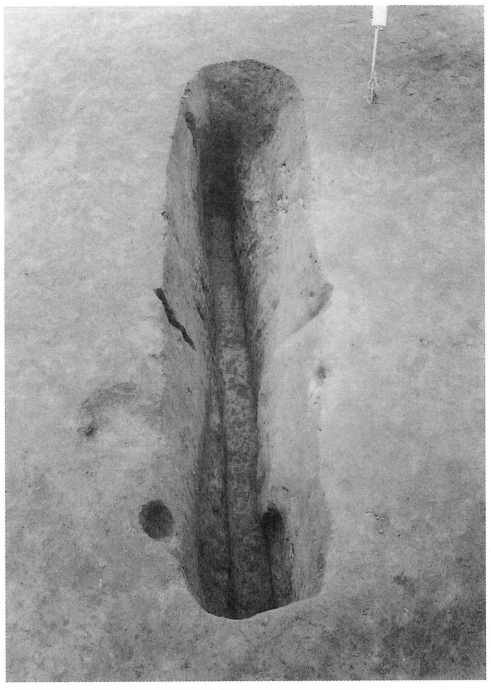


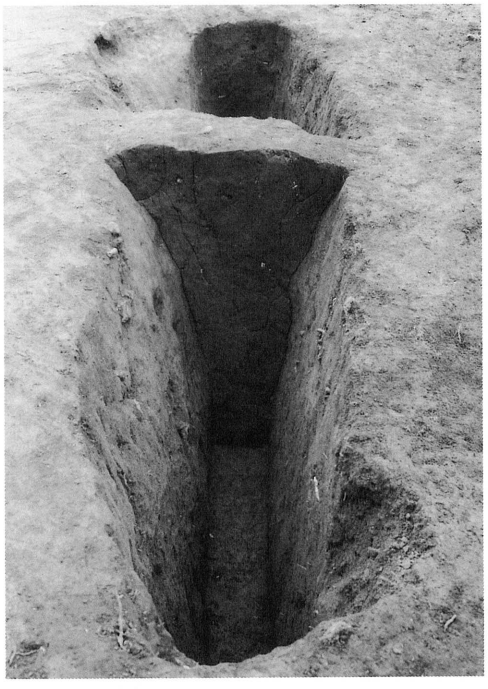


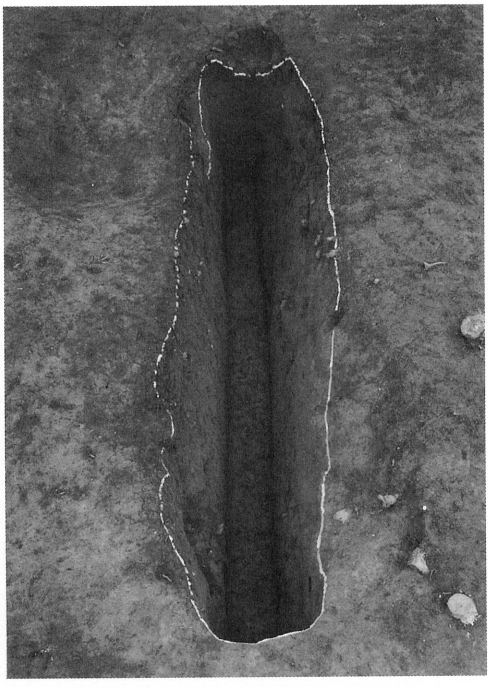


上は陥し穴遺構102（A区、北より）。下は陥し穴遺構104（B区、東より）。

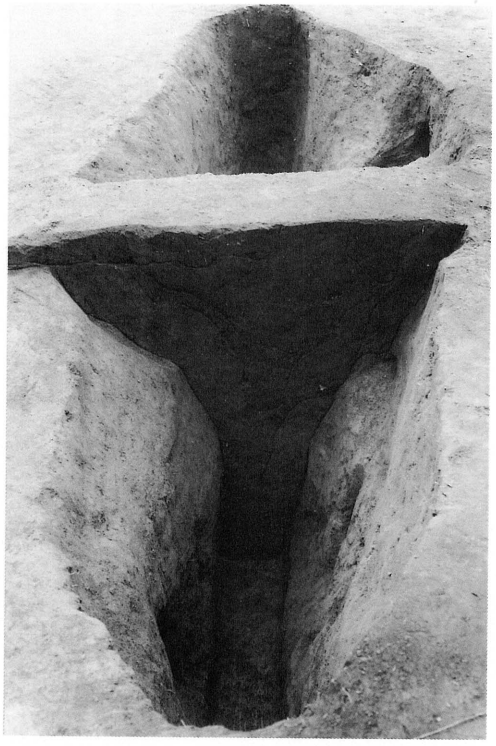


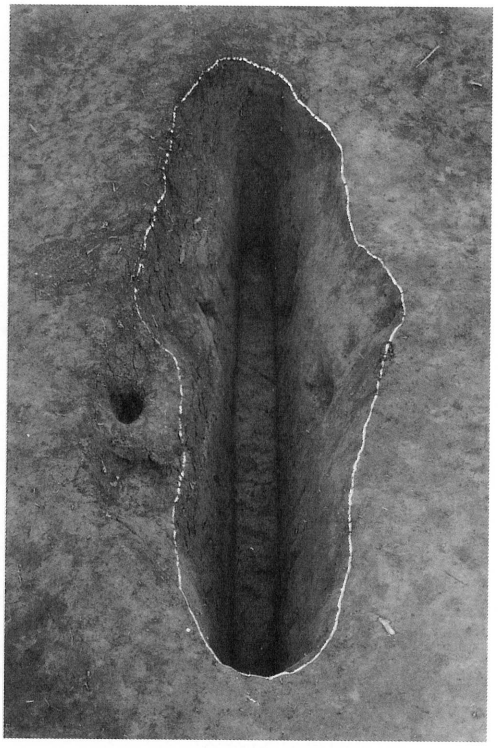


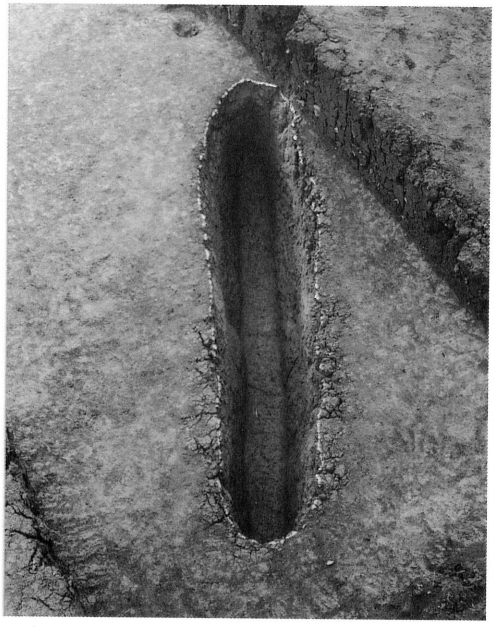




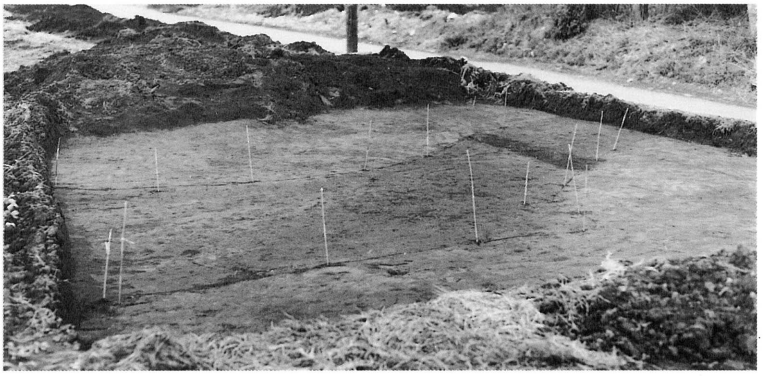
上は陥し穴遺構105（Ｂ区、東より）。下は陥し穴遺構106（Ｂ区、西より）。

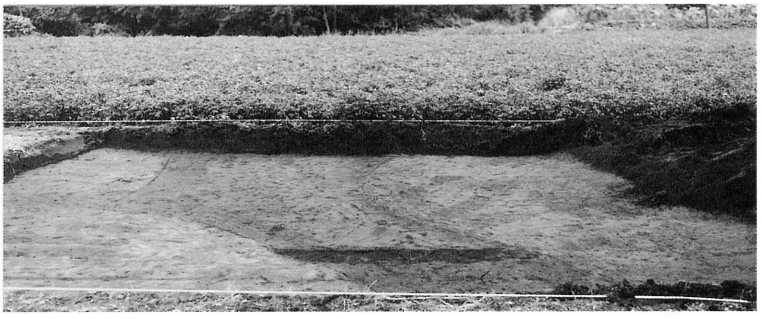


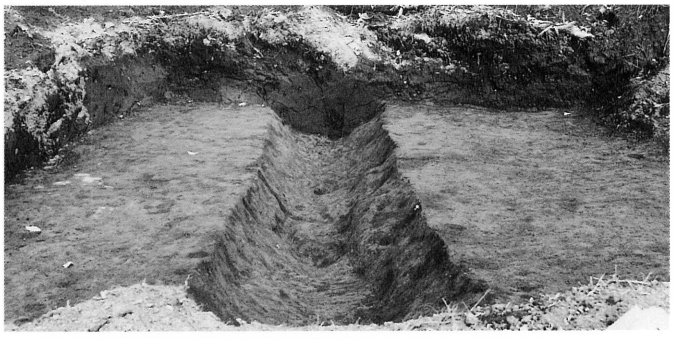




上は陥し穴遺構107（B区、東より）。下は陥し穴遺構102（A区、北より）。







上段 上・下
溝跡001全景
（上は北より、下は西より）

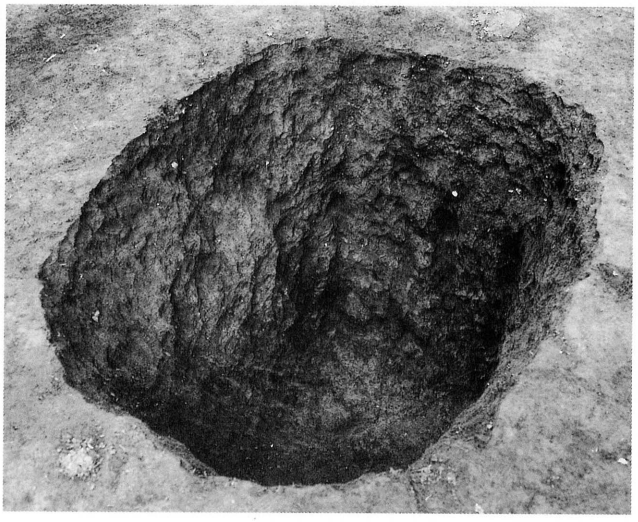
下段 上
溝跡002全景
（西より）

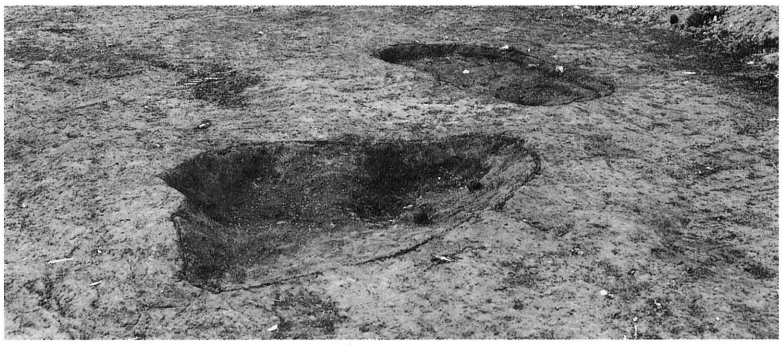
下段 下
溝跡002埋土堆積状態
（西区東壁、西より）

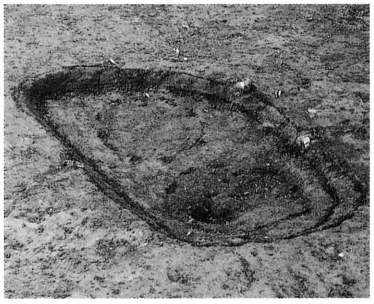
上段　溝跡002全景
（西区、東より）。

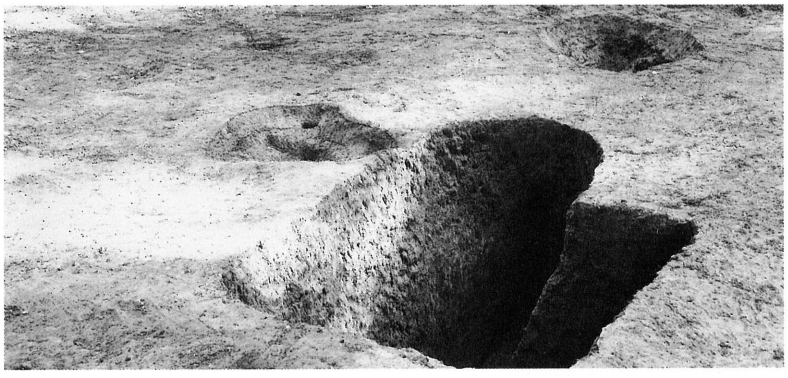
中段 左　溝跡002埋土
堆積状態
（西区東壁、西より）。
右　溝跡002上層
馬歯出土状態
（南より）。

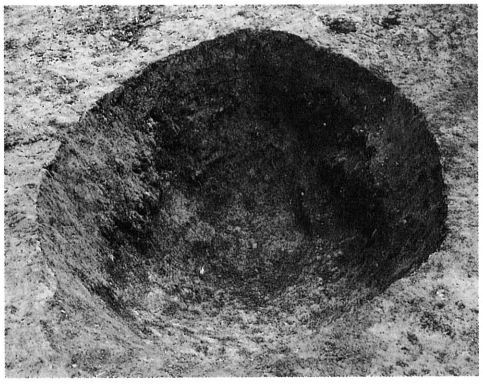
下段　土坑003全景（南より）。



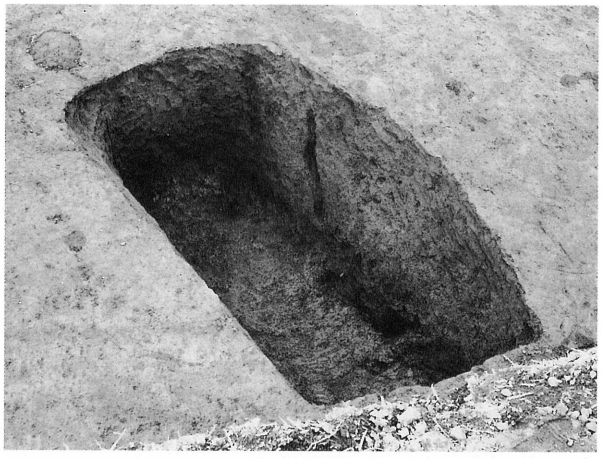


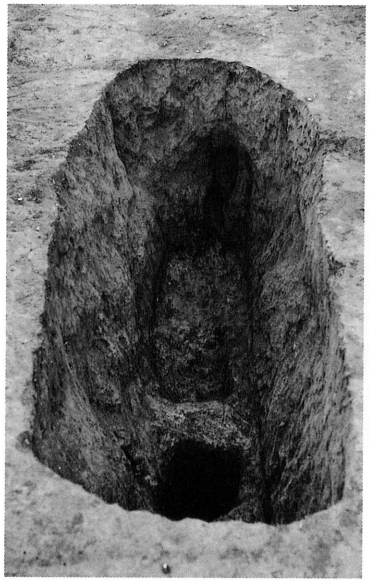


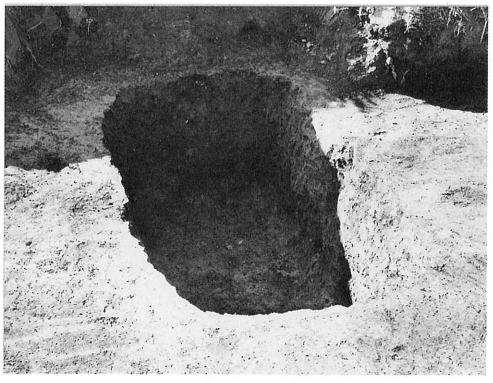




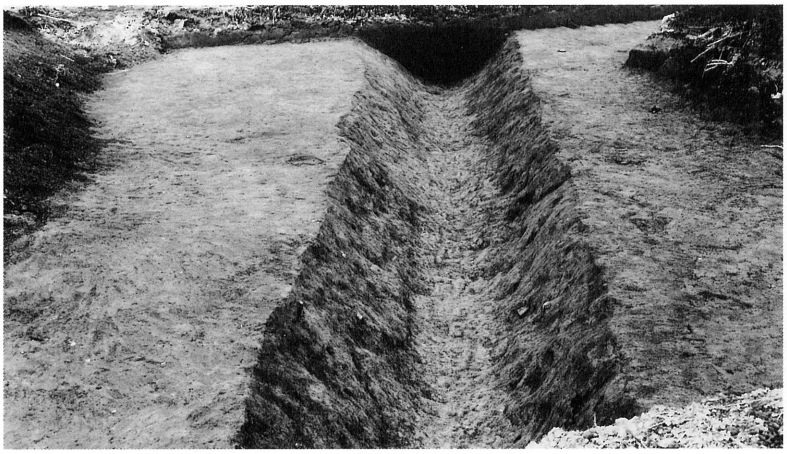
上段は炉跡004•005全景（南より）。
二段目左は炉跡005近景（北より）。
二段目右は炉跡004近景（南より）。
三段目は炉跡006•007、
陥し穴008全景（東より）。
下段は炉跡008近景（東より）。



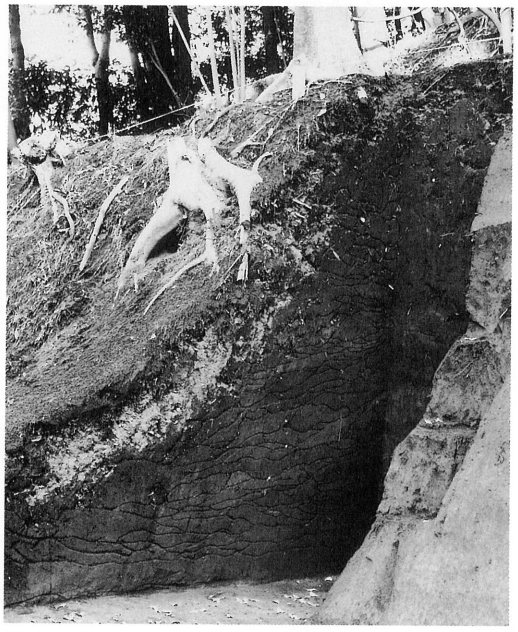




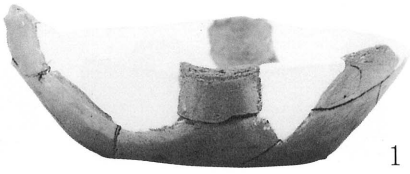
上段左009•010全景（南より）。
　　右009近景（東より）。
中段左010近景（南より）。
　　右011近景（西より）。
下段左012近景（西より）。



上段013全景（西より）。中•下段014全景。



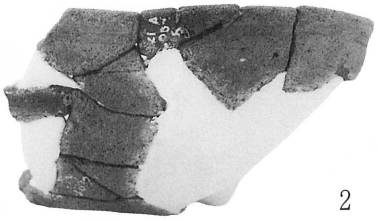
上段　能満旧三山塚調査前現況
　　（北より）。
中段　同上（南より）。
下段　築造状況（南より）。



1
(図13-5・002-9)

4
(図13-2・002-10)

5
(002-10)

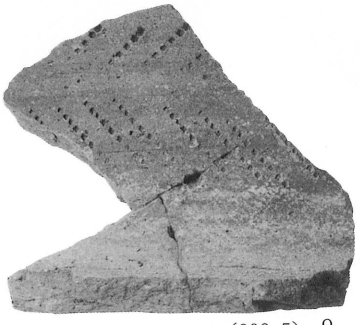


2
(図13-3・002-8)

6
(図13-1・002-10)

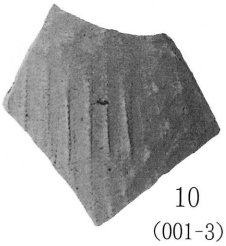
3
(図13-4・002-1)

7
(図13-6・002-13)

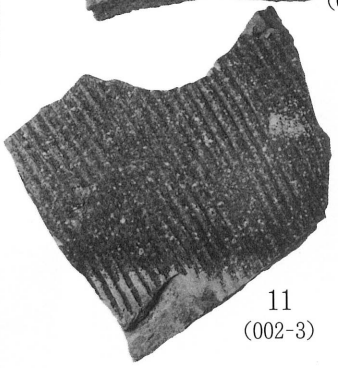


(002-5) 8

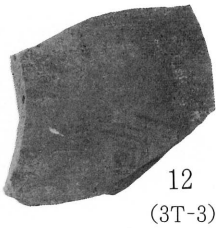
9
(002-5)



10
(001-3)



11
(002-3)

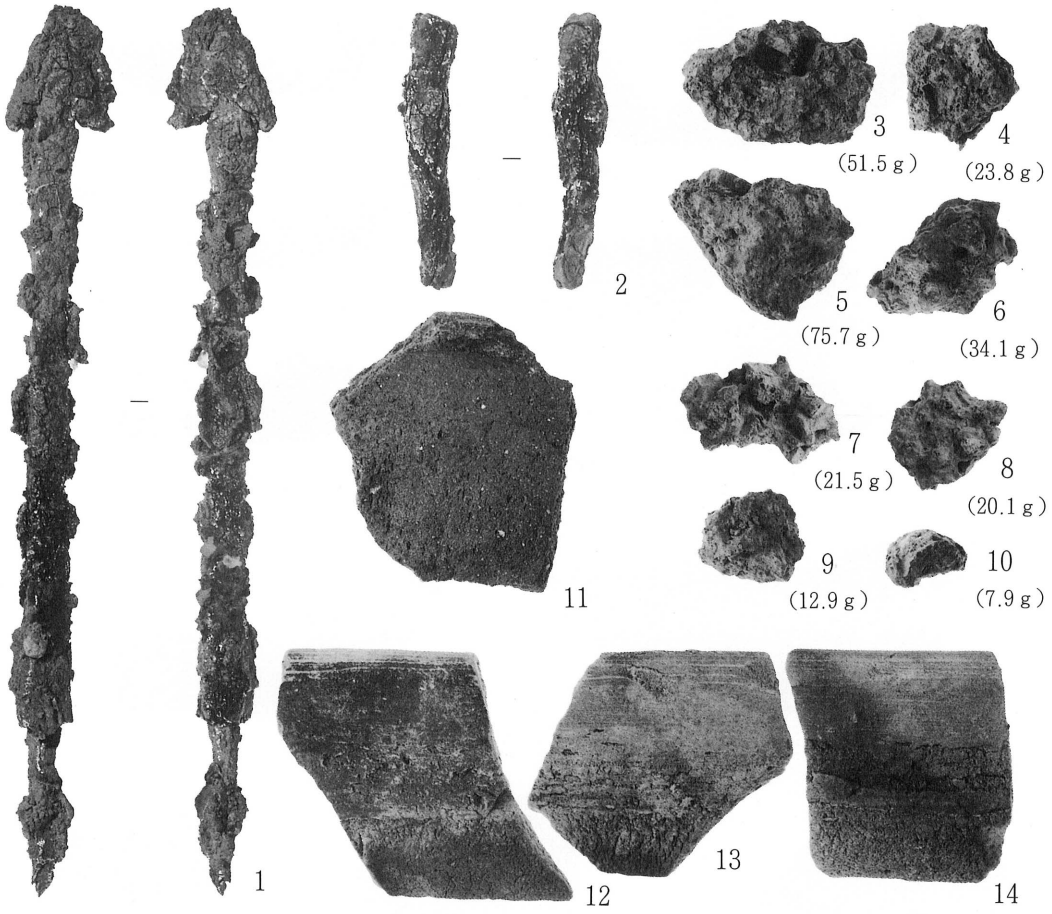


12
(3T-3)

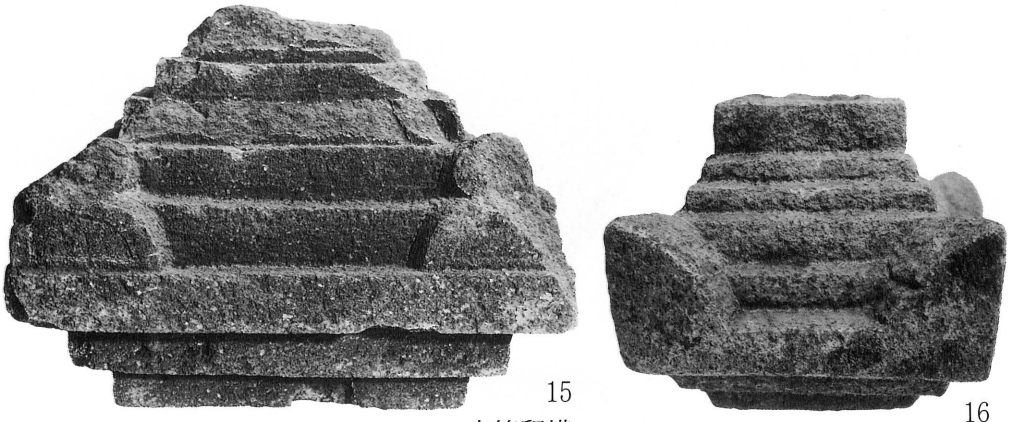
瓦
13
(E15-1)

14
(002-12)

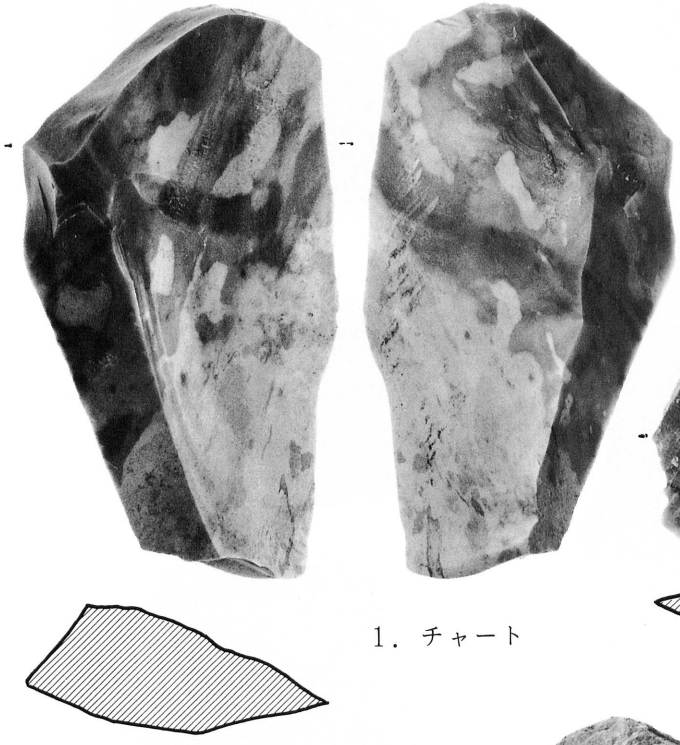
15
(6T-3)



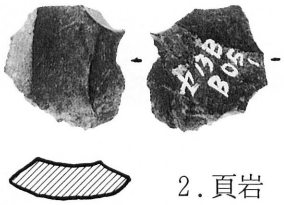

1～2 鉄製品（原寸）　3～10 鉄滓（S＝1/2）　11 常滑　12～14 内耳土器（S＝2/3）



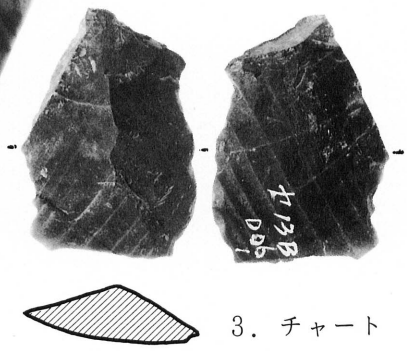

宝篋印塔



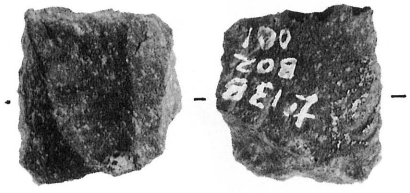
1．チャート



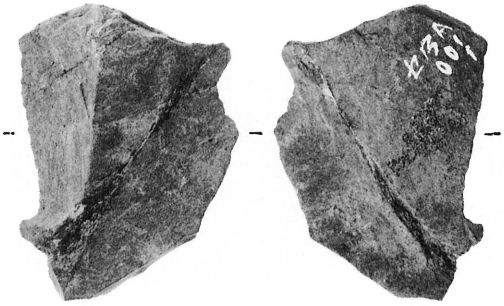
2．頁岩



3．チャート

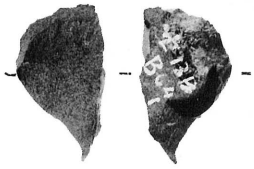


4．
安山岩



5．頁岩

7．
(7T-1)



6．頁岩

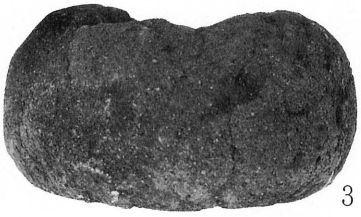
8．
(2T-1)

9．
(2T-1)

1～6は実大

1
（図24-4）

2
（図24-5）



3
（図24-7）

4
（図24-2）

5
（図24-3）

6
（図24-1）

土偶

土器

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | のうまんかみせーくだいせき　のうまんかみにいぜきいせき　のうまんばんめんだいいせき　のうまんきゅうさんざんづか |
| 書名 | 能満上細工多遺跡・能満上新関遺跡・能満番面台遺跡・能満旧三山塚 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 財団法人 市原市文化財センター調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第１２集 |
| 編著者名 | 宮本敬一・田所　真・櫻井敦史 |
| 編集機関 | 財団法人 市原市文化財センター |
| 所在地 | 〒290-0011　千葉県市原市能満1,489番地　TEL 0436－41－9000 |
| 発行年月日 | 西暦　１９９９年３月２８日 |

| ふりがな<br>所収遺跡 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 遺跡番号 | 北緯 | 東緯 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| のうまんかみせーくだいせき<br>能満上細工多遺跡 | ちばけんいちはらし<br>千葉県市原市<br>のうまん<br>能満2038－1 | 12219　セ13 | 35度<br>29分<br>48秒 | 140度<br>8分<br>25秒 | 19840409<br>～<br>19841116 | 593㎡<br>(本調査) | 市原市道114号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査 |
| のうまんかみにいぜきいせき<br>能満上新関遺跡 | ちばけんいちはらし<br>千葉県市原市<br>のうまん<br>能満2038－1 | 12219　セ13 | 35度<br>29分<br>40秒 | 140度<br>8分<br>31秒 | 19840409<br>～<br>19841116 | 480㎡ | 市原市道114号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査 |
| のうまんばんめんだいいせき<br>能満番面台遺跡 | ちばけんいちはらし<br>千葉県市原市<br>のうまん<br>能満1405－4 | 12219　セ９ | 35度<br>0分<br>12秒 | 140度<br>8分<br>17秒 | 19830801<br>～<br>19831030 | 580㎡<br>(確認調査)<br>300㎡<br>(本調査) | 市原市道114号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査 |
| のうまんきゅうざんざんづか<br>能満旧三山塚 | ちばけんいちはらし<br>千葉県市原市<br>のうまん<br>能満1405－4 | 12219　セ９ | 35度<br>0分<br>7秒 | 140度<br>8分<br>18秒 | 19830801<br>～<br>19831030 | 20㎡ | 市原市道114号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査 |

能満上細工多遺跡と能満上新関遺跡は、能溝下中貝遺跡として確認調査ならびに本調査を実施している。

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 能満上細工多遺跡 | 官衛関連 | 奈良・平安時代<br>室町時代初頭 | 掘立柱建物跡　８棟<br>竪穴式建物跡　１軒<br>溝　６条<br>土塁状遺構　１基 | 土師器、須恵器、鉄鏃、鉄釘、鉄滓、宝篋印塔 | 掘立柱建物の南側に区画溝とこれにつく門を検出した。 |
| 能満上新関遺跡 | 生産遺跡他 | 旧石器時代<br>縄文時代 | 縄文時代陥し穴　６基 | 縄文土器、礫、フレイク | なし |
| 能満番面台遺跡 | 生産遺跡他 | 縄文時代 | 炉穴　４基<br>陥し穴　２基<br>土坑　４基<br>溝　４条 | 縄文土器、土師器、須恵器、陶器、瓦、鉄製品 | なし |
| 能満旧三山塚 | 塚 | 近世 | 三山塚　１基 | なし | なし |

—— 千葉県市原市 ——

能満上細工多遺跡・能満上新関遺跡
能満番面台遺跡・能満旧三山塚

平成11年3月25日　印刷
平成11年3月28日　発行

編集　財団法人　市原市文化財センター

発行　市原市　土木部道路建設課
財団法人　市原市文化財センター
〒290-0011　千葉県市原市能満1489番地
Tel 0436（41）9000

印刷　株式会社 国際技報舎　市原営業所
〒290-0001　千葉県市原市惣社867－18
Tel 0436（21）2355